（パレスチナ・わが祖国）
1982年9月20日発行（毎月20日発行）第 3 巻 第 9 号 1980年1月19日 第三種郵便物認可

フィラスティン

PLO Magazine: Filastin Biladi

びらーでぃ 8·9

فلسطين بلادي

中東・パレスチナ問題の情報誌

No. 32 Aug.-Sept. 1982

特集 反核運動とパレスチナ

I “パレスチナ”は世界の変革をせまる 小田 実

II ノーモア・ジェノサイド－パレスチナ人民との連帯を訴える 芝田進午

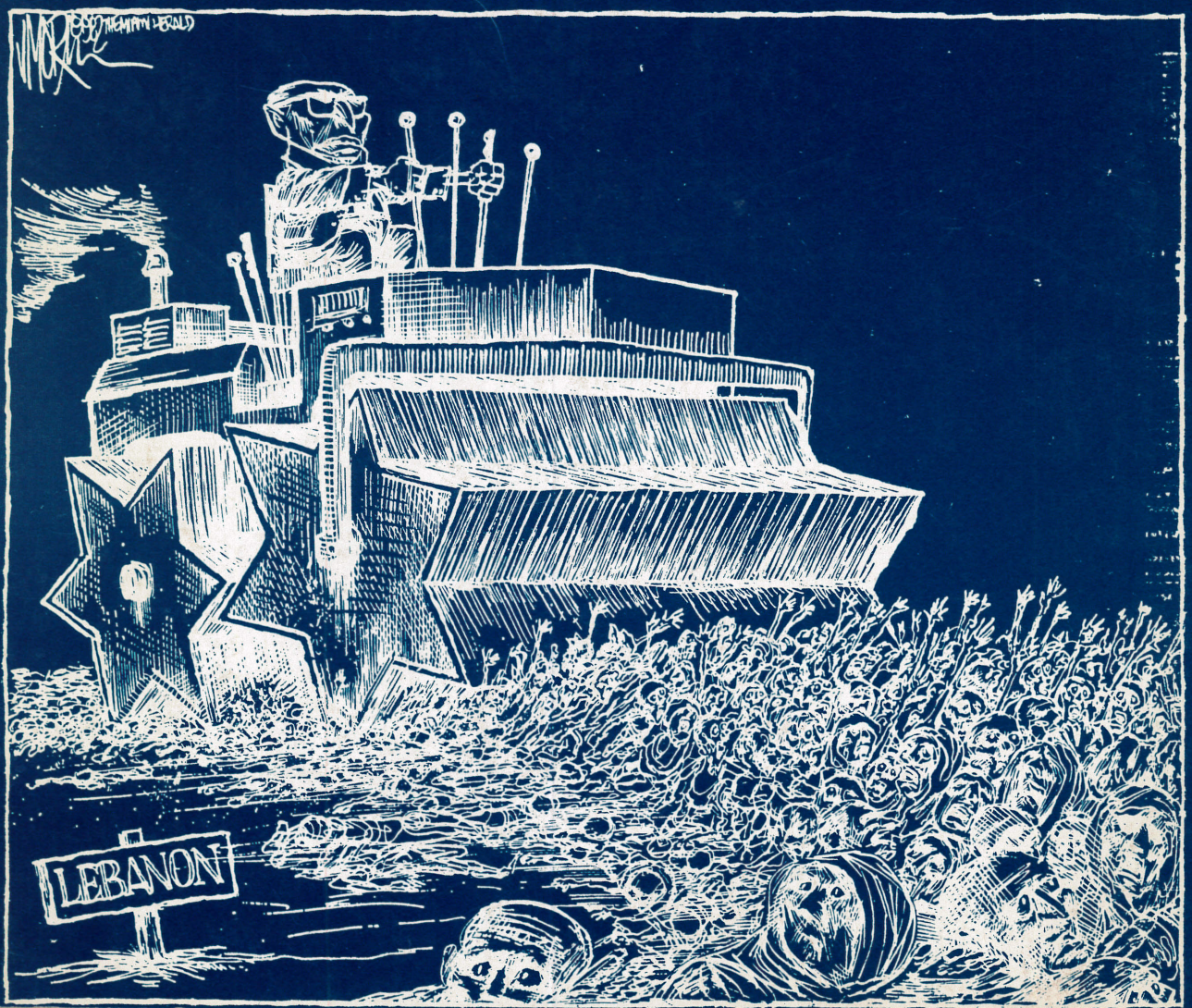
III パレスチナを語るヒロシマの声

栗野 鳳 栗原貞子 宮崎安男 今堀誠二 富永初子 湯崎 稔 関 洋 伊藤 壮 五島昌子

人間ドキュメント⑥ もうひとつのヒロシマを問う—李実根さん（朝鮮人被爆者協議会代表委員）

イスラエルのレバノン侵略

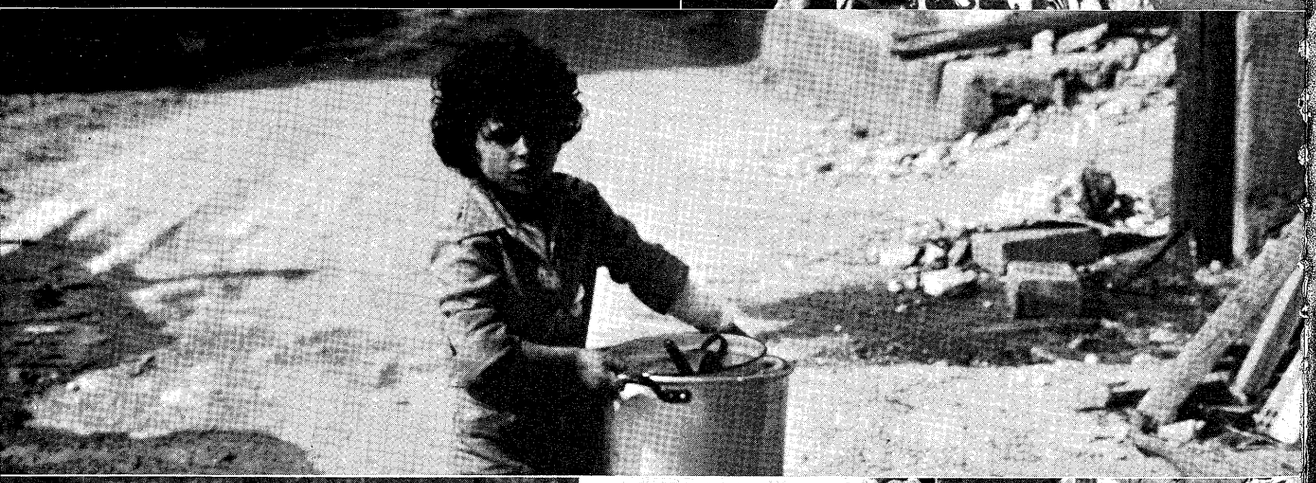
分析I 根深い大国の罪 板垣雄三 分析II 自滅を早めたイスラエル F.アブドルハミード



戦禍のなかの
ベイルート

フリー・ジャーナリスト浅井久仁臣氏が、７月上旬、緊急取材のため、戦禍のベイルートに入った。イスラエル軍の無差別攻撃によって無残に破壊された建物。水道と電気の供給を絶たれながらも、根強く生き抜くパレスチナ人、レバノン人の市民たち。緊迫した重苦しい空気を吹き飛ばす子供たちの笑顔……。

気鋭のジャーナリストがとらえた現在のベイルートの〝街の顔〟を特集した。



パレスチナ人の生活―⑳―
追い出される

ザキーヤはハイファ生れだ。1948年、彼女は家族と共にレバノンへ逃れた。が、その後、レバノン政府によって、他のキリスト教徒のパレスチナ難民といっしょに、ナハル・アル＝カルブに近いドバヤ難民キャンプに移された。

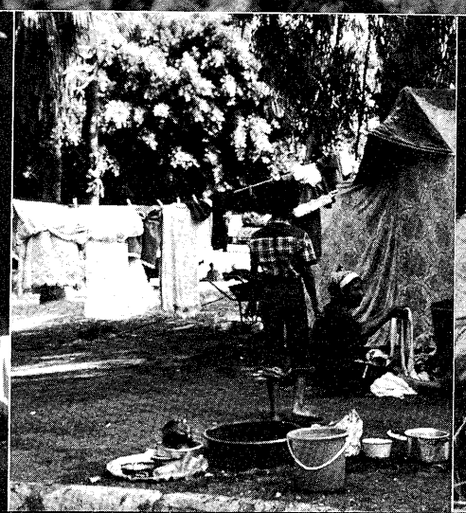
1976年１月、ドバヤ難民キャンプはレバノン・ファランジストとその一味に襲われ、多くの住民とともにザキーヤのたった１人の息子も殺された。ザキーヤは、再び家無しになってしまう。

結局、彼女は西ベイルートに落ちついた。生き残った２人の兄弟、その妻・子どもたち、孫たちもまた同じであった。ザキーヤは夫と離ればなれになり、家政婦として働きに出るようになった。彼女の兄弟とその家族は、ドバイとジスル・アル＝バシャ（東ベイルートにあるキリスト教徒系パレスチナ人キャンプ。1976年に破壊された）から逃れてきた他の家族と共に、サナイの近くの新しい建物に住居をかまえた。

昨日、兄弟たちの住む建物が爆破された。その２人の兄弟と妻たち、彼らの息子や娘たち、その息子たちの妻たち、そしてその子供たち、全部で25人が、瓦礫に埋もれて死んでいることがわかった。ザキーヤの物語には、幸せな終末はなにひとつない。

そして、1948年ガリリーに生まれ育った自分の家から追われて住みついたタル・ザータル出身の人たち、1976年にタル・ザータルを追われた人たち、また先月、ダムールから、２、３日前、ラオーチのあるビルの爆発から逃れてきた人たち……。ザキーヤは、そのような境遇をもつたくさんの人たちの１人なのである。

これがパレスチナ人たちの宿命だ。そしてまさにこれが、彼らが故郷を取りもどし、自分たちのものだとよべる家を手に入れるまでたたかうアラブ世界でもっとも優れた不屈の戦士であるゆえんである。



＊〈フィラスティン・びらーでぃ〉とは「パレスチナわが祖国」という意味です。

今月のことば

…都市・町・村・難民キャンプが破壊され、三万人を越える死傷者が出ています。侵略軍は、五十万余の人が住む西ベイルートを包囲し、食糧・水・電気・医療品の供給を切断し、国際救援組織が市内に入るのを妨害し、これを阻止しています。…レバノン南部では、すでに数万軒に及ぶパレスチナ人たちの仮住いの家が、イスラエル占領軍によって徹底的に破壊されています。

パレスチナ人たちの譲り渡すことのできない権利、つまり自決権、祖国へ帰還する権利、唯一・正統なパレスチナ人民の代表であるPLOの指導下に独立国家を樹立する権利などの諸権利を確認する決議を国際社会はすでに何度か満場一致で採択してきました。

しかし侵略国家（イスラエル）とアメリカ政府だけは、私たちのこれらの権利を未だに認めようとはしません。これは、私たちに対して現在行なわれている戦争の本質を表わしています。というのは、侵略者たちは、私たちを支持する国際的な合意に恐怖をおぼえ、今にいたっては、唯一の解決策はパレスチナ人民を抹殺することだと言明しているからです。

――PLO議長　ヤセル・アラファト（7月20日、セネガルのダカールで開かれた国連パレスチナ・セミナーへのメッセージより）

純粋成長？　アメリカで発行されている「マイアミ・ヘラルド」紙に掲載された政治諷刺漫画。ベギンが操縦すると，ブルドーザーは大量殺人機に変わり，人々の平和への叫びと嘆きもろとも葬り去っていくかのようだ。1948年4月にテロリスト集団イルグンを率いて，パレスチナ人皆殺しを始めた冷血漢ベギンの，34年間の純粋成長ぶりをクローズ・アップさせる。

1982年　8月号
Vol. 3 No. 32

フィラスティン びらーでぃ

目　次

〈グラビア〉戦禍のなかのベイルート……浅井久仁臣……1
NEWS&REPORTS……6
パリ宣言／国際調査委員会、キプロスで会議／世界のキリスト教界が声をあげる／日本人医師の証言／イ軍の生物作戦／婦人総同盟が日本の人々にアピール／伊サッカーチーム　勝利のカップをベイルートへ　ほか

特集　反核運動とパレスチナ

Ⅰ　〝パレスチナ〟は世界の変革をせまる……小田　実……12
Ⅱ　ノーモア・ジェノサイド――パレスチナ人民との連帯を訴える……芝田進午……15
Ⅲ　パレスチナを語るヒロシマの声……栗野　鳳　栗原貞子　今堀誠二　富永初子　宮崎安男　湯崎　稔　関　洋　伊藤　壮　五島昌子（アジアの女として）……18
人間ドキュメント⑥　もうひとつのヒロシマを問う　李　実根さん（在日朝鮮人被爆者連絡協議会代表委員）……26

イスラエルのレバノン侵略

分析Ⅰ　根深い大国の罪――ユダヤ人との共存の道を模索するパレスチナ人……板垣雄三……32
分析Ⅱ　自滅を早めたイスラエル……ファトヒ・アブドルハミード……34
●「反逆罪」に問われながらPLO議長と対話
――イスラエル人、ウリ・アブネリ氏　西ベイルートに入る――……38
●ユダヤ人の二つの顔……桂　由夫……40
●アメリカにおける報道をみて……42
●日本各地各界のイスラエルへの抗議とPLO支援緊急行動②……44
〈ヴィジョン〉堕ちた荊冠――イスラエルを崩壊から救うものは何か……F・アブドルハミード……46
連載　イッコのアラビア語講座⑨……平田伊都子……48
今月の詩　ベイルートのカルバラーの悲劇　ファイズ・アフマッド・ファイズ　片岡弘次訳……50
カセット……11
文化トピックス……31
読者の声……48
パレスチナ人の生活⑳追い出される……表2
日本の画家が描くパレスチナ⑦　作品によせて　片寄未嗣……表3／表4

カット＝ブルハン・カルクトリイ、マハムード・カヒル、V・タマーリ、モナ・サウディ
写真＝UPIサン、WAFA、浅井久仁臣、JPS
表紙題字＝高頭祥八

レイアウト　佐藤俊男

パリ宣言

和平は、友人どうしの間で達成されるものではなく、戦い、そして苦しんだ敵どうしの間で作られるものである。われわれのユダヤ人の歴史感覚から、この切迫した時の情勢をみていると、イスラエルとパレスチナの人民の同時相互の承認の時が来たことを確認する。

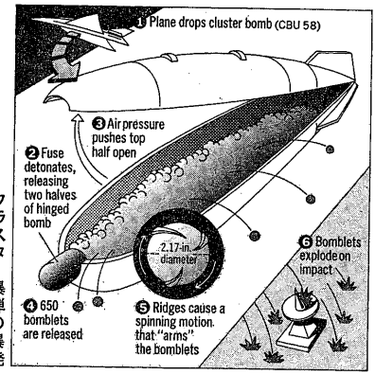
われわれは、アラブ世界が、イスラエルの存在を認めまいとして争いを仕掛けている一方、ユダヤ人がパレスチナ人の独立の権利を認めまいと争う不毛の論争を終らせねばならない。

真の問題点は、パレスチナ人がこの権利を有しているかどうかではなく、イスラエルの安全と地域の安定を保障しながら、パレスチナ人の権利をいかにして実現するかである。

「自治」というような概念は、もはや十分ではない。なぜなら、そういう概念は問題を明瞭化するというより、回避することに使われてきたからである。いま必要とされていることは、イスラエルとパレスチナ・ナショナリズムの間で政治的合意を模索することである。

レバノンの戦争は終わらなければならない。イスラエルはベイルート包囲をやめ、問題解決に導くよう、PLOとの交渉を促進しなければならない。相互承認が、休みなく追求されなければならない。民族自決の原則の上に、イスラエル市民とパレスチナ人民の共存を実現するために、交渉が開始されなければならない。

ピエール・マンデス・フランス
ナフム・ゴールドマン
フィリップ・クルツニック



クラスター爆弾の爆発

①戦骨機がクラスター爆弾を投下する。
②信管が爆発し、爆弾を含む二枚のカバーの止め金をはずす。
③空気圧が先頭の半カバーを押し開ける。
④六百五十個の爆弾球が飛び出す。
⑤爆弾球の〝腕〟と呼ばれる細長い突出部が回転運動をつける。（「タイム」誌7月12日号より）

仏大統領　ナチスの罪を引用

ミッテラン大統領は七月九日ブダペストでの記者会見で「軍事介入はレジスタンスにあうと〝オラドゥール〟を引き起す。ドイツ軍がフランスのオラドゥールでやったことを認めることはできないように、ベイルートなど、世界の各地で今なお絶えないオラドゥールを認めることはできない」とパレスチナ通信の記者の質問に答えた。

これはイスラエルのベイルート侵攻作戦をナチスの〝血の報復〟になぞらえたもの。オラドゥールという村は、一九四四年六月、ドイツ軍が仏地下組織のレジスタンスに悩まされた報復として、村民六四二人を虐殺したところ。

ロンドンでラビのデモ

八月一日にはロンドンでラビ（ユダヤ教の教師にあたる）による大規模なデモが行なわれた。ラビたちは、「ベギンはレバノン爆撃を止めよ」「PLOと話し合え」などのスローガンを掲げて、ベギンとシャロンに抗議する静かなデモを行なった。

マンデス・フランスと、世界ユダヤ人会議の会長をつとめたナフム・ゴールドマンとフィリップ・クルツニックの三人がイスラエルの侵略を非難し、イスラエルとPLOとの交渉を呼びかけた。（↓パリ宣言）*Middle East International*, NO. 19, 16 July 1982 より

駐仏PLO次席暗殺される

七月二十三日、パリ市内の路上でPLOパリ事務所次席代表のファドル・ダーニ氏が、「ユダヤ防衛連盟」を名乗る三人の男に、爆発物によるテロで暗殺された。

PLOパリ駐在のイブラヒム・スース代表は「ダーニ次席はイスラエルの汚れた手によって倒された。我々は欧州に広がりつつある新たなイスラエル・テロの波にフランス世論の意を喚起する」と声明を発表した。

ロンドンで集会

ロンドンのウェストミンスターにおいて七月二十八日、「レバノン人とパレスチナ人に命の保障を」と題して、大衆集会が開かれた。イギリス保守党、労働党、自由党員でつくられている中東協議会が主催して催したもの。

ダマスカスで

八月九日、シリア・ダマスカスで約五千人のパレスチナ人が米国の中東政策に抗議して駐シリア米、ヨルダン、サウジアラビア各大使館に押しかけ、窓ガラスを壊し、米大使館では米国旗を引き降ろして焼き捨て、その代わりにパレスチナの旗を掲げた。

世界のキリスト教界が声をあげる

WCC（世界教会協議会）中央委員会は、六月九日の非難に続き、イスラエルによる西ベイルート封鎖の即時解除を求めることを決定した。

WCCはすでに三人から成る国際的なエキュメニカル問安派遣団を一週間レバノンに送っている。

犠牲者に送られた必要物資分配の禁止と同様に、四人の収容所や難民センターへ国際的な人道的団体が自由に近づくことを妨害しているイスラエル軍の行動に決議文は抗議している。

また文書は、独立したパレスチナ国家の樹立の権利を含むパレスチナ人の自決権という基礎において、パレスチナ問題の解決を求めている。

また、**世界YWCAの常議員会**がフランスのアンネシーで六月下旬から七月下旬にかけて開かれ、イスラエルのレバノン侵略を非難した。

米国の南部バプテスト連盟は「イスラエルは神の選民であり、イスラエル国家は世の終わりに果たす役割を持っている」という同教会の神学的見解を公にする議案を否定している。

フィンランド福音ルーテル教会代表のユバ牧師は、「イスラエルは神の民として神の意志を実行している」として中東におけるイスラエルの行動を支持するフィンランドの一部牧師に反対している。

イスラエル軍の侵略に対するキリスト教界からの抗議は、**カナダ、フランス、オーストラリア、ニュージーランド**の教会関係団体から挙がっている。

キリスト教界では、中東教会協議会が主体になって、ベイルートと南レバノンの人々のために救援活動を行っている。（キリスト新聞　八月七日より）

日本キリスト教団は「中東の平和をもとめる市民会議」とともに、七月二十日、日本キリスト教会館で、イスラエルのレバノン侵略に関する共同記者会見を行った。席上、中嶋正昭氏・日本キリスト教団総幹事は「イスラエルのレバノン侵略を非難する声明」を発表した。

原水協の抗議声明

日本原水協は七月八日、イスラエルと米国に「皆殺し糾弾」の声明を発表し、八月九日、世界大会の名でPLO議長にメッセージを送った。

テルアビブでの十万人反戦集会

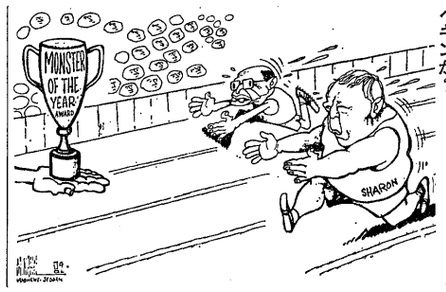
国際調査委員会、キプロスで会議開く

著名な法律家、政治家、文化人などから自主的に組織される**国際調査委員会**が、キプロス外務省の後援により八月十五、十六日、首都ニコシアにおいて召集された。

この委員会は、目撃者の証言をもとにレバノン情勢を検討し、一般に承認された国際法の道徳性・人道性を原則規範とした視点で、解決を見出すものである。

十七人の参加者のうち九人の名前は次のとおり。

一、ジョン・プラッツ・ミルズ（英国・弁護士）
二、ラムゼイ・クラーク（米国・元法務長官）
三、フランシスコ・デ・コスタ・ゴメス（ポルトガル・元大統領）
四、ミキス・テオドラキス（ギリシア・作曲家）
五、アーニー・ロス（英国・労働党の下院議員）
六、E・A・ディサイ（インド・最高裁判所判事）
七、ウラジミール・クドゥリアツェフ（ソ連・国家と法律研究所所長）
八、ドロシー・ホッジキンス（英国・ノーベル賞受賞者）
九、R・L・L・シンジ（英国・ノーベル賞受賞者）



一九八二年度「モンスター・コンクール」の優勝者は、シャロンか、ベギンか？

ベイルートの通信社破壊

ブリストルホテルやアメリカン大学病院、アンナハル新聞社UPI、ニューズウィーク、コモドールホテルなど数え切れないほどの建物が砲爆撃（黄燐爆弾含む）により破壊されている。

ブレジネフ議長の電報

ブレジネフ・ソ連共産党書記長兼最高会議幹部会議長は、PLOのアラファト議長に電報を送った。電報は、PLOのイスラエルの侵略に対する攻戦を激励し、PLOのたたかいを高く評価するもの。緊急に安保理の開催を要請し必要な措置を取るよう、ソ連の国連代表に指示したことも明らかにした。

日本人医師の証言

ベイルートにあるパレスチナ赤三日月社の病院で欧米の医師団と共に医療奉仕活動に参加する日本人医師の信原幸子氏からの生々しく、また切々とした現地報告（六月二十四日付）が送られてきましたので、その一部をここに紹介します。

その日、パレスチナ人居住区を中心にイスラエルは爆撃しましたが、その爆撃中心部から一キロ半も離れているのに、幼い七歳の少年も含めて、ベランダに坐っていた人達が小さい砲弾の破片で四人も死んだのです。ある人は、眼を失ったり、ある人は心臓に破片が突きささり、突然何のことかわからぬ中で死んだといいます。この無差別殺りくは、**クラスター爆弾**が使われていることを示しています。クラスター爆弾は、いくつかの種類があるようで、中には、空中で大砲弾が爆破し小さな破片を飛び散らすものから五段階の爆破をするものまであるといいます。（六頁の図参照）

イスラエル機は、最新鋭の爆撃機で、上空からも爆撃し、高スピードであり、しかも、**フォスフォラス**（燐）爆弾や**ブービートラップ**（偽装爆弾）も含めて、国際法も全くものともせず、このような大量虐殺をやっています。（中略）

もう一つの例では、フォスフォラス爆弾です。パレスチナの若いたくましい戦士が、顔から背中全体、両手と胸部と四〇から五〇パーセントの面積の火傷で、二～三度の重症です。この人と一緒にいた仲間は大部分この爆撃で死にました。また今日は、顔がススだらけというような焦げた患者が運びこまれました。

パレスチナ戦士は現在回復に向いつつあり、もう一度戦場に行くことを待ち望んでいます。実は、彼の家族は被占領地にいるというのです。彼は、被占領地内で十四歳まで過ごし、いとこたちが七人もイスラエルに殺されています。そして、パレスチナ戦士の不屈の闘いの話を聞くなかで、自分でコマンドになることを決意するのです。一人で一ヵ月半かかってレバノンにたどり着いたといいます。

このような戦士は今も被占領地内で投石をし、獄中でもハンストで闘い、またなぶり殺され、次々と育ち、南部レバノン、ベイルートでも、どこででも、同じような祖国解放の強い意志をもって闘っているのです。この負傷した戦士も自分はパレスチナ解放のために喜んで死ぬ、といいます。南部から締め出されようとしている今、また、ベイルート本部への潰滅作戦を目のあたりにしても彼らは希望を失なわないのです。しかし、いっしょにいた戦士たちの死や、弟の負傷をきくたびに、頭をかかえこみ、弟に会いたいと懇願するのです。家族を思い、彼らは闘いを止めることはないでしょう。

難民は、夜もよく眠れず、水も不足し物価も上がるなかで、じりじりとせまる敵の包囲網と、爆撃、砲爆の音、爆弾におびやかされ、若い女性が卒倒する例が激増しています。皮膚病も増えていますし、チフスの流行や、子供の扁桃腺炎、感冒の流行、リューマチの増加が見られます。

この数日間の激しい砲撃（山から海から）によって、まだ地下に病人をかかえている大病院の一つアッカー病院は半分に破壊され、患者が殺されています。このような危険ななかでも、職員は残って救急医療を担っています。難民の数がまだ増えており、チフス病状や皮膚病が増えてくることは目に見えており、難民への巡回診療を開始することが問われています。救援活動を強化し、薬やお金、そして看護婦など送り届けて下されば、どんなに励ましになるかと思います。

自らチフスに犯されながら看護する日本人ただ一人の信原医師（上）
フォスフォラス爆弾の被害にあったベイルート市民（下）

チフスなどの伝染病が拡大

国連災害救助調整事務所（UNDRO）が八月六日にまとめた情勢報告書では、西ベイルートではほとんどの子供たちが悪い水を飲んで下痢にかかり「二三日以内に水の供給が正常に戻らなければ、チフスなどの伝染病が拡大する危険」が強まっていると警告がなされている。

また、イスラエル軍の妨害で水道供給のための電力・燃料・などの供給がなされず、食糧供給の極度の不足、停電などに悩まされ、危機的な状態にある。

イスラエル軍の生物作戦

イスラエルは包囲下のベイルートにおいて、水の汚染や食糧供給の制限などの手段によって「生物作戦」を展開している。

まず、水道の供給を制限することによって、チフスや下痢性の病気をひきおこす伝染性の菌を発生させ、水を汚染しようとしている。

また、水道・電気の供給を停止するなどの手段によって、六十万人の西ベイルート市民に伝染病が拡がりやすい環境をつくりだそうとしている。

さらに、医療品の供給を妨害することによって、発生した伝染病を押さえる手段までも奪おうとしている。

確かにイスラエルは、直接的な菌の散布は控えているが、伝染病が蔓延する環境を意図的につくりだしているのである。これは、近代において一度も実行されたことのない、無差別な残虐行為である。

（WAFA　8月5日）

アッカーのデモ行進

イスラエル（48年占領下のパレスチナ）にあるナザレ市エルサレムでは、イスラエル政府によるレバノン侵略・虐殺政策に反対する大規模な抗議デモがパレスチナ人たちによって、毎日のように行なわれているが、八月五日、初めて北部の都市アッカーでも、パレスチナ人のデモが行なわれ「ベギン政府糾弾」「PLOとアラファト支持」のスローガンを掲げて行進した。

イスラエルで「レバノン反戦」グループ結成

イスラエルにおいて「ピース・ナウ」運動が盛りあがるなか新しく「レバノン反戦」グループが八月上旬に結成された。

この二グループは共同で最近座り込みのデモを行なった。

パレスチナ婦人総同盟から日本の全婦人団体及び平和を愛する人々へのアピール文（大要）

イスラエルによるレバノン侵略は、ベギンとシャロンがPLOの壊滅をねらった犯罪的な冒険であり、それを支援したレーガン政権の帝国主義的な役割が明らかにされました。

パレスチナ解放の事業は、拡張主義をとっているイスラエルのみならず、アラブ世界に帝国主義の覇権を実現しようともくろんでいる者たちにとって、大きな障害となってきましたし、今後ともそうなるでありましょう。

パレスチナの戦士たちはもちろん、私たち婦人たちも子供たちも、レバノン南部の全ての戦線でファシストたちの野蛮な攻撃に抵抗してきました。また、侵入してきた敵と村でも町でもキャンプでもたたかいましたが、これに対して敵は、家々を爆撃し、これらを焼き払いました。彼らは、母親たちや子供たちが避難していた防空壕までも爆撃しただけでなく、パレスチナ・キャンプの全てをこなごなに破壊してしまったのです。

イスラエルの一切の残虐行為はヒットラーが人類に対して行なった犯罪よりも残虐なものであることを裏づける多くの証拠を私達は持っています。

私達パレスチナの婦人たちは、こうした厳しい情勢の中から全世界の婦人団体および平和を愛する人々に訴えます。どうか今すぐ、イスラエル軍を撤退させ、ベイルートの包囲をやめさせるために、緊急に起ち上がってください。同時に、イスラエルの犯罪を全世界が非難し、その告発の声を高めるよう呼びかけます。

また、この機会に、私達は日本の婦人と母親の皆さんが、民族自決権、祖国パレスチナへの帰還とパレスチナに民主国家を樹立する権利の回復をめざす私達のたたかいに対して、さらに支援と連帯を強められるよう訴えるものです。

（一九八二年七月十三日）

婦人総同盟から日本の人々にアピール

在米アラブ大使夫人らのハンスト

ホワイトハウスの正面のラファイエット広場で六人のアラブ女性がハンストを続けている。

行っているのは本誌前号でも紹介したワシントン駐在のアラブ諸国、国際機関代表の大使夫人二十四人で結成した「アラブ婦人協議会」のメンバーたち。イスラエルのレバノン侵攻に対する抗議行動である。

「ベイルートのアラブ同胞たちの苦境を思うと、外交パーティーに出る気にもならず、少しでもベイルート問題解決のお役に立てばと思って……」とサウジアラビア大使夫人。

外交官夫人のハンスト中止を勧める夫君たちの勧告を押し切っての行動。「ベイルート市民が死ねば私たちも死にます」と息まく夫人たちの〝政治的情熱〟を見守っている。

アラブ諸国の婦人デモ

ベイルートでは八月十日、各国の女性医師や看護婦たちが東西ベイルートの境界線に集まり、イスラエル軍に、「爆撃をやめよ」とデモを行なった。十日以前にもレバノン人とパレスチナ人婦人の合同デモが展開されていた。

ヨルダンの首都アンマンや、クウェートでも、パレスチナ女性によって抗議デモが数回、行なわれた。

英国女性スコットさんの訴え

過去三年間、志願教師として西岸のビルゼイト大学で働いていたアン・スコットさん（英国人、25歳）は、ある日曜日、ラマッラー市近くの軍事司令部に寄ると有効労働許可証を保持していたが、旅行・滞在ビザの期限切れを理由に、身分証明書を押収されたうえに、拘禁され、非人間的な扱いを受けた。

七月十四日、スコットさんは拘禁中に受けた虐待を外務省に訴え、女性兵士が野球用バットで上腕部や胸部を殴打したことや「トダー（ヘブライ語で〝ありがとう〟の意）」と言わせては殴ったことを明らかにした。

英国外務省はイスラエルに対し緊急に抗議し、調査を要求した。

伊サッカーチーム 勝利のカップをベイルートへ

七月マドリードで行なわれたワールドカップ・サッカートーナメントでイタリアが優勝したが、そのイタリアサッカー連合はパレスチナ革命を称えて、その優勝トロフィーを一週間ベイルートに送ることを決めた。

これはPLOに対する支援と連帯の表明であり、イスラエルのレバノン侵略、占領への抵抗に加勢する象徴的な意志表示である。

NHKでカナファーニの番組

七月二十九日、NHK教育テレビの夜の番組「マイ・ブック」で、パレスチナが生んだ最も傑出した文学者、故ガッサン・カナファーニの小説が取り上げられ、紹介された。「ハイファに戻って」を作家の井上光晴氏が、「太陽の男たち」という作品については小田実氏が、各々の思いを熱っぽく語り、新鮮な感動を呼んだ。

番組終了後、NHKに本の問い合わせが多かった、と番組の制作担当者は語っている。出版元の河出書房新社は今春、このカナファーニの一巻を再版していたが、放映後、注文が急に増えたということである。

ちなみに、今年の七月八日は、カナファーニがベイルートで爆死させられてから十年めにあたる。

エルサレム展に八千人の観衆

「引き裂かれた平和のまち・苦悩する〝聖都〟そしてそこから散った人びと」をテーマに、十三人の写真家による「光と影のエルサレム展」が、六月十日から十五日まで、東京・池袋の東武百貨店で催された。

会場構成は、デザイナーの杉浦康平氏によるもので、写真は大小あわせて、約二百点。

写真展と同時に、パレスチナ民族衣装（カワール・コレクション）、十六ミリ映画とスライドの三面構成で見せる「映像と音によるエルサレム」、「パレスチナ物産展」なども同時開催された。

六日間の期間に、入場者は八千人を越え、盛況に終った。

絵で呼応し合う核廃絶

東京都美術館で行なわれていた「第三回、第三世界とわれわれ展――核廃絶をテーマに――」が七月二十三日閉幕した。

開催中「連画」という複数の画家が交互に思いを込めて筆を入れていく、絵画によるシンポジウムとも言える新しい表現方法で、パレスチナ解放を叫び、イスラエルの侵略に激しく抗議する叫びを特大キャンパスいっぱいに描きつけた。

期間を通し、足を運んだ五千人の人々の目には生活を脅かす現実の問題として映っていたようで、終始緊迫した雰囲気であった。

タイから、この展覧会期中に、二人の画家が招待客として招かれ、日本の美術家たちと友好を深めつつ、タイと日本の美術活動の特質や問題点を率直に語り合った。なお、パレスチナ人画家のイスマイル・シャムート氏も招待されていたがベイルートのイスラエル猛攻撃で、来日を果たせなかった。ベイルートからは、予定されていたパレスチナ人美術家の作品が日本に送れる状態ではなくなったため、ついに届かなかった。しかし、アメリカ在住人の作品が在日パレスチナ人画家の作品といっしょに展示された。ベイルートで保存されている数々のパレスチナ人美術家の作品が、イスラエル軍の砲爆撃にさらされ、かなりが破損し、美術家たちの生死も全く不明であるという。

パレスチナ版画集

カルクトリイなど現代パレスチナ美術の傑作の版画集（複製）がつくられた。「パレスチナ支援にも活用してほしい」と制作した美術家の一人、鷲見哲彦氏は語っている。一枚千円。申込みは鷲見氏（〇四二五―三六―九二四八）へ。

市民会議がTシャツを

「中東の平和をもとめる市民会議」の有志たち数人が「ベイルートに医療品を送ろう」と呼びかけてTシャツ作りを始めた。パレスチナ人画家ウラジミール・

タマーリさんのデザインによるこのTシャツは、すでに四百五十枚売れた。一枚千円。うち五百円は、市民会議の医療品を送る基金に入れられることになる。

問い合わせは、電話〇四二四―八六―五七九〇（佐藤方）へ。

三留氏が写真集

七月上旬から国連の仕事で、ベイルート初めレバノン各地でイスラエルの侵略戦争のもとで苦しんでいるレバノンとパレスチナの子供たちの実情を取材してきた写真家の三留理男氏の写真集が、八月二十五日に毎日新聞社から刊行されることになった。タイトルは「アッサラーム平和を！――レバノンの子供たち――」。

子供たちの実情を訴える写真に、ルポルタージュ、背景説明地図なども入っており、今レバノンで起こっていることを考える人たちに強烈な迫力で訴えかける写真集。――

敵の抹殺図る愚かさ

加藤周一

私が住む山の中では、さしあたり、人の声を聞くことが少ない。また「テレビ」がないから、世に名高い人々の顔を見ることもない。それでも東京からは新聞が届く。もっと遠い都会からは週刊誌が来る。そこには、さらに遠い所で起こっている戦争の記事が載っている。私は明恵上人のことを考えるように、遠い戦争のことも考えている。

第一、今日の戦争の多くは直接に、東西対立の結果として起こったものではないらしい。別の言葉でいえば、「冷戦」の枠組みで今日の世界を解釈するのは、現実的でなく「ソ連の脅威」に備えるだけが、一国の安全保障ではなかろう、ということになる。

第二、また戦争の多くは、ヴィエトナム戦争以来、組織された軍隊と「ゲリラ」との戦いである。アフガニスタンでは、政府軍とソ連の大軍が「ゲリラ」の掃討をつづけ、エル・サルヴァドールでは、米国で訓練された政府軍三万が、米国から供与されたヘリコプターやジェット機を動員し、五〇人の米国人指導者と共に、四〇〇〇人から六〇〇〇人といわれる「ゲリラ」と戦っている。どちらの場合にも、「ゲリラ」屈服の兆しはないらしい。レバノン領内のパレスティナ人「ゲリラ」に対するイスラエル軍の攻撃はもっと大がかりで、もっと多くの犠牲者を出している。

「ゲリラ」とは何か。毛沢東もいったように、人民の海のなかに泳ぐ者である。「ゲリラ」への攻撃は、必然的に非武装の市民、女や子供の生命の大量破壊を伴う。多数の市民を殺傷された国民は、たとえば三〇年代の中国、五〇年代のアルジェリア、六〇年代のヴィエトナムの人民のように、そのなかからさらに多くの「ゲリラ」を生みだすだろう。外国の「ゲリラ」に対して用いられる圧倒的な武力は、非人道的であるのみならず、ほとんど常に、政治的な問題を解決したことがなかった。

第三、国際的紛争の平和的な解決は、少なくとも相手方との共存、できれば平等の立場での共存を認めることから出発するほかはないだろう。共存を認めなければ、いくさが起こる。その典型的な場合が、中東でくり返された戦争である。殊に最近のベギン政府による電撃作戦は、相手方PLOの解体とシリア軍のレバノンからの追い出しを目的としていたようにみえる。平等の立場での共存を認めなければ、緊張増大と激しい軍拡競争が起こる。冷戦を復活し核戦力を拡大するレーガン政府の政策が、その例であろう。

イスラエル占領下（ヨルダン河西岸とガザ）のパレスティナ人一四〇万、レバノンのパレスティナ人五〇万、彼らに自決権を認めず、政府と国土を認めず、しかも永続きする平和を期待することは、結局できないだろう。イスラエルはまたしても土地を得て、平和を失った」

第四、当事国の国民は、相手方の抹殺をもとめる政府の政策を必ずしも支持しない。レバノン戦線から戻った八十六人のイスラエル軍予備役将校と兵士は、政府に宛てた書簡のなかで、「この戦争に国民的合意はない」といった。一〇〇万人に近い米国民は、核軍拡競争に反対して、ニューヨークの平和集会に参加した。それこそは、米国民の「史上最大の自発的運動」である。もし明恵上人をして今日に在らしめたらば、上人は樹の上から降りて、「セントラル・パーク」の集会にあらわれ、核兵器の時代に共存の原則を認めないほど愚かなことはない、と演説していたかも知れない。

私は山の中で遠い戦争の記事を読み、憶測し、空想している。しかし戦争は、私たちにとって、ほんとうに、遠いのだろうか。（評論家）

――「朝日新聞」7月19日『山中人閑話』敵の抹殺図る愚かさ――自国民からも拒否反応（遠い戦争）」より抄出

えとうた　橋本　勝

（「社会新報」.7月9日
「ものみなうたでわらう七月」に掲載）

こわいぞ　こわいぞ
ナチのおばけは　やりぬくぞ
ナチのおばけは　こわいぞ
すごいぞ　すごいぞ
六〇〇まんにんも　ころされた
ナチのおばけは　すごいぞ
ナチのおばけは　うらめしい
タンクにミサイル
つよいぞ　つよいぞ
かくへいき
ナチのおばけは　つよいぞ
やられるより　やってしまえ
ナチのおばけは
めちゃめちゃだ

特集　反核運動とパレスチナ

〝パレスチナ〟は世界の変革をせまる

小田 実

核と第三世界の問題は結びついている

西欧や日本で盛りあがる反核運動。だが第三世界のある作家は「我々の直接の脅威は、〝核〟ではなく、帝国主義だ」と反論する。では〝核〟と、第三世界がかかえこむ諸問題は、はたして無関係なのか。〝パレスチナ〟も単なる地域的な問題なのか。これらの問題のからみあいを全地球的な視点から、作家の小田実氏は語る。

日本とヨーロッパの反核・反戦運動を語る時、運動の盛りあがりから言えば日本の人々は延々と努力してきたわけで、ヨーロッパの方ははるかに遅れていた。日本は、広島・長崎の体験もあれば、非核三原則や日米安全保障条約の問題で、核に対しては意識的にとらえてやってきている。ヨーロッパでは、核の抑止力で平和を保つという考え方で生きてきた。しかしこれが破綻したため、人々は政策の誤りに気づいた。日本では核の抑止力などまったく信じないで、それに反対するかたちで運動を展開してきたのだが、その抑止力を信じてきたヨーロッパの人たちが、この新しい情勢の展開の中で「核の抑止力は信じられない。それは私たちを殺すことになる」ということを発見した。そしてヨーロッパでの運動が急に盛りあがり、日本にもはね返ってきたわけだ。

ヨーロッパの知識人の運動が盛りあがってきたなかで、昨年の秋、西ドイツ作家同盟の代表が私たちと話し合うため来日した。文学者声明をもって訴えてきたのである。その他日本への要請や、この六月の大きな集会についても話しがあった。ところが私たちがその集会に発見したことは、あくまでもヨーロッパ中心主義のものであったことだ。「それではダメだ。反核の問題にしても反戦の問題にしても、第三世界との関係を抜きにしては語られない」と述べて第三世界諸国も正式に招いて、世界中の人たちが集まる機会にしなければ意味がないのではないか、という話をした。

そしてこの六月の集会には、第三世界諸国からもたくさんの人たちが出席していた。私は二日間、韓国問題の用事で出られなかったのだが、その後出席してわかったことは、おもしろいことに、意見が分かれてしまっていた。というのは、初めヨーロッパの作家たちは反核を語った。もちろん大事だ。しかし、それに対してアフリカの作家たちは「反核なんてある意味では贅沢な話ではないか。私たちにとってはそれほど重大ではない。世界を見た時に、差別とか、抑圧、植民地支配を問題にすることが一番大事だ。核というものは我々の直接の脅威ではない。直接の脅威は帝国主義である。アメリカとか西欧とか日本である」ということを強く打ち出し、意見が二つに分かれたというのだ。

しかしここでアジアというものを考えた場合、アフリカの作家の話は片寄った意見でもある。アフリカは一見、核とは無関係に見えたのであろうが、アジアを見ると核と植民地支配、抑圧、差別などすべてが結びついてくるわけだ。たとえば、韓国には核弾頭が千発以上ある。韓国の独裁政権を支えているのは核だ。フィリピンの場合でも、マルコス政権を支えているのはアメリカの基地の存在である。そこにものすごく核を持ちこんでいる。ミクロネシアをとり上げても、例えばマーシャル諸島にはクワジャリンとい

うミサイルの基地がある。ベラウ共和国の非核憲法をどうしても潰したい。アメリカにとってミクロネシアは非常に大事なわけである。

アメリカの世界戦略体制のなかで、アジアでも対ソビエト戦略が展開されている。その第一線が日本だ。アメリカの防衛のための第一線である。日本、韓国、沖縄、フィリピン、そしてマーシャル諸島が最終的ラインとしてある。現在、アメリカは第二線を構築しつつある。グアム島のアメリカ基地を中心として考えているようだ。

そのようにアメリカにはいろいろな企てがあり、そのなかで、唯一残されているこの信託統治の将来を、植民地化する方向に策動している。つまりそういう大きな世界戦略の展開のなかに日本もあれば太平洋もある。核の問題も戦争の問題も含み込んでいる。同時に、マルコス政権や全斗煥政権の独裁支配、日本との結託、それらが全部結びついて「ごろんごろんになって」ある。それが世界の情勢だ。

イスラエル軍の空爆が続くベイルート市内をさまよう子どもたち

アフリカにおいても同じことだ。例えば、航空母艦ミッドウェーが横須賀に来た。この航空母艦がどこへ行くか。インド洋の真中にあるディエゴ・ガルシアまでいく。アラブとアフリカをにらむためだ。アラブ世界で解放闘争が勝利すれば「それは困る」とアメリカは出動する。現在は、イラン・イラク戦争が最大の焦点となりつつある。それと同じようにアフリカの解放闘争が勝利すれば、アメリカはアフリカへ急行する。アメリカのインタレスト（利権）を守り抜くためだ。日本も、当時の大平外相が、ペルシャ湾の有事の場合、行って協力すると言った。日本のインタレストもアメリカの利権のなかにあるからだ。アラブ世界では石油、アフリカではウラニウム……。

第三世界抑圧の根本に米国の核あり

そういうなかで日本は、日米安全保障条約の拡大を決めた。海外出兵するともいっている。それに対し「行くのはいやだ」とみんながいうので、今度は、徴兵制を実施したいといいだした。このように、みな大きな策動の中にあるわけだ。

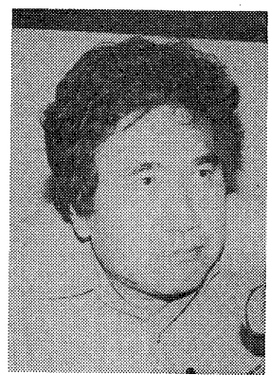
沖縄の基地に行くと、片方でスパイ飛行を北朝鮮に慣行している。同時に飛行機は西の方へも飛んでいる。ディエゴ・ガルシアからアラブまで行っている。またタンクを見ればわかるが、草色に塗ってあるものと土色に塗ってあるものとの二種類ある。草色は朝鮮半島用で、砂漠色はもちろんアラブ用だ。沖縄の海兵隊基地はそういう重要性を持っている。それより大きな広がりのなかに、日米安保体制が入っているのだ。

日米安全保障条約の広がりのなかで、今、核の問題がある。そしてまた、第三世界抑圧の基本のいちばん最後のところにアメリカ帝国主義の核がある。「対ソ戦略」に名前を借りながら、最後は第三世界戦略になっているわけだ。アラブ世界を含めて第三世界がいざという時になれば、ソビエトしか助けてくれるところがない。だから対決するのは、アメリカとソビエトになってしまう。同時にまた、ソビエトはアメリカと歩調を合わせることにより既存の利益を獲得していこうという動きもする。だから第三世界を抑圧するものの最先端として存在しているのが、アメリカの先兵としてのイスラエルであるわけだ。

ここで、イスラエルのレバノン侵攻反対の運動がなぜ盛りあがらないのかをいえば、日本の反戦・反核の運動と、日本の基地の問題と、アジアの戦略の問題が全部アラブと結びついて、その大きな枠組のなかにイスラエルがある、という理解が非常に不足しているからではないか。ミクロネシアと日本を結びつけ、日本と韓国を結びつけ、そしてディエゴ・ガルシア、アフリカ、アラブそしてイスラエルを結びつける、そういう大きな視点に立たない限り、パレスチナ人に同情する一部の人たちしか集まらなくなってしまう。同時にミクロネシアの問題が起こると、ミクロネシアに同情している人しか集まってこない。それは私たちの運動の根本的欠陥ではないか。アメリカは、日本ぐるみの世界戦略体制を展開している。そのアメリカがイスラエルを使って第三世界を抑圧する。そこの焦点になってくるのがパレスチナとイスラエルの問題なのだ。その視点を、こちらのパ

レスチナ解放闘争を支援する運動の側でもっていないと、「レバノンは緊急事態です。助けて下さい」と言っても一握りの人しか集まらないし、それでは効果がない。「安保がらみの、ものすごく大きな問題としてあるのだ」「日本の安全もそこにかかっているのだ」というように運動を理解しなくては広がっていかない。

現在、世界は非常に重大な状況にさしかかっていて、世界の危機でもある。その時々の状況によって何が起こるかわからない。体制側は着々と手を打っていて、ペルシャ湾まで範囲を拡大した。彼らがイラン・イラク戦争で一番恐いのは、湾岸諸国にまで革命闘争が波及することだ。イランの方は「エルサレムの解放」をさかんに主張している。ある意味でファナティックな問題かもしれないが、力を持っているかもしれない。湾岸



諸国でイラン革命のようなものを起こされると、アメリカにとっては大変なことになってしまう。日本も然り。イランの革命の時、石油の生産削減があった。「石油の生産を決めるのは我々だ」という、石油に頼らないイラン経済をつくる考え方があった。石油に頼らないアラブ経済というものをこれからつくっていく可能性があるわけだ。でも石油に根本的に頼らない新しい理念に立つようなアラブ世界ができ上がった時、西欧世界や我々は完全に危機に立ってしまう。そういう石油戦略の展開を根本的なところで捉えた闘争の理念をいちばん提供したのが、パレスチナ解放闘争だ。アラブ、パレスチナ人民の一人一人のたたかいがなければ石油戦略の展開はありえない。そこがパレスチナ解放闘争の最も恐いところだ。

〝パレスチナ〟を世界情勢とからめて

今世界は、二つの写真に直面している、といえる。一枚はヒロシマ・ナガサキのキノコ雲。つまり核の問題。もう一枚の写真は、飢えた民、またはパレスチナ解放闘争の写真。つまり貧困、差別、植民地的抑圧の問題。

その片方だけに言及してもダメだ。例えば、反核・反戦は絶対必要だ、と叫んでも、それが単なる世界の現状維持を意味するのなら、第三世界は救われない。「反核」と「変革」が同時に必要になってくるわけである。

パレスチナの解放闘争のすばらしいところは、世界全体が変ることを必要としていることだ。「そのなかに、我々の将来はある」と考えている。

日本の将来を考えてみた場合、世界が変らなければ、本当の意味での、日本の将来はない。というのは、日本は先進国といいながら、第三世界との関係のなかで生きている、資源のまったくない貧しい先進国だ。世界全体の在り方を改変するように日本人民が努力する、ということが、どうしても必要になってくる。

今人々は、何がどうなっているのか解らないが何となく危機がきていると思っている。危機の根本は何であるのか。我々は将来どのように生きていったらいいのか。我々はそういう大問題に直面しているわけだ。我々は、日米安保にがんじがらみにされて、アメリカの対第三世界戦略に巻き込まれている。または自ら協力して身を委ねている。そういうアメリカとの関係の認識を持たなければならない。そうした関係を絶てば、アジアの情勢は変り、世界の情勢が変っていくはずだ。

日本の反核の運動は、日本が軍国主義化し、右傾化していく動きを少しは止めた効果はあったと思う。しかし一方では安保に対する強い態度が失われている。だが私は、運動にある一つ一つの問題を批判してもしかたないと思っている。そこから次の段階を考えるべきである。

やはり反核運動が何もなかった状況から切り開かれたということはすばらしいことだ。少なくとも認識に対する手掛りを持っている。手掛りを持っている以上特に若い人は「知りたい」という欲求を持っている。会合にも若い人がいっぱい来る。彼らが「知りたい」という欲求を持っている以上、我々の持っているいろいろな認識や、我々の考えているものを伝えていくべきだと思う。パレスチナの問題を含めて。だから前よりもものごとの真実を知りたいという基盤があるわけで、パレスチナ問題もパレスチナ問題だけを伝えるのではなくて、日本といかにからむのか、世界情勢といかにからむかを必死に言うべきだ。そして人々は今、それがわかる時にきている。

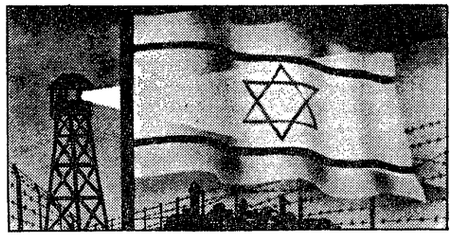
反核運動に対する日本政府の考え方を示す、端的な例がある。

私たちがケルンに行った時、10フィート運動のフィルム「予言」を持っていった。日本政府の外郭団体が運営する「日本文化館」で上映することにした。西独の方も話をつけてくれた。ところが土壇場になって、「日本文化館」が上映を拒否した。「これは政治的である。文化ではない」と。怒った私たちは、「ほな、文化とは何や」ときいた。それに対し、日本大使館員が、日本政府の見解を代弁してこういった。「〝いけ花〟や〝お茶〟が日本の文化である」と。

西欧の作家が、非常に皮肉をこめていった。「『日本文化館』という名前をやめて、『日本いけ花館』にしたまえ」。

（七月十六日談　まとめ・編集部）

ノーモア・ジェノサイド



パレスチナ人民との連帯を訴える

——芝田進午（広島大学教授　哲学・社会学）

一、ジェノサイドとはなにか

人間にとってもっとも大切なものは、生命である。だれでも、たった一つしか生命をもたず、このかけがえのない生命を自由に、幸福をもとめて生きぬく権利をもっている。だから、この人間のもっとも基本的な権利、生きる権利を侵害することほど、重大な犯罪はなく、人間性に反することはありえない。したがって、いかなる国の刑法においても、他の人の生命をうばう殺人行為は、当然のこととながら重罪とみなされ、厳重に処罰される。

ところが、人類の歴史においては、この殺人行為が国家の侵略行為としておこなわれるときには「戦争」とよばれ、そのさい、殺人が大量におこなわれればおこなわれるほど、その犯罪人である政治家、国防相、将軍たちは〝英雄〟とみなされ、賞賛されてきた。まことに人類の歴史は、そのような「戦争」すなわち「大量殺人」によって、勤労人民、被抑圧民族の血が大規模に流されてきた歴史にほかならなかった。

しかし、二〇世紀になってから、とりわけファシズムの出現以来、この大量殺人が非戦闘員である平和な市民、老若男女にも意図的・計画的に拡大され、ある地域の住民、ある政治的・宗教的見解をもつ市民、ある人種ないし民族が集団的に虐殺され、また流浪の民にされ、その生存がおびやかされるようになった。そこから、〝ジェノサイド〟（集団殺害、民族虐殺）という新しい言葉がうまれた。第二次世界大戦末までのそのようなジェノサイドとしては、日本帝国主義による朝鮮・中国・ベトナム等、アジアの諸民族にたいするジェノサイド犯罪、アウシュヴィッツをはじめとするナチス・ドイツによるユダヤ人、ポーランド人、ロシア人などにたいする絶滅犯罪、イタリア・ファシズムによるエチオピア人にたいする絶滅犯罪、スターリンによる〝大量粛清〟犯罪、アメリカ帝国主義によるヒロシマ・ナガサキにたいする核兵器による絶滅犯罪などがあげられる。

第二次世界大戦の終了の後、国連がつくられたが、その目的の一つは、ジェノサイド犯罪を永久に地球上から一掃することであるとされた。そこで、国連総会は、はやくも一九四六年一二月、ジェノサイドが国際法のもとで犯罪であり、国連の精神と目的に反することを宣言した。そして二年後の一九四八年一二月、国連総会は、「ジェノサイド禁止条約」を採択し、その第二条でジェノサイドをつぎのように規定したのである。

「本条約においては、ジェノサイドとは、ある民族的・少数民族的・人種的ないし宗教的集団を、全面的あるいは部分的に、絶滅する意図をもって犯されるつぎのような行為のいずれかを意味する。

a、集団の成員の殺害。
b、集団の成員に重大な身体的ないし精神的危害をおよぼすこと。
c、集団の生活条件に意図的に影響をおよぼし全面的ないし部分的にその身体的破滅をもたらすこと。
d、集団内における出生を妨げるような手段をとること。
e、集団の子どもを他の集団へ強制的に移住させること。

つぎの行為は処罰される。

a、ジェノサイド。
b、ジェノサイドを犯す陰謀。
c、ジェノサイドを犯すように直接に、また公的に扇動すること。
d、ジェノサイドを犯す試み。
e、ジェノサイドのための共謀。」

このように、ジェノサイド犯罪は、国際法的にみてきわめて明確に定義されたが、この条約に挑戦するかのように、その後もジェノサイド犯罪が、細菌戦争、化学戦争の方法も採用されて、くりかえし犯されつづけてきた。その主要なものとして、われわれは、つぎの犯罪をあげることができよう。

アメリカ帝国主義による朝鮮戦争とベトナム戦争におけるジェノサイド犯罪。アメリカ帝国主義による太平洋環礁における核実験とそれによる太平洋住民への

ジェノサイド犯罪、アメリカ帝国主義による核戦争ジェノサイドの一連の恫喝・陰謀犯罪、ポル・ポトのカンボジア人民大量殺害犯罪、中国侵略軍によるベトナム住民へのジェノサイド犯罪等がそれである。わが国ではあまり知られていないジェノサイド犯罪として、南アフリカにおける非白人にたいする犯罪、ナミビア人民にたいする南アフリカ支配層の犯罪、北アフリカのルワンダとブルンディにおけるフートウ族（一二万人）にたいするジェノサイド（一九六三―七二年）、ナイジェリアにおけるイボ族（一〇〇万人）にたいするジェノサイド（一九六六―七年）、バングラデッシュ人（三〇〇万人）へのジェノサイド（一九七一年）、東チモール人民にたいするインドネシア政府によるジェノサイド（一九七五年以降）等をここでつけくわえておかなければならない。

右にあげたジェノサイド犯罪に責任をもつべき政府のうちに日本政府の名前があげられていないが、アメリカ帝国主義によるジェノサイド犯罪の多くについては、日本政府は、外交的・政治的・経済的にも全面的に協力し、多くの場合、軍事基地と軍事物資の提供をつうじて積極的に加担してきたのであって、日本の政府と独占資本の責任もきびしく追及されなければならない。

二、イスラエル支配層によるジェノサイド

以上、わたくしは、ジェノサイドの定義と一連のジェノサイド犯罪について簡単に概観したが、一般に、ジェノサイド犯罪がナチスによるユダヤ人絶滅によって代表され〝アウシュヴィッツ〟によって象徴されてきたことは否定できない。そして、実際、われわれは、アウシュヴィッツをユダヤ人にたいする史上未曽有の犯罪であるのみでなく、人類すべてにたいする冒瀆として、きびしく糾弾してきた。まことに、ヒロシマ・ナガサキとともに、アウシュヴィッツは、人類にたいする許しがたい最大の犯罪として、永遠に断罪されつづけなければならない。しかし、そこから、ユダヤ人はつねにジェノサイドの犠牲者であるのみであり、イスラエルの支配層がジェノサイドの加害者でないかのような誤った〝常識〟がつくりだされてきた。たとえば、レオ・クパーの著書『ジェノサイド』（一九八一年、英文、ペンギン・ブックス）は、わたくしも教えられるところの多い好著であるが、そこでは、イスラエル支配層がパレスチナ人民にたいして犯しつづけてきたジェノサイド犯罪について言及されていない。しかし、イスラエルの歴史は、パレスチナ人民にたいするジェノサイドの歴史にほかならなかった。

すでに一九四八年のイスラエルの建国は、ユダヤ人とパレスチナ人の共存を否認し、パレスチナ人の土地を不当にうばうものであったが、それにつづく第一次中東戦争の結果、イスラエルは、国連によりアラブ国家にわりあてられていた地域の半分以上を併合し、パレスチナ人民約一〇〇万人を流浪の民にした。その後も、イスラエル支配層は併合政策をつづけ、一九六七年の第三次中東戦争では、パレスチナ人にのこされていた土地全部（ヨルダン川西岸、ガザ地区、東エルサレム）を占領し、三五〇万人のパレスチナ人全体を流浪の民とし、あるいは軍政下においた。第四次中東戦争では、イスラエルは、さらにエジプトのシナイ半島やシリアのゴラン高原を占領し、今年春、前者をようやくエジプトに返還したとはいえ、後者を併合してしまった。

こうした歴史的経過をつうじて、イスラエル支配層は、パレスチナ人民にたいしてジェノサイド犯罪をつづけてきた。前述のジェノサイドの定義をあてはめると、イスラエルの支配層のジェノサイド犯罪は、つぎのように要約される。

a、侵略と拡張の戦争のたびごとに、パレスチナ人をはじめ、アラブの少数民族を殺害した。

b、かれらに奴隷的な労働条件・生活条件をおしつけ、不服従のアラブ人を殺害し、かれらにテロ・拷問をくわえ、政治的主権、自主的な文化的活動を抑圧した。

c、かれらに「身分証明書」や差別的なワッペンを携帯させ、その有無によって交通を規制し、あるいは村落を封鎖して、生活物資の入手を困難にさせた。

d、その当然の結果として、集団内の出生を妨げた。

e、パレスチナ人を流浪の民とさせ、このことによって、子どもを強制的に移住させた。

このようにして、イスラエルの占領地域いたるところに、多くの〝アウシュヴィッツ〟がつくりだされ、パレスチナ人民は民族絶滅の危機にたたされてきた。

三、イスラエル支配層による新しいジェノサイドを糾弾する

イスラエル支配層は、その占領地でパレスチナ人民にたいしてジェノサイド犯罪をおこなってきただけではない。これまで、イスラエル支配層は、レバノンに移住させられていたパレスチナ難民のキャンプに砲爆撃をくわえ、またレバノン南部に侵略をくりかえし、さらにイラクの原子炉を爆撃して核によるジェノサイドの危険を増大させるなど、ゆるしがたい犯罪をかさねてきた。ところが去る六月四日、イスラエル支配層は、レバノンへの本格的な侵略をはじめ、ジェノサイド犯罪をさらにエスカレートさせた。わたくしは、それ以来、連日、イスラエル軍の犯罪についての記事を読み、怒り、糾弾するとともに、パレスチナ人民ならびにPLOへの連帯をいかに表明すべきかについて考えつづけてきた。

イスラエル支配層のジェノサイド犯罪の新しい特徴は、つぎのように要約されよう。

a、パレスチナ人民、レバノン人民にたいする新しい大量殺害。しかも、ベイルートへの無差別砲爆撃、また無差別大量殺傷用の親子爆弾の投下にみられるように、ジェノサイド犯罪に通常の戦争犯罪がくわわっている。

b、占領地のパレスチナ人民にたいして、男子を隔離し、収容所に集中し、拷問をくわえており、また婦人、子どもにたいしても危害をくわえている。

c、ベイルートを包囲し、水・生活物資の流入を阻止して、ベイルートの人民に飢餓によるジェノサイド犯罪をくわえている。また、占領下の難民キャンプでは、パレスチナ人の背中に大きな白色の×印マークをつけさせ、部落や町全体を巨大な収容所に化している。国連レバノン調査団によれば、国連機関に登録されただけで、約五〇万人のパレスチナ人、レバノン人が援助を必要としている。

d、その当然の結果、パレスチナ人、レバノン人の出生を妨げている。

e、パレスチナ人の子どもを強制的に移住させるよりももっと悪いことには、殺害し、あるいは飢餓・病気等による死を強制しつつある。

こうしたジェノサイド犯罪が「国連憲章」ならびに「ジェノサイド禁止条約」によって厳重に処罰されなければならないことは自明のことである。

イスラエル帝国主義者によるこのジェノサイド犯罪の新しいエスカレートは、どのような特徴をもっているであろうか。

第一に、かれら自身が発表しているように、すでに一年前から計画されていた意図的なものであって、偶然的ではないということである。

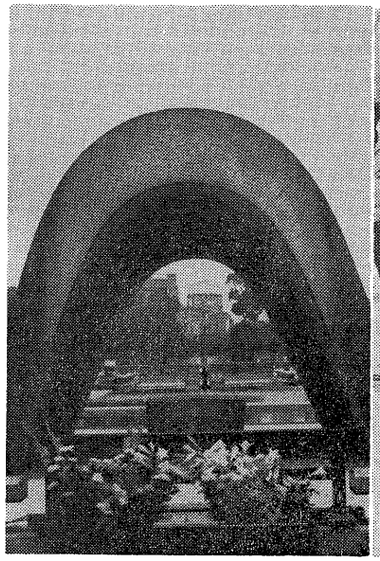
第二に、レバノン国内の反動勢力、フアランジスト党との密接な共謀のもとでおこなわれており、イスラエル支配層はレバノンの傀儡政権の樹立と長期占領をめざしている。この点で、かれらは、アメリカ帝国主義のベトナム侵略に学んで、新植民地主義の支配方法を採用しており、ジェノサイド犯罪、通常の戦争犯罪、新植民地主義の犯罪を重ねて犯している。

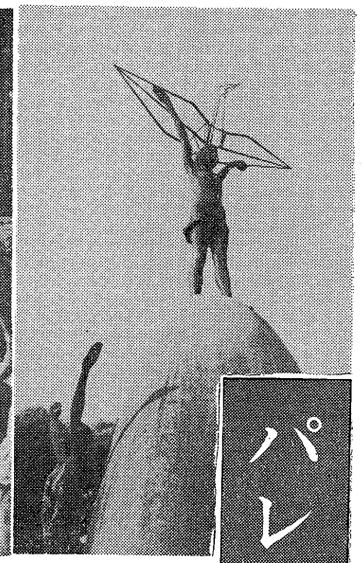
第三に、とはいえ、現在、決定的に欠けているか、不十分であるのは、アラブ世界をはじめとする民族解放運動、資本主義国における反戦平和勢力の側からするパレスチナ人民、かれらを代表するPLOとの連帯運動である。

日本人としての責任についていえば、わたくしもふくめて、この連帯運動への参加は立ちおくれている。他方において、日本においては、反核の大衆運動は未曽有の規模で発展している。しかし、反核運動も、パレスチナ人民の闘争も、結局のところ、ジェノサイドを糾弾し、これを阻止する運動にほかならない。地球上、いかなる場所においてであれ、またいかなる民族や人間集団にたいしてであれ、ジェノサイドはただちに糾弾され、阻止されなければならない。一つのジェノサイドが傍若無人に犯されることは、人類全体に対する挑戦であり、他のジェノサイドを誘発するからである。「ノーモア・アウシュヴィッツ！」「ノーモア・ヒロシマ・ナガサキ！」の声とともに、「ノーモア・ジェノサイド・アゲインスト・パレスティニアン！」「ノーモア・ベイルート！」の声をいかに大きく叫び、唱和させるか。かつてのベトナムとの連帯運動の伝統を継承して、パレスチナ人民との連帯運動をいかに大きく発展させるか。ここに、日本人民、各国人民、人類の緊急の課題がある。

新日本文学
八月号
六四〇円
東京都中野区東中野1・41・5
☎03（362）8771
新日本文学会

対談　吟遊詩人と沖縄……金城実・針生一郎
評論　《討論参加》吉田健正・佐喜真道夫
　　国家デザイナーとしての知識人
　　――梅棹忠夫論……津野海太郎
　　浪費論序説――エコロジー／セミオロジー……長沼行太郎
　　核の悪魔性を描くフィルム
　　――原爆映画史への試み……上野清士
小説　野犬狩り……新井佐次郎
小説　指と公園……矢野とおる
詩　春風馬提曲……小野十三郎
文芸時評　内田百閒は「反核」とどうかかわるか？……池田浩士
映画時評　作者と個人とまつり集団の重なり……鈴木志郎康
同人雑誌評　〈食える誌〉づくり……下沢勝井
絵と文　夜の随想（その十一）……永島慎二
創作童話　白いゾウの町……浅岡照夫
書評　本多秋五『古い記憶の井戸』……佐川光徳
書評　『教育コンピュータ工場』……山本和樹





パレスチナを語るヒロシマの声

世界的に燃えあがった反核運動は、六月の国連軍縮特別総会で絶頂に達した。

ニューヨークの街をねり歩く百万人のデモは、核によるジェノサイドの脅威を声を限りに叫んだ。

だが同じ頃、レバノンでは、イスラエルの通常兵器によって、一万人を越すパレスチナ人・レバノン人の一般市民が無差別に虐殺されていた。

世界の反核運動はこの事態をどうみるのか。とりわけ、その原点ともいえる「ヒロシマ」は。

「ヒロシマ」の運動を担う各界の人々の声をひろった。

反核・軍縮とパレスチナ・レバノン問題

栗野鳳
（広島大学平和科学研究センター所長）

米国でみたレバノン侵略ニュース

ニューヨークの国連本部で六月七日から七月十日まで第二回国連軍縮特別総会が開催されたが、四年前の軍縮特別総会で採択された「最終文書」を再確認し、「世界軍縮キャンペーン」を進めることなどを決定しただけに終り、要するに、「不成功」と評されている。

この「不成功」の原因について、ジャーナリズムの解説などは「東西」対立ないし米ソ両超大国間の対立が尖鋭化し、国際緊張が激化した国際情勢・国際環境などを指摘しているものが多く、各国政府代表の間でも、要するに準備不足のまま総会を開催したのがまずかった、と内話する人々が少くない。私もそうしたコメントに必らずしも反対しないが、多少違った感想を抱いてもいる。

私は、今回の特別総会の会期約五週間のうち、後半の三週間近くを、現場で観察する機会をえた。六月二四、二五の両日が「NGO（非政府組織）と平和・軍縮研究機関の日」とされ、七五人程のNGOなどの代表者が総会議場でそれぞれ十分づつの演説を行なった。私は六月二一日ニューヨークに到着、二五日夕刻、広島大学平和科学研究センターを代表して発言し、その後は毎日のように国連本部や、その向い側のNGO情報オフィスその他の場所に出入して、総会の審議の概況を把握するのに努めた。

他方、私が泊っていた国連本部に近いホテルの部屋にテレビがあって、朝晩のニュースはなるべく見るようにし、また

ニューヨーク・タイムズ紙などもつとめて目を通すようにしていたが、私が滞在していた間じゅう、トップ・ニュースは「イスラエル」のレバノン侵入に関する問題であった。アメリカのテレビやニューヨーク・タイムズなど、いわゆるマスコミの一般的な傾向としては、いずれかといえば「イスラエル」寄りで、私としては納得しがたいものがあったが、それでも、CBSの女性のアナウンサーが、「イスラエル」領事を相手にしたインタビューの中で、領事が、自国の安全を脅かす「ゲリラ」の根拠地を壊滅させる作戦を遂行することはあたかも当然の権利であるかのような主張をしたのに対して「しかし殺され傷ついているのは婦女子がほとんどで、しかもその数が何千にもなっているではありませんか。このことについて、あなたは何を言いうるのですか」と突っこんで質問し、領事が絶句する場面もあった。

また、PLO代表部の次席の人が「西ベイルートから撤退するかどうか」といったアナウンサーの質問に対して「そんなことが問題の本質ではないでしょう。侵略者が侵略をやめず、撤兵も約束していない状況で、侵略者とその犠牲者とを同列に取り扱ったり、その妥協や合意を期待することが、どれ程おかしな、間違ったことであるか、分りませんか」と切り返している場面も見た。

日本に帰ってから、テレビなどを見て日本のマスコミはパレスチナ問題についてもっともっと勉強してもらわなければいけない、と感じている。

マスコミに「愚民政策」の反映

ところで、軍縮特別総会が決定した「世界軍縮キャンペーン」であるが、具体的な計画は今後、国連本部の軍縮センターや広報局が作成して、国連の諸機関（例えばユネスコ）も協力して実施されるであろうが、そのキャンペーンの中で各国政府がどのような役割を担うか、大いに注目される。あるいは心配し過ぎと思われるかも知れないが、私が心配している点が一つある。少し具体的に言うと各国政府は、今回の軍縮特別総会が「不成功」に終った主要な原因について、さらには反核・軍縮が促進されない原因について、どのように説明するのであろうか？　また、自国の立場について、どういう風に「広報」するであろうか？　これまでの実例から見て、本当の原因や自国の真意については「口をぬぐって」国民に知らせるべきことをかえって押しかくし、要するに「愚民政策」をとる恐れはない、と言い切れるであろうか？

軍縮がいっこうに進展しない原因について、ここで論述することはさしひかえむしろ読者に考えてもらうこととしたい

が、他方で、現在も深刻な問題として続いているパレスチナ問題ないし現下のレバノン問題についてのマスコミの取り扱い方を吟味してみると、そこにも前記のごとき「愚民政策」の反映がうかがわれることがないであろうか。そして、そのために国民が、真相を十分知りえないでいることはないだろうか。

問われる日本人の「精神的資産」

実は、私が特別総会で演説した中で、戦後の日本国民、なかんずく科学者・研究者が抱いている平和の原理・理念・思想の要点を述べた部分がある。それは次の如くである。

「……さらに重要なことは、われわれ日本国民が新しい精神的資産をもつにいたったことです。第一は、ヒロシマ・ナガサキの悲劇的な経験と、被爆者の証言や訴えから、自他ともに平和のうちに生存を全うすることのできる世界を創造せねばならぬことを学んだことです。そして、あのような恐怖と惨禍、ことに核の惨害は、世界のいずれの地においても二度と繰返してはならぬことを学んだのです。次に、われわれは基本的人権という普遍的原理を自覚するにいたりました。一九四七年に施行された日本国憲法は、最高の法規としてこの原理を認めています。ここで私が強調したいことは、この原理こそ、戦争と戦力を放棄したことでよく知られている憲法第九条の規定と精神の基礎をなしているということです。

われわれが学びとったこれら二つの事柄は根元において本質的にひとつのものであり、一方は人類愛であり、他方はその法的確認です。言うまでもなく、この両者とも、この核時代に、否、それをも超えて、生きて行く上に、全人類にとり極めて重要です」

もとより、私は、日本国民の多くが、少くとも心の奥底において、このような「精神的資産」を持っていると信じている。しかし、パレスチナや現下のレバノン問題について、対岸の火事のように感じていたり、パレスチナの人々やレバノンの人々の基本的人権の問題に思い及ばなかったり、現に不正がまかり通っている状態をできるだけ速やかに是正しようという志を、少しも抱かないようであれば、私は国連の場で、世界に向って大きなウソやホラを吐いたことになってしまう。

〝苦しみ〟において兄弟だ

栗原貞子（詩人）

アフリカや中東は、アジアとちがい私たち日本人との人間的交流が少ない。だから、そこで起こっていることも遠いことのように感じられるのだろう。

ベトナム戦争の時は、日本が基地になっていたということもあり、ベ平連のような動きが生まれた。また、ナパーム弾で焼かれた跡が、ヒロシマの原爆によるケロイドに似ているということもあり、「ベトナム・ヒロシマ」とよくいわれた。しかしパレスチナは、遠く感じられるせいだろうか「パレスチナ・ヒロシマ」というような、結びついて一体化した運動になっていない。

六月、西ドイツのケルンでひらかれた国際文学者会議に出席した。その会議で、アフリカなど第三世界の人たちは、核よりも飢えと貧困の問題が彼らにとって重大な問題なのだ、といっていた。

もちろん、飢えと貧困の問題は、核の問題に勝るとも劣らない重大な問題だけれども、核の問題もそれほど簡単な問題ではなく、現に今、アジアや南太平洋の第三世界の人たちは、核の被害者になっている、と私は話した。

ケルンでのあるレセプションで、アルジェリアの作家、アブラータさんと話をした。そのなかで、ヒロシマへのメッセージを求めたら、彼はこういう主旨のメッセージをくれた。

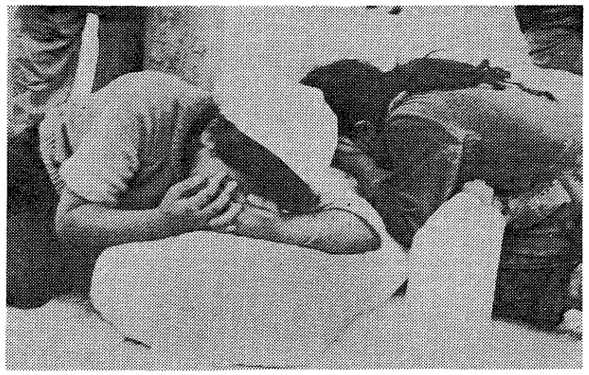
「私たちは、お互い遠い国に住んでいるが、〝苦しみ〟において兄弟である。それは、ヒロシマは原爆で、私たちは内戦と弾圧、アメリカの圧力によって苦しんでいる。だから、私たちが連帯する基盤は、共通に〝苦しんでいる〟ということだ。私たちはその連帯によって、これからは、〝苦しみ〟による兄弟ではなく〝喜び〟による兄弟に近づきたい」

その言葉が胸から離れない。パレスチナの人たちも、そういう意味のことを呼びかけたいだろうなあ、と思う。「あなたたち被爆者は、苦しさはよくわかっているはずではないか。だから、自分たちパレスチナ人の現状をわかってもらいたい」そういう気持ちを持っておられるにちがいない。

ケルンの会議では、西ドイツの学生や青年たちが、「イスラエルの侵略を許すな」という横断幕を持って、演壇にかけよる一幕もあった。一方、フランクフルトでは「アウシュビッツ」の展覧会をやっていた。「アウシュビッツ」のことはいうが自分たちがパレスチナやレバノンでやっていることはどうなのだ、という人もいた。他者の痛みを知らないで自分の痛みだけをいうのは、エゴイズムだ。（談）

原水禁運動も一人の人間の生命の問題

宮崎安男（広島県原水禁事務局長）



イスラエルの核保有について、今まで原水禁大会に参加したアラブ諸国やＰＬＯの代表が、口々に真に迫った表情で、「イスラエルに核兵器を持たせてはいけない。そのために、いかなる国の核兵器にも反対だ」と強調していた。イスラエルが核兵器を保有しているという報道は事実だ、と我々はみている。しかも非常に好戦的な国であるから、使われる危険性も高いのでは、と心配だ。

先日、核実験に抗議する座り込みが連続二百回目になった時、イスラエルの元首にあてて、核開発、核戦争の実際の準備行為をやめるように、大使館を通じ、

手紙で申し入れたがなんの解答もない。

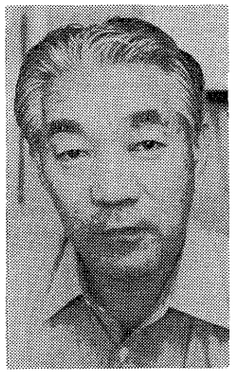
日本と中東の関わりをいえば、核基地としての沖縄がある。ベトナム戦争では黄緑色の迷彩をほどこした戦車などさまざまな兵器が、最近では砂漠用の褐色に変わっている。中東における戦争の手段に沖縄が使われているということは、沖縄の空港に降りて街へ行く道路沿いの光景からもわかる。

現在のレバノンの状況に対する日本の世論はどうか。

はっきりした主権国家であるレバノンに対し、軍事力でいきなり侵略行為をおこなうイスラエルの態度への批判もされず、かつての中東戦争で、イスラエルに不法に占拠され、自分たちの土地に帰りたいという正当なパレスチナの人々の要求への言及もなされず、単なる〝地域的な理由による紛争〟としかとらえられないところに問題がある。

何の責任もない子供や老人が大量虐殺されている。一人の人間の命というのは量ではない、一人だけのものだ。その一人が正当な主張をして殺されていくことは、絶対にあってはならないことである。これは原爆であろうと通常兵器であろうと、また紛争が大きかろうと小さかろうと、一人の人間にとってその死の重さにかわりはない。私たちの原水禁運動は、あくまで一人の人間の生存の問題をどう考えるかということである。その意味でも原水禁運動と中東の問題を分けて考えるという発想はない。

ただ、世界のすべての紛争が、核戦争に火をつける可能性さえあるという認識を持ちながらも、具体的な運動で、どう対応できるかというと、心配するだけで現実には対応できていない、というのが現状だ。（談）



パレスチナ側にも責任

今堀誠二（広島女子大学長）

「日本の原水禁運動が、パレスチナに目を向けないのはけしからん」といってもとうてい、日本国民の支持は得られない。

確かに、日本の反核運動が、パレスチナへ目を向けていない、というのはその通りだ。しかし、その原因を作っている責任の一端は、パレスチナ側にもあるはずだ。もちろん、パレスチナは生きるか死ぬかの問題であって、そこまで配慮はいきとどかない、ということはわからないではないが……。

そういうことを前置きにして、今のレバノンにおける現状に言及したい。

被爆者の大部分は非戦闘員である。戦闘員、非戦闘員の区別なく、無差別攻撃

を加えるということは、人道的にも、国際法上でも許されない。だからヒロシマは糾弾されるべきだし、核は廃絶されなくてはならない。その点が原爆の問題の元々の論議であった。

今、世界の多くの地域で、そのような問題がある。例えばパレスチナがそうだ。これも許されるべきことではない。

日本においては、かつて日本がおこなった三光作戦、南京虐殺に対する痛みを感じないで、ただ「核廃絶」と叫んでもそれはニセモノだ。かつて日本が犯した無差別攻撃に対し、深く反省する。その反省の上にたち、なおかつヒロシマ・ナガサキの原爆攻撃や東京空襲は、疑いもなく無差別攻撃であり、それらに対しても私たちは非難したい。

それと同じ意味において、レバノンで現在おこなわれていることに対し我々は反対だという意志を表明したい。（談）

（注）今堀氏はこう指摘されましたが、一九七七年には、ハミード駐日代表、七八年にはムスタファ・ハラージ氏、七九年にはジュマーナ・フセイニ女史がそれぞれＰＬＯ代表として広島を訪問し世界大会などに出席しています。（編集部）

パレスチナ人の痛みに我身が削られる

富永初子（被爆者）

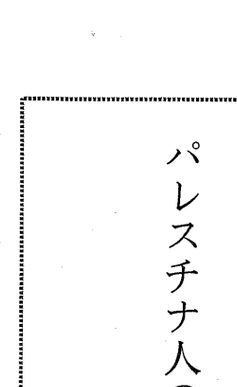
私は、国連軍縮特別総会がひらかれたニューヨークの行動で、南太平洋にある小さな島の独立国の代表団の人々の集会に参加した。そこで、核実験やら核廃棄物などの現状の説明をきき、本当にむごいことだと感じた。太平洋の海でわがもの顔をしているアメリカ政府の抑圧や脅しを、まざまざと知った。

日本政府は、アメリカと「通々」だ。裏工作では「アメリカ国日本州」になりさがっている。少しも独立国ではない。沖縄が日本に復帰したといっても、それは名前だけで、厳として基地があるではないか。そこから朝鮮へも、ウラジオストック周辺にも、核兵器を積んだ軍用機をとばし、偵察をしている。中東へも出動する。

パレスチナの人々が、なぜ、これほどひどい目に会わなければないけないのか。本当に同情する。自分自身が原爆で恐ろしい体験をしているから、このような写真（「びら―でい」七月号のグラビア）をみると、本当に我身を削られるような気持ちになる。一般の日本人は、こういう戦争に対して無関心だ。平和運動をやっている人にも、「遠い国のこと」という先入観がある。

被爆者は、自分の苦しみは身にしみて知っている。パレスチナ人も、今、同じような苦しみのなかにいる。しかし、同じ人間がそういう目に会わされていることへの同情が足りないと思う。

地球上のどこでも、中東でも、原爆が落ちれば世界中が放射能にさらされる。中東の戦争が、自分の身にふりかかってこないなんてとんでもない。火の粉がふりかかってくる時は、もうおそいのだから。（談）



PLOは国際世論での位置づけがまだ弱い

湯崎稔（広島大助教授・社会学）

反核運動は、やはりヨーロッパの核配備の問題、日本を周辺とするアメリカのソ連に対する核攻撃の問題、ソ連が極東に配備する核ミサイルの問題などが中心になる。一方、中東やフォークランドの問題などは「平和を脅かす問題」として議論されてしまいがちだ。

また核問題は、先進国の先進技術がもたらした人類的危機であり、一方、パレスチナ問題は、歴史的に長く対立してきた領土問題や人種問題、宗教問題など、おそらく先進諸国がすでに経験してきた、ある意味では、幾分問題は残しながらもそれを克服してきた問題として、一般の人々に認識されている。このことも反核運動がパレスチナ問題に関心が薄い理由のひとつだろう。

さらにPLOの実態、その立場、主張、アラブ世界のなかでの位置づけが、情報量が少ないためか、一般の人に十分知られていない。レバノンにおけるPLOの位置というのもはっきりしない。だからイスラエルに爆撃されているといわれても、例えばイスラエルがエジプトのカイロを爆撃した場合に予想されるような、大きな世論まで高まらないのでは。

もちろん、人間の安全、生命、未来がおびやかされているという点では、反核運動も、他の基本的人権に関わる問題でも同じだ。だから、反核運動をやっている人が、なぜパレスチナ問題にも目をむけないのか、という意見もあろう。しかし、何を中心のテーマとするかによって、各々が、問題をつきつめていくのだから、多様にそれぞれの運動があるべきだと思う。もちろん、必要な時には、連帯していかなければならないが。

PLOに今要求されていることは、今起こっている問題はなにが原因なのか。自分たちの立場はどうなのかを、世界に対してもっと明確に、また大々的に表現していくことではなかろうか。私たちからみていると、PLOの国際世論における位置づけがまだ弱いようだ。（談）

ヒロシマとパレスチナ

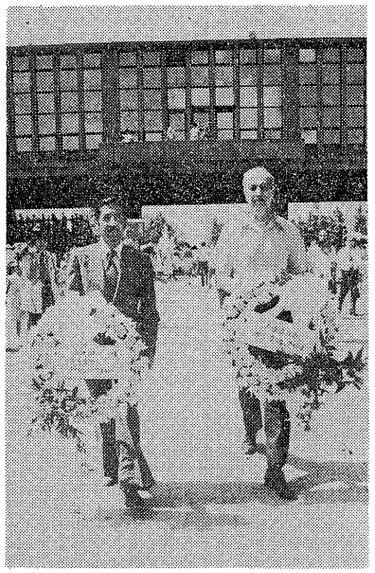
ヒロシマとナガサキの惨禍は、パレスチナ人民の悲劇の発端とほぼ同じ時期におこった。このこともあって、原爆による大量虐殺は、どのパレスチナ人たちの胸の奥でも特別の思いをもって受けとめられてきた。「ヒロシマは、わたしの胸の中の傷です。それは、今も血を流している傷です。」――私は、一九七九年に広島を訪問したパレスチナの女流画家ジュマーナ・フセイニ女史が、彼女の想いを、こう語ったのを思い出す。

パレスチナ人たちは、イスラエルによって新たな虐殺にさらされる度ごとに、ヒロシマとナガサキを思い起こした。我々自身の傷は、その後も傷口を広げてきた。だが惨禍と悲劇は、犠牲になった二つの人民を近づけてきた。だからこそパレスチナ人民は、被爆三十七周年を迎えた今年、しかも、イスラエルによる新たなホロコーストにさらされているゆえに、ヒロシマとナガサキの犠牲者――それは個々人のヒバクシャではなく、日本人民全体であろうが――がホロコーストの犠牲者に示す特別の意志表明に期待をもってきた。

ふりかえってみると、PLOは一九七〇年代の初期から原水爆禁止世界大会に代表を派遣してきた。だが残念なことだが、この世界大会では、イスラエルの核の脅迫の問題は真剣に取りあげられることはなかった。七七年には私が、七八年にはPLO本部から画家のハラージ氏が参加してアピールしたが、この世界大会がパレスチナと〝ヒロシマ〟との接点になりえないことを知った。（それ以降は、どうしたわけか世界大会への招請状はPLOには寄せられていない）何度か働きかけてみたが、この大会の組織者は、中東問題が核廃絶の具体的な課題ではないと考えており、PLOのアピールもその重要課題の一つではなく、お情けを要請したものと受けとめていた。

たしかにギャップは大きい。その背景や要因も分析できないわけではない。そして何よりもヒロシマとの接点を見い出し、これをともに考えて行こうとする共通の努力を放棄してはいない。「ヒロシマ・ナガサキの惨禍を経験した日本人民は、私たちの苦難が理解できるものと確信している」――これはアラファト議長が日本人記者と会見する度に強調した日本人民へのメッセージの一つである。そして、いまこの瞬間にもイスラエルの核の脅迫も含めた日ごとの爆撃によりヒロシマの影を見ているパレスチナ人民は、日本が何らかの緊急な行動を起こすのを待っている。

（アブドルハミード）



ヒロシマの原爆犠牲者に花輪を捧げ，パレスチナでヒロシマをくりかえさせまいと誓ったアブドルハミードPLO駐日代表（左側）とアラブ連盟駐日代表のアズハリ氏（1977年8月）

米国の限定核戦略に日本は加担する

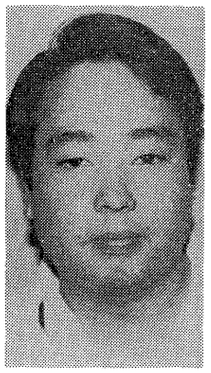
関洋（広島大学生・平和問題研究会代表）

今の日本の軍拡や日米安保の強化と、中東におけるイスラエルのレバノン侵攻の問題と、どう関わっているのか。これが、まず考えなくてはならない問題だ。

最近アメリカの限定核戦略は、大量多発報復戦略だといわれている。つまり一定の地域で何か紛争が起こった場合、それ以外の地域でも、紛争巻き返しをやる、そこで核の使用もありえるぞ、とアメリカは公言している。この戦略に従って大軍拡を行なっているわけだ。

一方、アメリカの限定的な核使用の可能性がある地域はどこかといえば、中東と朝鮮半島ではないか。

このようなアメリカの核戦略に対し、ヨーロッパでは、反核運動が盛りあがって、NATOとアメリカとの亀裂が深まってきている。一方、日本は、むしろ積極的にアメリカに加担しようとしているし、新核戦略を促進している。しかも、日本は「五六中業」で大軍拡を計画している。それは、「三海峡封鎖作戦」や、朝鮮半島の〝有事〟に備えたものであるし結局、今の日米安保条約と結びつく。



アメリカが中東・ヨーロッパで進めている新核戦略、またスイング戦略によって中東にアメリカが軍隊を派遣すれば極東側が空きになるから、日本がそこで積極的に守りの役目を担うことになる。

いまの広島大の学生をみていると、確かに中東問題の情報量があまりにも少ないということもある。情報が入ってきても、「PLOとイスラエルがケンカをしていて、アメリカが一生懸命、両者の仲介をやろうとしている」というふうに映っているようだ。だから、もっと事実関係を知らせていくことが必要ではないか。知らせていけば、核戦争に対する意識は高まってきているから、パレスチナ問題が大量虐殺や人類の生存に関わる問題であることがわかるはずだ。（談）

「反核」運動における具体性の弱さ

伊東　壮（日本原水爆被害者団体協議会代表委員）

昨年から欧米、日本を中心に、草の根反核運動は大きく盛りあがった。しかし、それらは「なんとなく核はいやだ」ということで具体的な問題になってくると、必ずしもそれぞれの盛りあがりがあるわけではない。これは今後の課題になると思う。

約七千万という数にのぼる署名を書いた人たちの中でも、たとえば「日本の軍備が拡大するのは非常に結構なことである」といいながら、「反核」と言ってしまう人がいる。「反核」と言いながら、個々の問題についていえば、そういうふうに日本の軍備増強を支持したり、日本の教科書の問題についてでも、「侵略ではない」と言うような人が非常に多い。「反核」という言葉が、一種の流行みたいなかこうで、どこでも容易に受け入れられている。そういう底の浅さが持っている状況があることを、様々な反核運動については、率直に認めなければならないだろうという気がしてくる。

島国根性と欧米志向の強さ

イスラエルのPLO攻撃について、明確な視点を持たず、沈黙してしまうという理由には、一つは反核運動が具体的な課題に非常に弱いという点があるということとともに、日本の報道そのものが、第三世界に対して非常に弱いという点があげられるのではないだろうか。

報道が弱いのみならず、日本人の体質そのものに、第三世界より、欧米の方向を志向するような姿勢があるからではないだろうかと思う。そのこと自身、日本人が考え直さなければならない課題なのではないだろうか。

世界は決して欧米の先進国ばかりで動いているのではない。むしろ、第三世界の国々の人々の力が非常に大きな力として経済の上でも政治の上でもっているということを見忘れてはならないし、そこの人たちの気持ちを、われわれがどういうふうに知るかということ、あるいはその人たちとの共通理解をどうやって持つかということが、非常に大事な時になっている。

今度の日本における教科書問題が一例としてあげられる。日本の政府が韓国にしろ中国にしろ、アジア、第三世界の人たちの心を心とし、共通理解を持っていたら、あのような馬鹿なことは絶対起きないと思う。

一つは島国根性、一つは欧米志向の強さのようなものが、実は、現実の国際情勢から大変はずれているのだ、という点を、日本人がどう自覚するかということが、大きな問題だと私は思っています。

（八月三日、談）

パレスチナ人は，祖国の内であれ外であれ，安全は保障されていない。
クラスター爆弾やナパーム弾までイスラエルは使用している。

訂正　前号33頁の芝生端和氏は芝生瑞和氏の誤りにつきお詫びして訂正します。

アジアの女がみる……

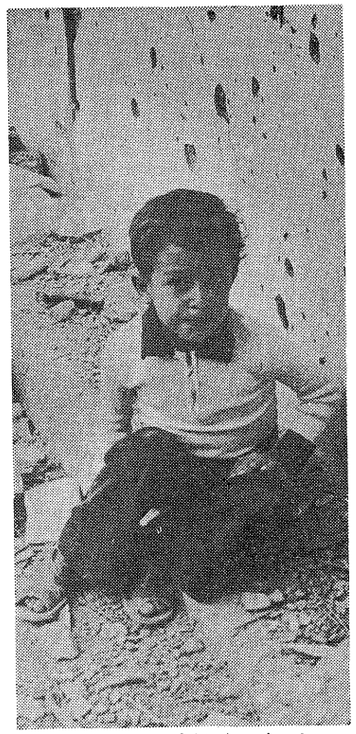
人間は歴史から何も学べないのか

五島　昌子（アジアの女たちの会）

反核運動は、世界的に大きく盛りあがっている。しかし、原爆が一発落ちるのはいやだ、といいながら、通常兵器によって何万人という人たち、女性や子どもたちが無差別に爆撃され、殺されている現実には無関心ということが、私には本当に悲しい。

ニューヨークの国連軍縮特別総会の行動に参加して、何百万人という人たちが戦争はいやだと叫んでいたが、そのなかでイスラエルの虐殺戦争に反対という声は非常に小さいものだった。この行動の間にイスラエルのレバノン侵略があったが、反核行動参加者は、こうした現実におこっている戦争に対して思いを致していかなければならなかったと思う。

日本人は唯一の被爆国ということを強調しているが、自分たちが加害者であるという視点が欠落している。原爆は何の前後関係もなく、突然に落とされたのではなく、アジア侵略とアジア人民に対する日本軍の大虐殺ということが前提としてある。もちろん、原爆はどんなことがあろうと決して許されないし、被爆者にはできる限りのことをしなければならない。しかし、日本人が加害者であったという視点や、今、イスラエルがレバノンでやっていることや、日本人自身がやっていたことを忘れたら、日本が再び、同じような侵略をしないという保証はどこにもない。教科書問題にしても、「侵略」を「進出」といいかえ、自分の過去を隠そうとしていることは、日本軍国主義の道、ヒットラーの道、そして今イスラエルがやっていることにつながっていくだろう。こうした道は再び歩いてはいけないし、私たちは二度と加害者になってはいけない。



イスラエル軍の砲撃がしばし止み，家に戻ると……（６月以前）

ナチスがユダヤ人を殺りくしたことへの罪滅ぼしというかたちでヨーロッパがイスラエル建国を認めて、そこに住んでいたパレスチナ人を追放したということは大きな罪だった。それゆえパレスチナ人の苦しみをもっと理解する運動が出てこなければならない。「アラブとイスラエルの対立」という作られた憎しみを増幅していったのは、先進国の責任である。

私がはじめてパレスチナ問題に関心を持ったのは、パレスチナの子どもの絵の展覧会だった。小鳥とか馬が描かれていて、それぞれ動物たちには小屋が描かれている。横に詩があって、小鳥にも馬にもおうちがあるのに、なぜ、ぼくたちにはないんだろう、と書いてある。それを見て、とてもショックで、つらかった。

難民キャンプに住み、祖国解放の闘争を続けてきた、そう状況下にある人たちが日常生活をするために、やっと建てた難民キャンプを、爆撃して破壊することは、絶対に許せない。しかも、そこの住民を無差別に殺している。

同胞を大量に殺された経験を持つユダヤ人が他民族に同じことをやっている。つまりユダヤ人がかつて受けたナチスの大虐殺の意味は何だったのか、をもう一度、私たちに問いかけている。

私がぞっとしたのは、ユダヤの星のマークを付けられて歩いた経験を持つ人たちが、三十七年しかたっていないのに、パレスチナ人に×印をつけて歩かせている。人間というのは、歴史からは何も学ばないのか、と私は怒りを感じ、悲しかった……。

「アジアの女たちの会」としては、再び戦争の加害者にならないために、ビラをつくったり、集会を準備したりして多忙で、パレスチナの人たちのために、現在、何もやれないのは、とても恥ずかしいが、パレスチナのためにこれから何ができるか、を考えたい。（八月四日、談）

もうひとつのヒロシマを問う

朝鮮人被爆者協議会代表委員

李 実根さん
（り・しるぐん）

「白いチョゴリの被爆者」を編纂

「『日本は唯一の被爆国』、『日本人は唯一の被爆国民』といっているが、これは完全な誤りですよ」

在日朝鮮人被爆者連絡協議会の代表委員、李実根さんは、こういいきる。

一九四五年八月。当時、広島市には約五万三千人の朝鮮人が在住していたといわれる。そのうち被爆した者、四万八千人、死者約三万人と推定される。長崎では一～二万人。あわせれば四～五万人の朝鮮人の生命が原爆に奪われたことになる。しかもその朝鮮人たちの大半は、広島、長崎に、在住させられた人たちであった。

だが、一般の日本人はおろか、原水禁運動にたずさわる日本人たちさえ、その事実を重視してこなかった。

「本当の被害者は、一体だれなのか」

李さんは私たち日本人に、そう問い、迫る。

なぜ朝鮮人被爆者は存在するのか

「日本人の被爆者は、自分たちこそ唯一の被爆者だというんだけれど、彼ら日本人はそれ以前に何をしたのか。広島、長崎に、ある日突然、原爆が落されたわけではないんです。これは戦争の延長の結果なんです。しかもそれは日本の侵略戦争でした。日本の国民は、その協力者であり加担者ではなかったのか。これが、戦後きちんと清算されているのか。それをそのまま、うやむやのかたちで棚上げして、ただ自分たちが一九四五年八月六日、九日に原爆を受けたから、そこの時点で被爆者意識を先行させ、『被害者だ、被害者だ』といってみても、それでは通らない。問題は、やはり戦前史は、一体なんなのかということです。まず被爆前史を明確にしないといけない」

なぜ、朝鮮人が広島、長崎に在住しなければならなかったのか、朝鮮人被爆者の存在は、日本の侵略のひとつの帰結ではないか、と李さんは日本人に問いただすのである。

在日朝鮮人被爆者連絡協議会の代表委員、李実根さんは、こういいきる。

一九四五年八月。当時、広島市には約五万三千人の朝鮮人が在住していたといわれる。そのうち被爆した者、四万八千人、死者約三万人と推定される。長崎では一～二万人。あわせれば四～五万人の朝鮮人の生命が原爆に奪われたことになる。しかもその朝鮮人たちの大半は、広島、長崎に、在住させられた人たちであった。

だが、一般の日本人はおろか、原水禁運動にたずさわる日本人たちさえ、その事実を重視してこなかった。

「本当の被害者は、一体だれなのか」

李さんは私たち日本人に、そう問い、迫る。

「日本人の被爆者は、自分たちこそ唯一の被爆者だというんだけれど、彼ら日本人はそれ以前に何をしたのか。広島、長崎に、ある日突然、原爆が落されたわけではないんです。これは戦争の延長の結果なんです。しかもそれは日本の侵略戦争でした。日本の国民は、その協力者であり加担者ではなかったのか。これが、戦後きちんと清算されているのか。それをそのまま、うやむやのかたちで棚上げして、ただ自分たちが一九四五年八月六日、九日に原爆を受けたから、そこの時点で被爆者意識を先行させ、『被害者だ、被害者だ』といってみても、それでは通らない。問題は、やはり戦前史は、一体なんなのかということです。まず被爆前史を明確にしないといけない」

なぜ、朝鮮人が広島、長崎に在住しなければならなかったのか、朝鮮人被爆者の存在は、日本の侵略のひとつの帰結ではないか、と李さんは日本人に問いただすのである。

在日朝鮮人被爆者連絡協議会の代表委員、李実根さんは、こういいきる。

一九四五年八月。当時、広島市には約五万三千人の朝鮮人が在住していたといわれる。そのうち被爆した者、四万八千人、死者約三万人と推定される。長崎では一～二万人。あわせれば四～五万人の朝鮮人の生命が原爆に奪われたことになる。しかもその朝鮮人たちの大半は、広島、長崎に、在住させられた人たちであった。

だが、一般の日本人はおろか、原水禁運動にたずさわる日本人たちさえ、その事実を重視してこなかった。

「本当の被害者は、一体だれなのか」

李さんは私たち日本人に、そう問い、迫る。

同じ証言者の一人、鄭順南さん（60）の場合、結婚後まもなく、夫は「徴用」で日本に強制連行された。鄭さんは当時、十七歳、初めての子がお腹にいた。二年後夫が突然帰ってきた。家族を日本に連れて行くためである。「徴用」のむごい労働と打ち続く虐待にこらえ切れず、毎日のように逃亡者が出る。その防止策として、家族の連行が始まったというのだ。このようにして故郷を捨てさせられた鄭さんは、広島で被爆。

同じく証言者の金末順さん（63）。ある日、故郷の村に数人の日本人がやってきた。「日本へ行って女工になる人を求めにきた」と触れ込んだ。日本で消息を絶った母恋しさに、金さんはその話をウ呑みにし、応募する。だがその日本人に連れていかれたのは工場ではなく、下関の遊廓であった。金さんは十六歳であった。各地の遊廓をたらい回しにされたあげくやっと解放されて広島へ。そして被爆……。

李さんは日本の朝鮮における植民地政策をこう書く。

「まず『武断統治』を強行し『土地調査事業』『林野調査事業』の名目で、当時朝鮮人民の生活の基盤であった祖先伝来の土地や山林を収奪した。しかも、その方法は、朝鮮農民の大半が文盲者であったことにつけこみ、不法かつ詐欺的測量などあらゆる卑劣な行政手段を強行したのであった。

さらにそのうえ、農産物の五〇～九〇

%に達する高率の小作料と雑税による収奪を強行し、農民の生活を破壊してしまったのである。

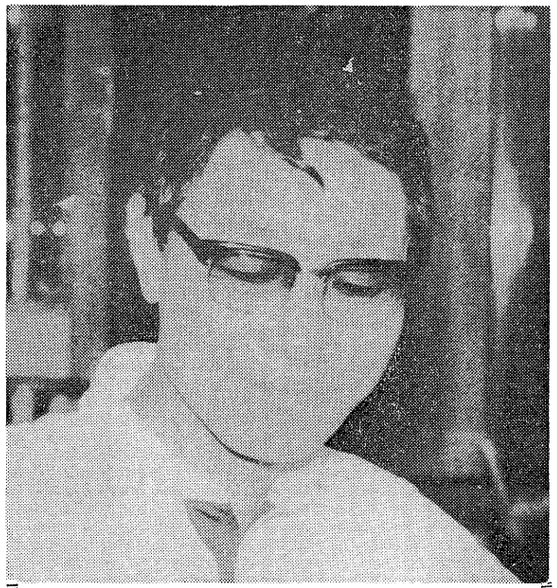
このようにして、当時未発達の朝鮮はたちまちのうちに、日本資本主義のわくに組み込まれ、武力による政治的抑圧と経済的収奪が急速に進むにつれて生活の糧を求めてあるいは追われる朝鮮人民が海外への流亡を余儀なくされたのである」（「白いチョゴリの被爆者」）

イスラエル占領地では、今なお「不在者財産の取得に関する法律」「防衛法」「一九四九年の緊急法」など、「イスラエル人の安全保障」の名の下に、数々の法のトリックによってパレスチナ人の土地がイスラエルによって没収されている。そこにユダヤ人入植地を次々と建設していくのである。生活の基盤を奪われたパレスチナ人は、イスラエル内の「好まれない職業」の労働力不足を補うために低賃金の未熟練労働者としてイスラエル経済に従属させられていく。従属を拒めば「流亡を余儀なくされ」る……。

占領下のパレスチナ人とほぼ同じ状況に、かつての日本植民地下の朝鮮人は置かれていたのである。

反核運動は足元から

「では、戦後、祖国が解放されて、朝鮮人はみな解放されたのか、というと決してそうではない。日本に住んでいる朝鮮人は、戦前と戦後では形態は変ったかもしれないが、内容は大きく変ってはいない。その差別はいまに続いていますよ」と李さんはいう。



「私がいちばんしゃくにさわったのは、原爆であれ、通常の戦争であれ、軍人軍属あるいは準軍属などの公務中に亡くなったり、傷を受けたものに対しては、恩給法に基づいて、日本人の場合にはきちっと年金など諸手当を与え補償があるにもかかわらず、戦時中、朝鮮を奪われ、植民地支配され、生活できなくなって日本に入らざるをえなかった、あるいは強制連行してつれてこられ、牛馬のごとく酷使された、そういう朝鮮人は、死んでも傷ついても、その恩給からの適用はなはずされていることです。こういう露骨な差別。さらに今だに、朝鮮人被爆者に対する実態調査というものも、政府によって一度もなされていない。

朝鮮人被爆者の慰霊碑を、平和公園のなかに建ててほしいといっても、それすら認めてくれない。それでは朝鮮人ってなんなのか。犬死に等しいではないか」

昨年来、ヨーロッパ、アメリカ、日本で反核運動はかつてない盛りあがりをみせた。だからこそ、今年六月の「国連軍縮特別総会」への期待は大きかった。だが、その期待は裏切られた。しかし朝鮮人被爆者からみれば、決して驚くべきことではなかった。

「外国の人たち、特に非同盟の人々はニューヨークにやってきた日本人に言っているわけですよ。『アメリカまで来なくてもいい。また非同盟の我々にいわなくてもいい。まず皆さんの足元から片づけてきなさい。おたくの国の政府はなにをしているのか知っていますか』と。

日本の政府は、国連でなにをやっているのか？　核兵器不使用決議に反対している。国内では防衛力をどんどん強化している。教科書では侵略の事実を「進出」という言葉にすりかえようとしている。その一方で、反戦・平和を唱えている。全く矛盾した話だ、というんですよ。平和運動の人たちは、自分の政府の姿勢や政策を変えさせることが先決問題

李　実根（り・しるぐん）

1939年，山口県豊浦郡に生まれる。45年８月６日，広島で「入市被爆」。戦後，朝鮮民族運動に身を投じる。「在日本朝鮮人総連合会」（総連）の幹部を経て75年「朝鮮人被爆者連絡協議会」を結成。朝鮮人被爆者の実態調査に乗り出す。79年，「白いチョゴリの被爆者」を編纂。朝鮮人被爆者の記録映画「世界の人へ」の制作責任者でもある。

ではないですか」

国家の犯す誤ちはその国民全体の責任とすることに対し、「国家権力と国民一般とは区別すべきだ」と、反論する日本人は少なくない。だが、李さんはこう問いかえす。

「みなさん、政府が悪い、自民党が悪いという。だが、あなたがたが認める通り日本は民主国家のはずです。『悪い、悪い』というけれど、その『悪い奴』をだれが出しているのか。国民一人一人が選挙で当選させているんだろう。そうしておきながら、『悪い、悪い』といってみたところでしようがないではないか。天井みて、つばを吐きかけるようなものではないか。そのつばを吐きかけたらどこにふりかかるのか。自分の顔にふりかかるだろう。結局、自分の責任だよ、と私はいうんですよ」

「ドイツの国民は、いまだにナチのファシズムの残党を追跡しているわけではいけない』と政府はブレーキをかけている。驚くべきことに、それを日本の平和団体も、その政府のいいなりになって、反米にならないように、という方向をとっているわけでしょう。そこで『ソ連脅威論』をいっしょにあおりたてて、『米ソ同罪論』をとなえてきているわけです。そうやらないとアメリカからそっぽ向かれ、日本の経済はなりたたないというわけでしょう。そういう政府の意図どおりに、国民が牛耳られてしまっている」

「もう一つは『唯一の被爆国、被爆者』論、いわゆる自分たちの被害者意識の先行です。というのは、仮に今の中東とか朝鮮で、核戦争の危機がある、いつ彼らが核の被害にあうかもわからない、ということが強調されていくと、どうなるか。また、今レバノンでパレスチナ人に起こっていることを強調したらどうなるか。世界の目がそこに集中してしまう。すると日本でやっている反核とか、被爆者援護の運動というのがかげが薄くなってしまう。それをいちばん恐れているわけです。

日本人の被爆者組織であるとか、平和運動体は、まず自分たちが被害者だ、原爆の最初の被害国だと訴えることによって、世界の世論の同情を、そこに集中させようというのが狙いではないですか。だからある意味では、広島・長崎に原爆が投下されたのを最大限に利用しているわけです。そのためには朝鮮人被爆者の問題も、あまり表に出せない。出してしまうと今度は朝鮮人に対する同情がばぁっと大きくなっていって自分たちのかげが薄くなっていく。なぜなら『お前たちの過去は加害者ではなかったのか』となってしまう。それをやられるとこまる。だから朝鮮人被爆者を無視するわけです。けれども、今度の国連軍縮特別総会であらわれたように、世界の人々はそんなバカじゃない」

朝鮮人とパレスチナ人の共通点

「イスラエル」と「日本」の類似点に、李さんは「朝鮮人」と「パレスチナ人」の共通点をみる。

「イスラエルも日本もその頭目はなにかといえば、アメリカです。これは全く共通しているわけです。日本の場合は日米安保条約というのがあって、これもアメリカの核の傘の下にあるし、政治的にも軍事的にも経済的にも、アメリカのいいなりにならざるをえないような状態です。

その点ではイスラエルも、全くアメリカの影響下にあるわけで、しかもアメリカの忠実な番犬として、パレスチナ人民に対する不法な侵略行為や虐殺行為を繰りかえしている。これは結局、アメリカがイスラエルを手先につかって、中東をかき乱すことによって、あわよくばすべてをその支配下に置こう、というのが狙いだと私は思うんです。そういう点では日本も、全く共通しています。日本を牛耳り日本に対して強く発言することによってアジアにおける支配権をいつまでも確立しておこうという狙いがそこにある。そういう状況のなかで、いちばんみじめな目にあっているのは、日本ではやはり朝鮮人で、中東ではパレスチナ人民だと私は思うんです」。日本の反核平和運動が在日朝鮮人被爆者や朝鮮半島、さらに今日のレバノンにおけるパレスチナ人の状況に正面切って向いあえない理由もそこにある、と李さんは指摘する。

「理由は二つあると思うんです。

まず第一は、そこに目を向けはじめると闘争が反米になってしまうんです。これは今のレバノンにしても朝鮮半島にしてもこの背後にある大きな力はなにか、というとアメリカなんですよ。だからそれらに目を向けて平和運動をはじめると、これはアメリカにしばられてくるんです。反米闘争になるわけです。これは日本の政府がもっともおそれていることです。『今度の反核運動が反米になって

李さんらが編纂した在日朝鮮人被爆者の証言集「白いチョゴリの被爆者」

「アウシュビッツ」が、イスラエル人のパレスチナ人への抑圧と抹殺の〝免罪符〟ではありえないように「唯一の被爆国民」は、朝鮮人への差別と抑圧の歴史の〝免罪符〟とはなりえない、李さんはそういうのである。

〝民族の良心〟が支え

李さんの父は、朝鮮の慶尚南道、両班階級の出身であった。日本の「土地調査令」によって、土地を奪われ、生きる糧を求めて日本へ。山口県豊浦部（現、下関市）の山地で炭を焼き、生計をたてた。一九三九年、李さんは、その父の長男としてその山口県で生まれる。

厚狭中学に入学。だが日本はすでに十五年戦争に突入し、学校では、軍事教練に明け暮れた。ただひとりの朝鮮人生徒である李さんは、軍事訓練の制裁の格好の標的であった。「鮮人」「半島人」「ニンニク」……。日本人の生徒は、そうのしり、さげすんだ。その屈辱に耐えられず、李さんは中退。動員として国鉄にあずけられる。当時、朝鮮人は「創氏改名」を強制され、李さんは「山村」と名のらされた。手渡された国鉄職員の名札も「山村」。李さんは嫌って、「李實根」とナイフで削った。助役は、それをみつけ、もぎ取ってしまう……。民族意識に目覚めた李少年の、抑圧と差別への精一杯の抵抗であった。

炭焼きで生計がなりたたなくなった父は、闇米を売って糊口を凌（しの）ぐ。李さんは父を手伝い、三宮の被差別部落へ米を売り歩いた。

一九四五年八月六日夜、廃墟と化した広島に入ったのは、その三宮からの帰路である。爆心地から一・五キロ以内を通過し、放射能を浴びる。いわゆる「入市被爆者」だ。当時十六歳であった。

廃墟に残されたものは、鉄筋コンクリートの残がい、腹部の破裂した馬の屍、丸焦げになった人間の死体の束、気が遠くなるような悪臭……。李少年は、恐怖心と衝撃で、躰が硬直し言葉を失なった。放射能を浴びた躰に異常を覚えたのはその後まもなくだった。下痢が続き全身に発疹がひろがった。

そして日本の敗戦。差別への反抗心と憎悪をバネに、李さんの民族意識は一挙にふき出す。その後は「一直線に」朝鮮人として生きてきた。

李さんを唯物論へ導いたのは、九州大学の今中次麿教授の門下生がはじめた「社会科学研究会」である。旧制中学を中退した李さんには「弁証法的唯物論」は難解すぎた。誘われるままに会合に出てはみるが、容易に理解できず、投げ出してしまう。だがしばらくすると、また出てみたくなる。また投げ出す……。繰り返すうちに、おもしろさがわかってきた。ソビエト文学、日本のプロレタリア文学も、貪り読んだ。ゴーリキーの「母」、オストロフスキーの「鋼鉄はいかに鍛えられたか」は、とりわけ李青年の胸をゆさぶった。

在日朝鮮人の運動は、朝鮮戦争を機に、一段と大きく燃え拡がる。李さんもまた民族運動に飛び込んでいった。一九五〇年、朝鮮青年同盟の幹部に就任。朝鮮戦争のさなか、捕虜になった米軍師団長の「アメリカの戦争は誤りだった」という告発文ビラを、李さんらは占領下の統制を破ってばらまいた。このいわゆる「ビラ事件」によって当局に検挙されたが逃亡。五〇年、広島で地下活動に入る。

当時、朝鮮人の民族運動は日本共産党の「民族対策部」の傘下にあった。民族運動に燃える朝鮮人青年たちは、「極左冒険主義の誤りにまきこまれ」もっとも危険な第一線での仕事を指令される。五二年、李さんは逮捕された。一旦、「法廷脱出事件」で逃亡するが、再逮捕。五九年までの八年間、李さんは、二十代の

シリーズ
人間ドキュメント

同時代社

新刊
好評発売中

李恢成十年の対論
風よ海をわたれ

「地声で話せる社会」への夢と、南北に分断された祖国への熱い思いを、時代の曲り角ごとに鮮烈に対置しつづけてきた李恢成の軌跡。各界各分野の人びととの対論をつうじて、同時代に生きる人間と社会への洞察は、さらに深まり色どり豊かになった。希望の風―それは、世代をこえ、玄海灘をこえて、人々の心を暖めるに違いない。

清水知久／宮原昭夫／川村二郎／日高六郎／森敦／加賀乙彦／安岡章太郎／中里喜昭／張本勲／小田実／竹内泰宏／猪狩章／和田春樹／青野聡／F・ハミード／藤田省三／伊藤成彦／米倉斉加年／木下順二／李学仁／白竜／金秀吉／他

四六判上製460頁　定価1800円

東京都千代田区西神田2-7-6
電話(03)261－3149

大半を獄中で過ごす。出所後まもなく、「在日本朝鮮人総連合会」（総連）の幹部として、広島市で民族運動を再開していく。

四五年八月六日、李さんがみた、類々と倒れかさなっている死体や、呻き叫ぶ瀕死の人間たちのなかに、自分と同じ朝鮮人が、しかもこれほど多数いたことを知ったのは、この広島市に移ってからである。この地での運動の中で、その事実を見、また聴いた。が、総連は「その解決には、まず朝鮮統一が先決だ」という見解であった。「しかし彼らの今の苦しみや痛みは、生きている間に、できる限り早く軽くしてやらねば。日本人はなにもしてくれない。朝鮮人もなにもしようとしない、なぜだろう」。「民族の良心」が、見過してしまうことを許さない。「なんとかしなければ」と、李さんは悩み、もがいた。一九七五年、総連を去る。同年八月「朝鮮人被爆者協議会」を結成。孤立無援のなかでの出発であった。「やりとおさないと気がすまない意地張り」と「民族の良心」が李さんを支えた。

まず実態を調査しなければならない。朝鮮人被爆者を一軒一軒訪ね歩いた。七六年、調査結果を新聞に発表。大きな反響を呼ぶ。七七年、NGO（国連非政府組織）の被爆問題シンポジウムで、報告。これによって、はじめて朝鮮人被爆者問題が国際的に認知されることになる。七九年「白いチョゴリの被爆者」を出版。八〇年、在日朝鮮人被爆者連絡協議会を結成。翌年には、朝鮮人被爆者を扱ったはじめてのドキュメント映画「世界の人へ」を完成した。しかしこの映画は、日本人監督との意識のズレのため、朝鮮人被爆者の思いを十分伝える映画にはならなかった。

広島市の繁華街、八丁堀の一角に、朝鮮料理店「イムジン」をはじめたのは五年前。「家族を養い、活動の資金をつくるため」であった。朝の十一時から夜の十一時まで、結婚して三十一年になる奥さんと共に店に出る。

「平和運動の関係の客が多くて、あまりもうかりませんね」と李さんは笑う。民族運動一筋に生きてきた李さんに、当初、奥さんは反発もした。が、李さんは「私の行動は決して間違ってはいない。人間は、こうあるべきなんだ」と、辛抱強く、説得し、行動で示してきた。いまでは、李さんの一番の理解者だ。

釧路、宇都宮、長野、松江、大阪…。家業を離れ、朝鮮人被爆者の立場を、全国で講演してまわる李さんの留守を、奥さんが守る。

祖国へ帰りたい……

李さんは、いわゆる〝二世〟である。

「私は〝おばあちゃん子〟でした。祖母は、私の小さい時、いつも私をだっこしながら、口ぐせのように、朝鮮語でよくこう尋ねました。『お前の名前はなんというのか？』。『李実根（り・しるぐん）です』と私は朝鮮語で答えます。次に『お前はどこの李か？』と必ずきくんです。これは本貫、つまり李家の出身地はどこかということです。『延安の李です』と答えます。『お前は朝鮮人か？日本人か？』……。そのように祖母が質問を繰り返し、私も口ぐせのように答えました。ですから朝鮮人としての意識は知らぬ間に身についていたんですね」

また、〝一世〟である辛さん（写真）はこう語る。

「日本で生まれて日本で育った子は、自分の祖国というのはわからないわけです。わからないから、私たち一世が子どもたち全部に、自分の祖国、朝鮮はどんなところか、ということを教えて死ななければいけん、いう気持ちがあるんです。私は、自分があれだけ民族差別されて生きた人間だから、子供には絶対、〝朝鮮〟を教え込ませて忘れさせたらいけん、そう思って四人の子供たちは朝鮮大学に入れて民族教育を受けさせました」

祖国を追われて三十四年、すでにその目で祖国を知らないパレスチナ人の〝二世〟〝三世〟たちが、今なお自分の故郷はハイファだ、ジァフだ、と祖国パレスチナのことを誇らしげに語るように、祖国〝朝鮮〟と〝朝鮮人〟としてのアイデンティティは、〝一世〟から新しい世代に語り継がれ、受け継がれる。

「祖国のことは伝聞によってしか知らない。しかしそれでも、祖国に対する愛着心、祖国愛を持つ。その民族の心、血は、争えないなあ、と感じるんです。そういう意味でも、パレスチナ人たちの気持ちと全く一致するのじゃないかと思います。『これは、われわれの祖国なんだ』と、自分の血を流しても取り戻そうとする。朝鮮人が、祖国を、自分の血を流しても守りたいと思う気持ちと全く一致します」。李さんは、さらにこう言う。

「朝鮮という国は五千年の歴史を持っている。この悠久の歴史を葬り去ることはできません。三十六年間、日本に植民地支配され、国土は一時的に日本に奪われたにしても、朝鮮人の心まで奪うことはできなかった。自分の祖国の土を愛し草を愛し、山河を愛する朝鮮人の祖国愛は根強いと思います。イスラエルもまた、パレスチナ人の心まで奪うことはできないでしょう」

「帰りたい。自分の目が黒いうちに統一された朝鮮へ帰って死にたい……」

辛さんはそうつぶやく。

（砥川春樹）

猟銃で書かれた詩

詩人ハリル・ハウィの死

最も卓越したアラブ現代文学者の一人であった、ハリル・ハウィ氏はイスラエル侵攻の数日後に猟獣でベイルートにおいて自ら、命を絶った。イスラエルの犯罪的行為に対するアラブと国際社会の沈黙に抗議するためであった。

彼は一九二二年に、レバノン山脈にある、ドゥフール・アルシュウェアで生まれた。彼は青年時代から詩を作り、いくつかのアラブの文学雑誌に発表し始めた。

五〇年代半ば、ハウィは英国のケンブリッジ大学で学び、ジュブラン・ハリル・ジュブラン（レバノンの詩人）に関する論文で博士号を受けた。文学活動のほかに、ベイルートのアメリカン大学で現代文学と文学批評を教えてもいた。

死の数日前、ハウィは深い憂いと絶望とが表れた沈痛な表情で、世界の眠れる良心を、厳しく非難していたという。彼は死ぬことによって、何も言おうとしない人々の目を開けさせることを望んだのであった。

ハウィの作品には「シアール（詩）」や、五巻の「ナハール・アッラマード（灰の河）」「バヤダール・アッジュワ（飢えという干し草）」などがある。

拝啓ジェーン・フォンダ様

シャムリット・ハニーンさんの手紙

ジェーン・フォンダといえば、反戦闘士として名高いが、七月上旬にイスラエルを訪問し、戦争支持を公言したことで、彼女の看板である進歩的社会派女優としての名は完全に失墜した。

イスラエルの「アル＝ハミシュマール」紙（マパム党機関紙）に掲載された、シャムリット・ハニーンさんというイスラエル女性が、この女優に書き送った手紙の内容を紹介しよう。

＊

私はかつて、あなたがベトナム戦争反対運動で活躍しておられたころから、その勇敢さに深く感嘆し、類まれな女優としてのあなたを崇拝いたしておりました。私を含めた私の同世代の人々の多くにとって、あなたは見習うべき模範でした。

しかし、このイメージは、残念ながら壊れてしまいました。あなたは御主人とともに、私たちの気の狂った政府がレバノンに汚ない戦争を仕掛けている最中にイスラエルを訪問されたからです。

御存知でしょうが、イスラエルで、この戦争の犠牲者となっているのは、私たちの兄弟や夫や息子たちなのです。犠牲者は、レバノンにもいます。私たちの従兄弟であるパレスチナ人やレバノン人です。あなたは、私たちの側の犠牲者についてはご聞かれたことでしょうが、あちら側の犠牲者については、あなた御自身が知りたくないのか、政府がこのことに触れようとしないのでしょう。

あなたはかつて、闘士でした。ところが今のあなたは、安いプロパガンダを売り込む人になり変っています。

病院を訪ねたり、負傷した兵士たちにお会いになったり、彼らを励ましてキスしたりするのもいいでしょうが、同じく負傷したパレスチナ人やレバノン人にお会いになるべきでした。

政府は、あなたをガリリー地方に連れて行き、パレスチナ人からの砲撃の跡を見せはしましたがレバノンで私たちの軍隊が破壊した現場を見せることはしませんでした。あなた御自身が見たくなかったからかもしれませんが……。

レバノンでは、兵士や将校、それにシャロンの手先や、レバノンのかいらいであるハダッド大佐にも会われましたが、パレスチナ人やレバノン人には全く会われませんでした。あなたのイスラエル軍の舞台で演じた役割が不可解でなりません。

これまで、あなたはベトナム戦争に反対してこられましたが、今あなたはレバノンの戦争を支持しています。なんと〝人間的な役割〟であることでしょう。戦争を体験し、汚ない戦争に反対する兵士や将校らの反ベギン・デモにあなたも加わるべきです。息子を戦死させたオーゲン・キブーツのヤコブ・ゴーターマン氏らの声に耳を傾けてほしく思います。彼らの肉親を死に追いやったのは、シャロンの汚ない戦争なのです。彼らは、ベギン氏のノーベル平和賞を返すように要求もしているのです。ベトナム反戦に立ち上がっていたときのあなたが、本物であったのかを疑います。でなければ、あなたという人間が変わったのでしょうか。

あなたは、私の客人ではありませんから、あなたをイスラエルから追い出す権利は、私にはありません。けれども、あなたの本当の顔は、今や誰の目にも明らかになりました。（七月十二日）

根深い大国の罪

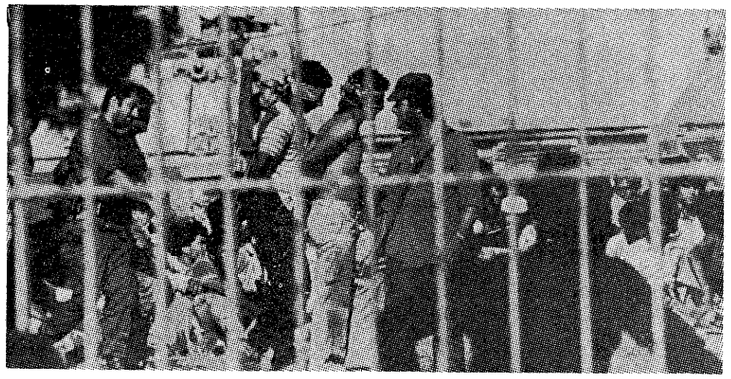
〈分析Ⅰ〉

ユダヤ人との共存の道を模索するパレスチナ人

板垣雄三
（東大教授）

石油は湾岸からはるばるタップラインといわれる石油のパイプラインを通じてレバノンまで運ばれてきた。そして今回、イスラエルのレバノン侵略のなかで、パレスチナ人の非常に激しい抵抗があったサイダの少し南にそのパイプラインの終点があった。イラク石油も同様に、パイプラインの終点をレバノンの北の方にあるトリポリにもっていた。つまり、中東の石油のかなりの部分がレバノンまでパイプラインで運ばれレバノンからヨーロッパに向けて船積みされるしくみができていた。したがって、レバノンはまさしく中東の石油業の発展の波に乗って、新しい繁栄の時期を迎えたということになる。ベイルートはそのレバノンの首都として、中東の石油産業の波に乗ったありとあらゆる経済情報、金融活動の集中するセンターになった。ベイルートを押えていれば中東の石油をコントロールすることができる時代があったわけである。

しかし、このベイルートの繁栄は一九六〇年代後半に急速にしぼんでしまった。それは、イスラエルが非常に領域を拡大した一九六七年の六日戦争・第三次中東戦争を境にして、中東の石油を湾岸から巨大なタンカーで運んでしまうシステムにかわっていった。したがって、石油の上に漂う虚飾に満ちたベイルートの繁栄も急速に色あせていくことになった。時代の移り変りのなかで、もはやそれほど大きな意味を持たなくなってしまったからである。



▼▼▼ 切り捨てられたベイルート

ベイルートの街が、急速な勢いで変貌し、発展し、拡大したのは、一九五〇年代から六〇年代にかけてであった。どうしてそうなったのか。

それは中東の石油のためである。レバノンでは石油は出ないではないかと思われているが、実は中東の石油がレバノンに向けて流れ出るようなしくみがつくられていた。たとえば、サウジアラビアのレバノンで起こっている特殊な事態であると考えがちだが、実は日本の国内でも目を凝らして見ればいろいろなところでみいだすことのできる現象と、共通のことがある。ただ日本ではロケット砲を撃ち込むとか、艦砲射撃をするとか、目茶苦茶に爆撃をするということはしないかもしれないが、何か、ある都合で「そこの土地にある施設はいりません」ということで打ち捨てられる、そういう事態とまったく共通のものである。

▼▼▼ ナチのゴミ捨て場

このように考えると、いまパレスチナ人たちが経験していることは、実は、我々が直面している、いろいろな問題と共通のものをたくさん持っているといえる。そして我々が自分自身の問題として考えなければならないと思っていることが、実はパレスチナ人によってもまったく共通の課題として背負われているのである。例えば、日本は一方では経済大国などといい、力が強くなったと思われている面があるが、しかし同時に、日本の社会のなかの人々の気持ちとしては、アメリカとかソ連とかいわゆる超大国の狭間にあって、「日本は、一体、どう進んでいったらいいのか」と、〝超大国政治〟といわれるなかで、自分達自身の針路を見きわめていかねばならない。いわば大

国の国際政治の波間に漂っているような気持ちを絶えず持っている。

このような問題は、実はパレスチナ人というものが自らの民族的な自覚を持ち始める最初から直面してきたといえる。

そもそもパレスチナという土地の区画を決めたのはイギリスであり、しかもその区画に住んでいた人が国をつくるのではなくて、新しく入ってくる外来の入植者が国をつくる。つまり、ユダヤ人国家としてのイスラエルの建国を予定したのも、当時の大国であったイギリスやフランスなどであった。

そして、そのパレスチナへの植民が決定的な段階に入るのは、一九三〇年代のことである。ナチがドイツで政権をとった一九三三年という年を境にしてヨーロッパから「ユダヤ人」というレッテルを貼られた人々が送り込まれてくることになった。そのため一九三〇年代後半のパレスチナの社会はすっかり変ってしまった。のどかな農村の傍らに突如として巨大な団地やデパート、大駐車場などが建設されるという情況と似ている。

新しい入植者というものをヨーロッパから送り込んだその張本人、言いかえれば、「ユダヤ人」と呼ばれる人々をパレスチナに送り込むという仕事を積極的に担当したのは、言うまでもなくナチズムである。一九三〇年代のナチズムは、ヨーロッパからできるだけ多くのユダヤ人を追い出してパレスチナに行かせる政策をとっていた。我々は一九四〇年代のナチズムがやったこと、強制収容所やガス室、「夜と霧」など、文字通りのホロコーストという形で問題を考えがちであるが、イギリスはナチズムが追い立てる人々に一生懸命パレスチナの入国ビザを与えて、イギリスのコントロールのもとで人々をパレスチナに誘い込んだ。アメリカではいろいろな財団が活動して、欧米で居たたまれなくなったユダヤ人に、すぐさま移住資金を与えていたが、合衆国政府はこの活動に対し特別の免税措置をこうじて支援した。

つまり、第二次世界大戦はファシズム・全体主義の国と民主主義の国とが戦い、一九三〇年代と四〇年代に向っての歴史の流れは全体主義と民主主義の二つの陣営に分かれての対立だったなどと、我々は歴史で習い、すべてが解ったつもりになっている。しかし、パレスチナ人の目から見れば、その全体主義も民主主義も、みんな寄ってたかってパレスチナに「ユダヤ人」という名の差別された植民者を送り込む仕事を、共同の事業として押し進めた。こういう形での国際政治というものを根本的に批判する眼を、パレスチナ人は持たざるを得なかった。

一九四七年から四八年にかけてイスラエルという国がつくられていくなかで、一致協力したのはアメリカ合衆国とソ連だった。我々は第二次世界大戦後の世界を考えるとき、米ソ対立、東西対立、二つの体制、冷戦など、そういうことばで世界はすっかり割り切れると思ってみている。しかし、パレスチナ人の目から見れば、できたばかりのイスラエルの国を全面的に支援し応援したのはむしろソ連であったという事実を忘れることはできない。つまり国際政治の本質を、実はパレスチナ人がすでに見抜いていたというエ一

▼▼▼ 国際政治の本質を見抜く眼

しかし一九三〇年代のナチズムがやっていたことを支えていたのは、普通歴史の話ではナチズムと敵対したことになるイギリスやアメリカであった。言い換えれば、イギリスはナチズムが追い立てる人々に一生懸命パレスチナの入国ビザを与えて、イギリスのコントロールのもとで人々をパレスチナに誘い込んだ。アメリカではいろいろな財団が活動して、欧米で居たたまれなくなったユダヤ人に、すぐさま移住資金を与えていたが、合衆国政府はこの活動に対し特別の免税措置をこうじて支援した。

つまり、第二次世界大戦はファシズム・全体主義の国と民主主義の国とが戦い、一九三〇年代と四〇年代に向っての歴史の流れは全体主義と民主主義の二つの陣営に分かれての対立だったなどと、我々は歴史で習い、すべてが解ったつもりになっている。しかし、パレスチナ人の目から見れば、その全体主義も民主主義も、みんな寄ってたかってパレスチナに「ユダヤ人」という名の差別された植民者を送り込む仕事を、共同の事業として押し進めた。こういう形での国際政治というものを根本的に批判する眼を、パレスチナ人は持たざるを得なかった。

一九四七年から四八年にかけてイスラエルという国がつくられていくなかで、一致協力したのはアメリカ合衆国とソ連だった。我々は第二次世界大戦後の世界を考えるとき、米ソ対立、東西対立、二つの体制、冷戦など、そういうことばで世界はすっかり割り切れると思ってみている。しかし、パレスチナ人の目から見れば、できたばかりのイスラエルの国を全面的に支援し応援したのはむしろソ連であったという事実を忘れることはできない。つまり国際政治の本質を、実はパレスチナ人がすでに見抜いていたというエ一面がある。我々の問題もパレスチナ人は、それを非常に正しく受け取めてくれるのではないか。「パレスチナ人に学べ」などというつもりはない。しかし彼らは、我々と共通に分かちあうことのできるものを、たくさん持っているのではないか。これまで苦難というものを集中的になめてきた存在として、パレスチナ人を見つめなおす必要があるのではないか。

パレスチナ人が言っているのは、ユダヤ人と闘うとかユダヤ人を撃滅するということではない。ユダヤ人と共存する方法をパレスチナで追求する、つまり、シオニズムから離れて植民者根性、「原住民をたたき出して自分たちの国をつくるんだ」というような気持ちをもっている人々の意識を変えさせて、そしてユダヤ人とパレスチナ人とが共存するということである。もっと広い意味で言えば、自分たちの文化を変えていくことも含めて、ユダヤ人も包摂するより新しい「パレスチナ人」というもののあり方を、これからつくり出そうとしてたたかっているのだということを、我々ははっきり見極める必要があると思う。

ともかく世の中非常に狂っていて、イスラエルがしているような不法、無法がまかり通っている。この現実のもとで、パレスチナ人の立場というものを我々はもっとより多くの人々に説明する必要があると、私は考える。

「中東の平和をもとめる市民会議」ティーチイン（七月三十日東京・総評会館）より収録。まとめ・編集部）

自滅を早めたイスラエル

出口がないのはPLOか

〈分析Ⅱ〉

ファトヒ・アブドルハミード
（PLO駐日代表）

イスラエルのレバノン侵略

六月六日にイスラエルがレバノンへの大規模な侵攻を開始し、数日のうちにベイルートを包囲した時、いくつかの政府はじめ政界や外交官の間で思い出されたのは、一九六七年六月六日に開始された「第三次中東戦争」であった。

世界のマスコミも、エジプト、ヨルダン、シリアというアラブの三国の軍隊をイスラエルが敗北させたことから、今回の作戦も〝六日戦争〟より早く終了するものとの見方を流していた。「PLOは壊滅した」とか「指導者たちはベイルートに軟禁され、逃げ場を失なっている」と書きたてた。PLO側が、イスラエルの条件を受け入れるのも時間の問題だとの予測が一般的だった。

シャロン（イスラエルの戦争大臣）も、侵略を開始して、数日たってから「PLOが敗北すれば、民政の推進がやりやすくなる」「作戦は、中東の新しい政治地図をつくるのに有利な新しい条件となった」と言った。

前号では、今回の侵略が、長期的にはアラブ世界と中東のバルカン化をねらったものであるとの見方から分析を試みた。

ここで、もう一度、イスラエルの侵略のねらいを整理してみると、次の三つになる。

1、現在進められている中東和平の解決をめざす議題から、パレスチナ問題を消し去ってしまうこと。イスラエルにとってパレスチナ問題は、民族の自決権にかかわる政治問題ではなく、難民問題にすぎなかった。

2、PLOを壊滅させること。そうすればPLOが、中東問題の解決のための国際会議に臨む立場を失ない、問題解決をめざして、何らの役割も果たせなくなる。

3、レバノンに新政治秩序をつくり、それによってイスラエルの同盟者であるファランジストの支配する強力な中央政府を樹立し、エジプトと結んだと同様の和平条約を結ばせること。

しかしながら、侵攻の目的を短期に果たすことが不可能であったために、イスラエルと同盟国のアメリカは、侵略の政治的・軍事的目的の達成を延期せざるを得なかった。何よりもパレスチナ人民の抵抗を計算しつくせなかったことが、その第一の理由であることは明白である。

第二の理由としては、レバノンの中の同盟勢力であるファランジストの力を過大評価していた。彼らをパレスチナ人民とレバノンの民族派勢力に敵対させ、これら二つの勢力をつぶし、彼らの意のままになる政権を樹立しようとしたが、レバノンの進歩勢力の抵抗で、これが果たせなかった。

つまり、根本的にはこの二つの要因によって、戦争は長期化し、イスラエル軍は、ベイルートを包囲しつつも市内に突入できないままの状態が続いた。西ベイルートに対しては食糧・水・医薬品などを封鎖し、そこに住む五十万のレバノン人たちと二十万のパレスチナ人たちに降伏を迫った。だが、西ベイルートを軍事的には包囲している筈のイスラエルは、国際世論の非難によって孤立を深めた。何よりも、この国家設立の大義を支持したイスラエルのみならず世界のユダヤ教徒とユダヤ系市民から孤立を余儀なくさせられている。

真の危機はイスラエル内部に

イスラエルのレバノン侵略は、その不法性と残虐性によってイスラエル内外の

ユダヤ教徒とユダヤ系市民の眼を開かせた。テルアビブの十万人抗議集会や、ロンドンでラビのデモが行なわれ、イスラエル内の「ピース・ナウ」運動や、予備役兵、ユダヤ教指導者らが、ベギンの政策を厳しく非難したことはユダヤ教徒内部の声なき大衆の真の態度を象徴するものと言える。「汚ない戦争はやめよ！」「犯罪人のシャロンは退陣せよ！」「パレスチナ人たちの権利を支持するぞ！」「平和共存を支持する！」などのスローガンを掲げた行動は、ベギン体制を根底から揺るがすものとはなっていないが、注目すべき動きとなって広がっている。

ユダヤ系の新聞にも、侵攻はシオニズムの醜い顔を暴露したと指摘する声が掲載されたりしているが、当然のことと言える。アラファト議長と会見したウリ・アブネリや、シオニストと言われる人たちの中からも、ベギンに反対する声があがっている。

すぐれた学者であるレボヴィッナ教授は〝ユダヤ・ナチ型のホロコースト〟と評してレバノン侵攻を非難した。宗教政党ではない労働党が、この侵略を公認し、狂信主義のとりこになったとして批判したが、このこともイスラエル社会内部で大きな問題となっている。他国への侵略を容認し、兄弟的なパレスチナ人民の自決権を無視して社会主義者を認じている彼には何らの恥じらいもないのか、と同教授は鋭く提起した。

ここで、社会主義インターが、イスラエルの労働党を活動的なメンバーとして受け入れている事実に注目しておくべきであろう。パレスチナ問題では、ベギン体制と何ら変らない労働党が二十五年間も政権をとってきたことを、改めて指摘したユダヤ系の指導者には、オーストリアのクライスキー首相がいる。彼が、労働党首のシモン・ペレスを社会主義インターから除名すべきだと発言していたことも想起したい。

レバノン侵略は、何よりもイスラエルという国家の本質を暴いてきた。真の危機は、外側ではなく、まさにイスラエルという国家の政権担当者の内部にある。イスラエルの三十四年の歴史の中で、軍人たちが政府の政策に抗議するデモに公然と参加したのは初めてである。イスラエルの正義が、音をたてて崩れていくのを目撃して沈黙できないというのが、声なき大衆の声である。ベギンは、イスラエルがローデシアと同じ運命をたどる選

レバノン戦争を通じ、結果としてここにもう一度断言できることは、パレスチナ問題がこの戦争の核心であり、同時に、中東平和の鍵を握っているという事実である。

イスラエルのレバノンでの目的は、パレスチナ人の目からは明確である。イスラエルは政治、軍事両面を持つPLOを壊滅させ、パレスチナ人の共同体を、指導体制もなく、解体させられたものにしてしまうことにある。そして、パレスチナ全土に及ぶ永久的な占領のもとでイスラエル独自の構想に従う入植地を（極力パレスチナ人を除いて）置き、エジプトと結んだような平和のための合意というものを、近接諸国との間に築き上げるものである。

このイスラエルの論理から、PLOの組織構造そのものがパレスチナ民族闘争の運命を決める要であるという考え方が引き出せる。構造を破壊すれば、生命を吹き込んでいるエネルギー源が絶てるというものである。こうしたことは、パレスチナ闘争がパレスチナ民族主義や、アラブ世界の歴史的な経験による伝統を担ってきたとする初歩的な見方であるばかりでなく、物理的現実の根拠をまったく持たない。

確かに、PLOはひとつの機構である。しかし、それ以上のもの、つまり、周辺の世界に関わっている四百万人のパレスチナ人によって作用し進んで行く（プロセス）機構なのである。

機構以上のもの・PLO

ファワズ・トゥルキー

レバノンのパレスチナ人に対するイスラエルの破壊的な戦争がPLOの基盤―執行委員会からパレスチナ国民評議会、パレスチナ民族基金からパレスチナ研究センター、パレスチナ学生同盟からサメッドまで、そして今日世界に散在しているすべてのパレスチナ人の実質的な社会構成―を完全崩壊させるという、起こりそうもない事態において、このようなことがイスラエルの助けになるとは疑わしい。

なぜなら、壊滅の後、ただちにパレスチナ人社会は再生せられるだろうから。パレスチナ民族主義のための機構の再現は確実であるばかりでなく、民族的感情がより戦闘的な立場を強めていくことだろう。この戦争においてイスラエルが得るものは何一つない。

〔文筆者は北米パレスチナ作家同盟の代表であり、"The Disinherited: Journal of a Palestinian Exile"などの著者でもある。〕（Interuarional Herald Tribune, July 13 より）

（貴）

択をしたという、レボヴィッチ教授の批判は深刻な問いを投げかけた。ナフム・ゴールドマンがマンデス・フランス氏らと共に、ベギンの政策を批判して、「いつどこでもアラファトに会ってもいいが、イスラエルの軍事当局が私のベイルート入りを認めたがらないだろう」と言った。同じユダヤ系の政治家であるクライスキー首相のベギン批判は知られているが、ミッテラン大統領が、ベイルート包囲をナチのジェノサイドと同じだと言って非難したことはヨーロッパ社会では大きな波紋を投げた。

フランスの対応は、二四二号決議の修正という形で、パレスチナ人民の民族自決権の承認を国連の安保理事会で確認しようとする動きともなっている。フランスのみならず西ドイツも、ナチの迫害コンプレックスを払いのけようと動き出している。ナチと同じ道をたどるイスライ

ルに対して、我々は、いかなる責任があるのかという声である。ナチのユダヤ虐殺の時に沈黙していた責任を問われて、罪責の念にかられてきたヨーロッパ人たちも、イスラエルが行なっている新たなホロコーストに沈黙できずにいる。イスラエルとは何であったのかを厳しく問い直さずにおれなくなっている。

より深刻なのは、レバノン侵略がイスラエルの内部崩壊を早めている事実である。その崩壊過程は、ベトナム戦争のアメリカ、アルジェリア戦争のフランスがそれぞれたどった道を思い出させるものである。

生存権　共存権

民族自決権とPLO問題でのアメリカの態度は、イスラエルの対応と一致している。アメリカは〝合法的な権利〟という抽象的な表現に固執して、パレスチナ人民の民族自決権の承認を拒否し、PLOを認めようとはしない。従って、「PLOがイスラエルの生存権を認めようとも我々はPLOを認めない」というベギン発言は、イスラエルとアメリカのものである。

レバノン侵略は、生存権と共存権という最も重要な問題を提起した。理論的には、二つの異なる人民や民族が同一の国土のもとに生存する場合に、相互の存在承認と共存は、必要で人間的でもあり、論理的でもある。パレスチナ人民は、シオニストの植民入植者たちの犠牲とされてきたにもかかわらず、生存権は双方に対して平等に保証されなければならないと考えている。しかも両者の共存は対等平等の原則に基づかなければならないし、民主主義的方式こそ、その平等を保証する唯一の人間的で合法的な方式である。

共存の問題ではベギンとその一味の考え方は、これと異なる。彼にとっての一つのオプションとは、二つの共同体が一方が優秀でもう他方が劣っているという関係を認めた形の〝共存〟であり主人と奴隷の関係における〝共存〟でしかありえない。もう一つのオプションは、パレスチナ人民の民族的統一体を抹殺するために〝最終的解決〟をはかる道であり、レバノン侵略はその具体化であった。

しかし、この方法によっても何ら問題の解決にならなかったことがイスラエル社会内部で明らかになるにつれて、もしベギンの論に従うならイスラエルの平和がパレスチナ人たちの死の犠牲にしか成立しないものとなり、それこそ、ヒットラーによる〝最終的解決〟に類似したものであることを多くのイスラエルの知識人や良識ある人々が気づかされている。

もう一つの重要な問題は、承認の問題であり、どちらがどちらを承認するのかである。アメリカは、犠牲者の側が加害者の側を承認せよと要求する。基本的には二つの共同体の間の承認でなければならないが、ベギンは、これを認めないし、何よりもイスラエルとPLOの対等

平等な相互承認を拒否している。ベギンが平和と共存の可能性を奪ったと、ナフム・ゴールドマンが批判するのはこのためである。

イスラエル社会内部の亀裂は日毎に大きくなっている。こうした情況下で、アメリカのユダヤ教徒たちは、一九四八年二月四日付の有名な書簡を、深い思いを持って想起している。著名なハンナ・アーレントやアインシュタインらの署名したこの書簡は、テロリストのベギンのアメリカ入国を認めないよう、アメリカ政府に要求したものだった。ベギンの代表する運動は「ファシズムでありナチと同類であり、ユダヤ教徒、アラブ人、イギリス人たちに敵対するものである」と書簡は述べている。

報道の三段階

マスコミ報道の問題の特徴点だけを明らかにしておきたい。三つの段階があった。初期のマスコミの姿勢は、従来のアラブ・イスラエル戦争の視点から、今回の侵略にPLO側が対決できない、と見ていた。中東戦争の終末を〝予見〟した日本のジャーナリストもいた。

ベイルート包囲は、この〝予見〟に正しさを与えるかに見えた。しかし、イスラエルとアメリカの流す情報に相異した情況が作り出されていることを気づかせたのは、現地からの生の報告であった。この段階からマスコミ報道の視点も変化してきた。出口がないのは包囲されている筈のPLO側ではなく、むしろイスラエル側であり、ワナにはまったことに気づいた、イスラエル内部の声が紹介された。イスラエルへの批判の声がユダヤ教徒のみならず、世界の世論の中で高まりを見せると同時に、PLOとは何か、パレスチナ問題とは何かを一人一人に問いかけたのは、第三段階である。人々の記憶の片隅にあったパレスチナ問題のファイルをもう一度、開けさせた。イスラエルの残虐なホロコーストは、シオニズムの最終の章を人々の心の中に書きあげているのかもしれない。日本のマスコミ報道も全体的には、この三つの段階を経ながら重要な役割を、果たしてきたと考える。このことから、教訓を引き出すべきだとすれば、ジャーナリズムの持つ客観性とか、中立的態度の真の意味であり、一人一人がこれらの報道に依拠して下した判断が正しかったのか否かをもう一度、問い直してみることであろう。

最後に、今回のイスラエルの侵略の全過程にかかわってきたアメリカは、ジレンマに立たされている。もちろんアメリカの援助と庇護なしには、イスラエルの存続が不可能であることは明瞭である。

PLOがアメリカとの直接の対話を期待していることは、何もアメリカの条件をPLOが受け入れることを意味するものではない。しかし、アメリカがベトナム戦争の終結のパリ会談の時に使った二面政策を、我々は忘れていない。アメリカのシナリオは、南北ベトナムを対立させながら同じテーブルにつかせることであったし、調停者として巨匠的な指揮者の役割を果たすことであった。

ベトナム民主共和国の側の態度は、当初から明らかだった。あくまでもアメリカが交渉相手である。主たる対話はアメリカとの間にこそなされるべきだと考えていた。ハノイとハイホン への猛爆撃が、パリの交渉と並行して進められたことを想起したい。もう一つは、この交渉を進めた人物がパリ会談のアメリカ特使（フィリップ・ハビブ）であることだ。そのことからも、ベイルート包囲と爆撃による脅迫の手口も含めて、今回もハビブ流のシナリオが準備されていることは〝ブラック・サンデー〟で示された。PLOに対するアメリカの対応は、ベトナムを〝ベトコン〟と見ていたのと酷似している。真の中東における平和の実現に到る道は、何よりもアメリカが中東問題の根底にあるパレスチナ問題の真実と実相をふまえて、パレスチナ人民の民族自決権とその代表としてのPLOを承認することである。ジレンマに立たされているのは他ならぬアメリカであるゆえに、未来への展望を切り拓く可能性を発見できこそすれ、この対決によってパレスチナ人民が失なうものは何もない。

（八月十二日、訳・関場理一）

ジャーナリストと市民を結ぶ
マスコミ市民
NO 172
《特集》集会・表現の自由
右翼団体の妨害をのりこえた日教組大会
「教育・言論の自由」の危機状況
組織された日教組大会攻撃
——島原市議会と地域の問題——
〝教科書報道〟を考える
一党独裁体制の弊
市町村に浸透はかる「B&G」の問題点
私のなかのパレスチナ(1)
日本人は自民党と心中しろ！
——日本暗黒資本主義の分析④最大派閥田中派の政治献金——
大場昭寿
藤井弥太郎
新聞記者
松野修
小林孝輔
新聞記者
広河隆一
室伏哲郎
日本マスコミ市民会議
東京都渋谷区神山町1-3
ハイツ和幸　〒150
電話(03)481−0577
郵便振替　東京5-88463
購読料 1カ月・2,850円 6カ月・1,450円 〒込み

「反逆罪」に問われながらPLO議長と対話

――イスラエル人ウリ・アブネリ氏、西ベイルートに入る――

イスラエル軍がPLOの抹殺に全力を注いでいる折、そのイスラエル人の一人が、自国軍に包囲された西ベイルートに乗り込み、PLOの指導者との会談に成功した。公式にはじめて実現したPLO議長とイスラエル市民の対話である。この事実を知ったイスラエル国会は、この勇気ある同国人を「国家反逆罪」に問うた。

ウリ・アブネリ氏。前イスラエル国会議員で週刊誌「ハオーラム・ハゼイ」編集長また「ピース・ナウ」（今こそ平和を！）運動の指導者の一人でもある。

この会談が実現したのは西ベイルートのあるアパートの一室。記者とカメラマンをともなったアブネリ氏は、詩人のマフムード・ダルウィーシ氏やPLOスポークスマン、マフムード・ラバディ氏らと共に現われたアラファト議長と辛直な意見を交換した。以下は、その対話の抄訳である。

真の解決は国連決議にある

アブネリ　今の事態を非常に残念におもっています。（中略）問題は、私たちイスラエル人のなかに権力に酔っている者がいることです。というのは、ユダヤ系の人々は長い間、権力というものを持ったことがなかった。だから一旦、権力を得るとそれに酔ってしまい、力によってすべての問題が解決できる、と思うようになったのです。

アラファト　それは力の驕（おごり）です。なんの値打ちもない驕なのです。

アブネリ　今日、テルアビブでは「ピース・ナウ」（今こそ平和を！）運動のデモが大きなうねりとなっていますが、もしあなたがデモをする人の前で話をする機会が与えられたら、戦争に反対する、平和主義者と自由主義者たちになにを言うつもりですか。

アラファト　私たちもあなた方と同じ人間だ、私たちにも生きる権利はあるんだということ告げるでしょう。

アブネリ　イスラエルの平和主義者・自由主義者が直面している現実の問題は、ガザ地区とヨルダン川西岸を領土とし、東エルサレムを首都とするパレスチナ国家はパレスチナ問題の完全な解決なのかということです。

アラファト　真の解決は国連の決議にあります。

アブネリ　国連安保理決議二四二を意味するのですか。

アラファト　二四二は、PNC（パレスチナ国民評議会）で拒否されました。パレスチナ人の存在を全く無視したものだからです。（以下略）

アブネリ　あなたの言う「国連決議」とは全部の国連決議を意味するのですか。

アラファト　その通り。我々はすべての決議について論じなければならない。

あなたも御存知のように、イスラエルは、国連の決議を基盤として設立された唯一の国です。しかも、いかなる国連決議も尊重しない唯一の国でもあるのです。

アブネリ　どうして今回のような事態がおこったかを敢えていえば、多くのイスラエル人――彼らは本来、平和を愛する人たちなのだが――は、「PLOは事実、平和を望んではいない」という、情報網を駆使した政府のキャンペーンに説得されてしまったからなのです。（中略）

いわゆるイスラエルを含む、この地域におけるすべての国家の安全は保障されるべきだといったのはどちら側なのでしょう。

アラファト　（前略）覚えていますか。私自身が、サウジのファハド案は、中東における問題解決に、非常にのぞましい基盤を備えているということを表明しました。私たちが平和を望んでいるという証拠はたくさんおみせできます。

残念なことに、イスラエルの軍事政権は高慢に振るまっています。彼らが歴史からなんの教訓も引き出せないのが私には残念です。我々は、歴史の恩恵からなにも学べないようです。

「ユダヤ人を海へ追い落す」とは大嘘だ

イエッシ（アブネリ氏に同行した記者）　イスラエル人は、パレスチナ人が平和を望んでいるとは信じていないと私は思います。その理由のひとつは、パレスチナ憲章の一文に、ユダヤ国家は存在しない、ユダヤ人も存在しない、とうたっていることです。

アラファト　ちがう！それは事実ではない。私たちはその憲章のことは熟知しています。我々の憲章なのですから。その

なかには、あなたがおっしゃったことに触れている箇所はどこにもありません。この憲章のなかには、ユダヤ人については全く言及していないのです。（中略）

PNCの十三および十四期に採決された、有名な（また重要な）決議を、思い出していただきたい。そのなかで、我々はイスラエルのすべての民主勢力との対話をはじめなければならないとうたっているのです。

アブネリ　（前略）しかしイスラエル人のすべてはシオニストです。その意味をよくわかっていない者も、自分はシオニストだと規定しています。

アラファト　あなたがたは、私がシオニストの理論を受け入れることを期待しても無理です。（中略）宗教的な見地からみれば、少なくとも私はシオニズムの理論を受け入れることはできません。ユダヤ教は、私たちの（パレスチナの）文化の一部です。私自身を、反セム主義者と規定はできません。つまり、ユダヤ教は私たちの文化の一部であり、イスラム教もまた、私たちの文化の一部です。キリスト教もそうです。

イエッシ　これも残念ながらイスラエル人が信じていることですが、あるパレスチナ人がかつて、ユダヤ人は海へ追い落とさなければならない、と言ったということです。

アラファト　ちがいます！だれがそんなことを言ったのですか。それは、大嘘ですよ。パレスチナ人のだれひとりとしてそのような嘘は引き合いに出しません。イスラエルの軍事政権は、この嘘を繰りかえしているのですか。これがパレスチナ人によって言われたという証拠のひとつでも私に示してください。

アブネリ　おそらく、アハマド・シュケイリが初代のPLO議長時代にいったのです。

アラファト　ちがう！ちがう！彼はそんなことは言っていない。このことを私たちは調査しました。これは大嘘です。（中略）

アブネリ　イスラエルの大多数にこのことが信じられていなかったら政府は兵士をレバノンへ送れなかったと思います。シャロンは、自分がやりたいことに対して、自分自身のはっきりした考えをもっています。シャロンは、ヨルダン川西岸をイスラエルに併合したがっている。それを実現するために、PLOを抹殺したいのです。しかし、もしイスラエル兵士たちが、PLOの目的はイスラエル国家の崩壊にある、と信じこんでいなかったら、シャロンがやろうとしてることを実現できなかったことでしょう。

アラファト　知的で優秀な人々、ユダヤ系の人たちが、このような嘘を信じこむなんて、私には信じられない。（中略）

Arafat and Avneri on the Longest War

会談を伝える「アル・ファジュル」紙

祖国以外にどこへ行けというのか

アブネリ　私は何年もの間、このインタビューの機会をずっと待っていました。というのは、あなたに、まさにこのことを告げたかったからです。

現実の問題は、イスラエル人の多くがパレスチナ人はイスラエル国家を承認するつもりはないと思いこんでいる。パレスチナ国家とイスラエル国家の間の和平のわく組みさえです。

これが、市井のあらゆるイスラエル人が理解できる方法で、完全に明確にされるべき点なのです。つまり、相互理解と相互尊重、相互承認を基礎とした平和的解決をあなたがたが望んでいるかということです。

アラファト　政治的な分析の前に、あなた方におたずねしなければならない。パレスチナ人たちのことはどうなのですか。この地に住んでいるパレスチナ人たちのことはどうなのですか。イスラエル人たちだけでなく全世界のユダヤ教徒に問わなければなりません。四百万人のパレスチナ人たちの運命はどうなるのですか。

アブネリ　彼らはパレスチナ国家へ帰るべきです。

アラファト　パレスチナ人たちの将来はどうなるのですか。難民のままでいろというのですか。今やシャロンは独裁者になって我々に出ていけというのです。どこへ？クレタ島？どこへ行けというのですか？キプロス？私は人間です。パレスチナの子供たちには生きる権利があるのです！（中略）

アラファト　強調しておかねばならない点がいくつかあります。現在、西ベイルートに住む六十万人のレバノン人と同じくこの地区にいる二十万人のパレスチナ人の安全のために、私はいつでも政治的な解決の方法を見いだす用意はある。その解決のため、レバノンの当局者と交渉している最中です。

アブネリ　もし、ここからの名誉ある撤退が、可能性があるとしたら、どこへいかれますか。（中略）

アラファト　パレスチナへです。これは私の権利です。あなたは（イスラエルへ）戻りますか。

アブネリ　はい、明日戻ります。

アラファト　あなたはそこへ戻る権利があると思っていらっしゃる。そして私にはあなたと同じ権利はないのですか？私も一人の人間です。どこへ行けというのですか。私の祖国に近づくなというのですか。私は、自分の祖国へ帰りたいのです。（以下略）

（本誌編集部訳）

ユダヤ人の二つの顔

●現役大佐の辞任の言●

イスラエル軍の現役将校が「レバノンでの戦争は自分の良心に反するし、旅団長として、このまま戦争を指揮し続けることができない」として、辞任を申し出た。その結果、七月二十六日までにエイタン陸軍中将は辞任を認めた。この将校は**ウリ・ゲヴェル**大佐で、イスラエル軍のなかで最も前途有望な将校であり、旅団長として、最年少であった。エイタン参謀総長、シャロン戦争大臣、さらにベギン首相は、ゲヴェル大佐に辞意を撤回するよう説得したが、無駄であった。

大佐は、彼らの懇願にこう答えた。

「私は、死んだ兵士たちの親たちの目を見つめることに耐えられなかったし、戦争目的そのものを自分自身で信じることのできない戦争で、彼らの息子が死んだんだということを告げることはできませんでした」。

●イスラエル兵士の抗議●

レバノンから戻った高級予備役兵のグループが、エルサレムでデモを行っていた。二百人くらいのデモ参加者があり、彼らの声明に対する署名を、通行人から数百ほど集めた。声明では、即時停戦と、国家承認もなく冷笑的にイスラエル国防軍を利用しているとして、アリエル・シャロン国防相を告訴し辞任を要求した。

デモのリーダーの一人である**モシェ・サビール氏**（33）は、ボーフォール城の征服隊にいた。そして昨日、ボーフォールの戦闘の報告に虚偽があったと、抗議していた。彼は自分も含め残留することになった兵士らが黙殺され、死んだことに、深い衝撃を受けたと語った。それに対するシャロンの声明は〝死傷者ゼロの偉大な戦闘〟というものであったが「黙殺された多くの死を償うために、私が沈黙を破るシンボルとして、ボーファール城に向って誓ったのは、まさにその時でした」と話した。

「イディオット・アハロノート」7月5日

●ゲルニカを思い起こさせる●

「ヒットラーの迫害を逃れアメリカ市民となったユダヤ人として、イスラエルがレバノンで行なっている戦争には、そして、罪のない人々の命を奪っていることを全くかえりみない貴政府の冷血ぶりには、恐ろしくて背筋が寒くなります。ティールやシドン、ベイルートの爆撃は、ドイツ軍のゲルニカやワルシャワ、ロッテルダムなどの爆撃を思い出させるものであり、同じくいまわしいものです。貴殿方は〝ホロコーストの犠牲となった人々の追憶に不名誉な恥辱を与えてしまいました。

アメリカ政府の憶病な反応や、アメリカのいくつかのユダヤ系市民団体の支援に、まどわされてはなりません。アメリカの大多数のユダヤ系市民や非ユダヤ系市民は、このイスラエルの行動を断固として非難しています。イスラエルが、この国（アメリカ）でいかなる道義的資本を持っていようと、それは急速に消滅しつつあるのです。」

ジョージ・O・ケント（メリーランド州ケンジントン市）「エルサレム・ポスト」7月7日

●ベギンへの公開書簡●

私はアメリカから移住し、しばらくの間ここが私の国であることに疑いを持つことなどけっしてなかった。そして、ここ南部ガリリーで、近所に住むアラブ人たちと平和に暮している。

テルアビブのある家族の家の前に掲げられた大広告には、「テロリスト独裁者の〝シャロン〟に気をつけろ。あなたの女どもたちの殺人犯人」と書かれている。

しかし、シドンにおいて近隣者の親類の人たちが砲撃の下にあった日、私の息子ヤーロンが倒れたとて、だれが彼らに何を語りかけられるというのか。私を慰めるのにだれが来るというのか。ベギン殿、あなたは私の息子を返すことはできません。しかし、これ以上先立つ者、痛み、苦悩をつくってはいけない。息子ヤーロンが日記張に残した詩の最後の一節を、私は繰り返します。「もういい。これ以上の殺しはいやだ。」ベギン殿、ノーベル平和賞など返すべきです。

痛みと悲しみと、そして希望をこめて……この戦争はこれ以上続けてはならない。

●単一の国民、単一の軍隊、そして単一の政府●

七月十七日、テルアビブで開かれた「ガリリーの平和」キャンペーンに連帯するデモにおいて、目だったことがひとつある―。これが全く組織されたデモであった、ということだ。デモの最前列の中央という〝特等席〟に、あるグループが陣取り、演壇からの発言に、実にたくみな合の手を入れる。それだけではない。聴衆からも、いいタイミングにしかもスピーチとよく調和のとれた声援がいつも飛んでくる。集会の二時間位前から、この一団が、予行演習していた可能性が強い。

組織者たちは、プラカードや垂れ幕をも統制しようとした。海外の報道陣のカメラがむけられると、一斉に「ベギンとシャロンに神の祝福あれ」といった調子の、英語で書かれたプラカードがあげられる。

ヘブライ語で書かれたプラカードのなかに、ひとつだけ目を引いた赤い文字があった。「単一の国民、単一の軍隊、そして単一の政府」。西ドイツのテレビ報道陣が、ただちにスポットをあてた。それはナチがかつて使っていたスローガン「単一の国民、単一の軍隊、そして単一の政府」と全く一致していたからだ。＝イスラエルの新聞「ダヴァール」7月19日

●本音を話せば、シオニズムの醜い顔が表われる●

ベギン殿、ベイルートの殺人的な襲撃について私見を「ガーディアン」紙7月17日に載せた結果、私はシオニズムの醜い顔をじかに見ることになった。留守番電話のなかの激怒した声々、

「お前などくたばってしまえ！」とか「お前はガス室で死ねばいい」と、言葉で襲撃を加えてきた。ある口ぎたない者は真夜中に電話をしてきた。

しかし一方で、イスラエルやレバノンへの思いをはっきりさせることに対し、感謝、支援の感情を親切にも手紙で書いてくれたり、電話をしてくれたユダヤ人やその他の人々、その数は幸運にも、攻撃的に電話をかけてきた人より多かった。

ユダヤ人は先頭に立って、進んで声をあげなければならない。十万人ものイスラエル・ユダヤ人が、戦争に抗議し、テルアビブで行進した。たぶん、あわを吹いて私を批判する若者たちは、この十万人の人たちをもガス室に送りたいのだ。

フィリップ・スタイン（ロンドン）

＝「ガーディアン」7月26日

イェホシュアザミール、キブーツ・エイン・ドールから＝「アル・ハミシュマール」7月1日

ヒットラーの声が聞こえてくる……

ユダヤの民の様々な歴史的場面を描いた、クネセット（イスラエル国会）の建物の中にあるマルク・シャガールのタペストリーの前で、**ベギン**が百九十人のユダヤ系アメリカ市民訪問団に向けて演説した一部。

「神以外のものに対して、ユダヤ人は跪きはしないということを、あなた方は忘れてしまったに違いない」

「人道主義について、われわれを説教するものなどはいない」

「首相として、私は〝ベルリン〟に突入しようとする勇敢な軍隊を指揮する権限があると感じている。そこでは、罪のない民間人の中に、ヒットラーと彼の忠実な子分らが、武器貯蔵庫の奥深くに隠れひそんでいる」

「もしPLOの奴らがベイルートを出ていかなければ、われわれの側で問題をかたづけるだけだ。PLOもベイルートや、レバノンからいなくなるだろう。いや、そんなことは問題外なのである」。（8月3日、クネセットで）

まず第一の目的は、PLOの軍事勢力を壊滅させることであると、イスラエルの侵攻を〝弁護〟するために来日した**モシェ・シャロン**教授（前首相顧問）は「ジャパン・タイムズ」紙とのインタビューで述べた。「イスラエルは、できるだけ多くのPLOの『テロリスト』を殺すことにつとめている」と。

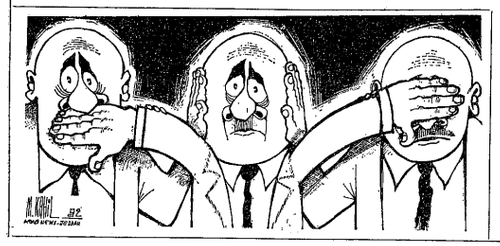
「私は二年前、キブーツに六カ月間滞在し、イスラエルから戻ったあとも、イスラエルでの生活様式に従って暮らしています。イスラエルに滞在している間に、私は国内を旅行し、イスラエルがどういう国であるかを知ることができました。だから、イスラエルがレバノンに侵攻したことを知っても驚くことはありませんでした。しかし、一つだけ疑問があります。どうして、もっと早く、侵攻に踏み切らなかったのか、という疑問です。

イスラエルはパレスチナの恐怖を終わらせ、とどめをうつべきです。そのあとで、付与するに価するパレスチナ人に対する「自治」について、私たちは話し合ってもいいと思います。今こそユダヤ人が統一されるべきです。」

ユダヤ系メキシコ人、**ジョセフ・ベナサット**

＝「エルサレム・ポスト」7月7日の投書欄

アメリカにおける報道をみて



桂　由夫

在アルバニー（ニューヨーク州）

こちら（アメリカ）に入ってくるニュースは、イスラエル軍が進撃するほどに、その占領地からの度合が大きくなってきています。これらの新聞、テレビニュースはすべてイスラエル軍の検閲を受けるので、正確な事態を知ることは不可能です。それでもなお、破壊の凄じさを見ることはできるわけですから、実際に行なわれた破壊と殺りくは想像を絶するものかもしれません。

検閲も「民主主義国家」を自認しているイスラエルとして異例のきびしさのようです。二四日（六月）のテレビニュースで、NBC（CBSだったかもしれません）のニュースキャスターが「初期の検閲は軍の機密に関することに重点を置いていたようだが、時を追って、政治的にイスラエルのイメージを傷つけるような内容のものまで対象にされるようになった。我々はイスラエルを経由しない送信ルートの確保に全力をあげているが、事態を正確に伝えることはきわめて困難になってきている。このようなやり方はまわりまわって、イスラエルのイメージを損なうことになるのに気がつかないのだろうか」と、おそらく異例のきびしさで、イスラエルの検閲を批判していました。

軍による検閲とカット

こちらの新聞、テレビニュースは、検閲された場合、必ず「これはイスラエル軍の検閲を受けたものである」と冒頭に断わっているので、大変、読者あるいは視聴者には便利です。一昨日のテレビでは「この部分、二十二秒間がイスラエル軍によりカットされた」というテロップを流していました。もっとも、軍事的に押されているシリア軍は、シリア軍部隊の撮影を認めていないそうです。PLOが取材には一番協力的で、前線の外国人記者に護衛兵まで付けているそうです。

この事実は、イスラエルが、シオニスト的傾向の強かったヨーロッパ、アメリカの人々にも見せたくないほどのことをやっているのだということを強く示唆するものだと思います。

国連安保理で、イスラエル非難・経済制裁決議に唯一反対したアメリカでも、政界内部でさえレーガンの対イスラエル政策は強く批判され、「こんな政策を続けていれば、アメリカは世界から孤立してしまう」という声が強まっているようです。

「解放軍」のように歓迎？

しかし、アメリカのマスメディアは、必ずしもイスラエルに批判的ではありません。特に、ニューヨーク・タイムズの報道は全体としてかなり強い親イスラエル傾向を示しているように感じます。イスラエル軍の破壊と殺りくを怒るレバノン人の声は、ほとんど紙面にあらわれずイスラエル軍を「解放軍」のように歓迎するレバノン人キリスト教徒（おそらくマロン派）の話や表情がしばしば紙面に大きくあらわれます。

これは、イスラエル占領下の、しかも軍の検閲を通ったニュースですから、当然といえば当然ですが、注意深い読者でなければ、レバノン人の大半がイスラエル軍の侵略を歓迎しているかのような錯覚をいだいてしまいます。ファランジストとその支持者が歓迎しているのは事実でしょうが、これだけ徹底的にいためつけられて「これでパレスチナ人がいなくなる」と喜んでいるレバノン人が多数派だとは常識的に考えられません。

また、PLOの軍事的・政治的生命はこれでおしまいだ、というような調子の強い記事・解説も目立ちます。もちろん注意深く読めば、パレスチナ人の抵抗がそんなに根の浅いものではなく、ファタハランドを占領され、通常戦争で敗退したからといって、全面敗北につながるものではないというような記事も目にとまるのですが、一般的な印象としては、PLOが敗れて、中東の平和、レバノン統一への展望が開けてきたということになってしまうのです。ただ、興味深いのはイスラエル軍の一般兵士が、パレスチナ人の勇敢さに感心し、「早く家へ帰りたい」と言っていることです。こうした記事は、新聞・雑誌のインタビュー記事のなかに出ています。

一方、アラブ諸国の体制派が、表向きの政策とは裏腹に、パレスチナ人の闘いをやっかい視し、PLOの軍事的・政治的弱体化を望んでいることはよく知られ

ていますが、ディル・ヤシーン（一九四八年四月）の比ではないシオニストの暴虐に対して、かくも弱い反応しか示さないのはどういうことでしょう。

また、国連核軍縮総会に向けて、五十万人を超す、アメリカ史上最大のデモがニューヨークで行なわれていたにもかかわらず、こちらの新聞・テレビで見る限り、イスラエルを非難するスローガンやプラカードがほとんど現われなかったことも実に奇妙に感じました。

（6月26日記）

テレビの弊害が問題となってから久しい。「もうテレビは見なくなった」という友人も、まわりには多い。しかしテレビのもつ積極的な役割を思い起こしてくれる番組が時々ある。

イスラエルの侵略が開始されて一カ月たった頃から、日本人特派員が現地で取材した生の報告が茶の間に飛びこんでくるようになった。トリックの少ない、まして、いわゆる〝やらせ〟ではない生の映像に嘘がない。何よりも迫力がある。

テレビが〝生き残る〟ために

「パレスチナしか帰るところがない」と叫ぶ老婦人のクローズ・アップ、硝煙にけむる西ベイルート、戦火の中で逞しく生きている人々……。画面からは、生きている人間の息吹きが直接的に伝わってくる。

テレビには、人々の思いを結ぶというもう一つの有効な機能がある。八月九日の、テレビ朝日（系）の公開ドキュメント「あなたは生き残れるか！」は、テレビのもつ素朴な機能の原点をも考えさせる好企画であった。

核問題を現在おこっている戦争との関連で位置づけた。中東問題ではとくにベイルートからの現地報告をおりこみ、危機的な現実を提起した。宇都宮徳馬、小田実、藤原弘達、田原総一朗、海原治の各氏らをパネラーとした討論は、フロアーからの被爆者など、市民の発言によって熱のこもったものになった。更に広島と長崎の現場からは作家の大江健三郎氏の発言も加わり、多元的なひろがりは問題への視点を深めた。

かつて、ベトナム戦争に反対する国民世論の形成で初期的に重要な役割を果たしたテレビ番組に一九六五年八月の徹夜ティーチ・インがあった。いま最もテレビに期待されているものがあるとすれば、それはイスラエルのレバノン侵略とパレスチナ問題に焦点をあてて多元的に討論を組織し、日本人として何をなすべきかを真剣に提起することである。タイトルは「イスラエルによるホロコースト―あなたはパレスチナ問題をどう考えるか」とでもなろうか。テレビが生き残るためにも、そんな企画を望みたい。

（関）

「降伏した」と伝えられるアシュバルの指揮官がTVインタビューで真実を語る

サラハ・タアモリ氏（ディナ元ヨルダン国王妃の夫）について流された報道内容は、イスラエルの軍事当局にタアモリ氏が降伏し、「PLOの生命は終った」と語ったというものだった。が、これはイスラエルの完全なプロパガンダであることが、タアモリ氏とイスラエルのテレビ局とのインタビューで明らかにされた。イスラエル市民には当惑すべき真実であった。

タアモリ氏が、アシュバルという八歳から十四歳までのパレスチナ人青少年達の軍事教練を担当する指揮官であったことはよく知られている。テレビ局側は軍事当局が発表したように、タアモリ氏が降伏して、捕虜になったのではないと解説した。

イスラエルのテレビ局――ご職業は何ですか。

タアモリ氏　私は、アシュバルというパレスチナ人第三世代の軍事組織の指揮官です。

――というと、イスラエルを相手に戦っているのですか。

タ氏　もちろん、そうです。あなた方の攻撃に対抗し、私達の祖国を解放するための戦争は合法的なものです。

――あなたの運命は、私たちの掌中にあります。イスラエルがRBG（対戦車砲）の子どもたち、とたとえたアシュバルの少年たちを捕えることもできます。

タ氏　私は第二世代に属します。アラファトは第一世代の人間です。そしてあなた方がRBGの子どもたとえる第三世代がいます。一人でもパレスチナ人が存在するかぎり、私たちの祖国に、植民地主義入植者たちの平和も安全もありません。あなた方は、侵略によって自分たちを破壊しているのです。パレスチナ問題を解決せずして、安全や平和を想像することが、どうしてできるのでしょうか。

――しかし、ベイルートで包囲されているアラファトや幹部たちは、降伏することにしたようですが……。

タ氏　そんなことは断じてありえません。第一世代のナンバー1であるアブ・アンマールが降伏するというようなことは考えられません。最終ナンバーにとっても、降伏は不可能です。

――誰が最終ナンバーなのですか。

タ氏　生まれてきたばかりのパレスチナ人です。あなた方からの野蛮な仕打ちを食物として成長していきます。彼らは、たたかい続けるという決意を固めながら大きくなるでしょう。

――釈放されたら、どうしますか。

タ氏　あなた方と戦うために、前戦に戻るつもりです。

日本各地・各界の
イスラエルへの抗議と
PLO支援緊急行動

イスラエルによるジェノサイドに抗議する行動は、七月に入って更に日本各地に広まってきた。デモや集会、ティーチ・イン、映画会、学習会など多様な活動がくり拡げられてきている。また緊急の医療援助に総評や日本・パレスチナ友好議員連盟が多額の支援金を寄せた。PLO駐日代表部には事態を憂慮する日本の市民からの手紙があいついで寄せなれている。以下に7月1日から8月12日までの動きを日誌風に追ってみた(編集部)。

講演会ティーチ・イン

7月1日　東京の品川ロータリー・クラブ総会でPLO駐日代表がレバノンでの事態についてアピール。

7月3日　「今レバノンでおこっていることを考える」講演とティーチインが東京お茶の水の全電通会館で。主催は、中東の平和をもとめる市民会議。発言とパネル・ディスカッション（ルティ・広河、ウラジミール・タマリ、アブドルハミード、板垣雄三、加納吾郎、岡倉徹志の各氏、司会は芝生瑞和氏。）

7月3日　日本アジア・アフリカ連帯委員会は「ベイルートでの緊迫した事態について」という声明を発表。

7月9日　東京お茶の水の総評会館で「イスラエルのレバノン侵略反対集会」（アジア・アフリカ人民連帯日本委）でPLO駐日代表が特別報告、講演は甲斐静馬氏。

7月10日　大阪で、「パレスチナ・レバノンの戦傷者にパンとくすりの基金を送る連絡会」が設立集会を行ない、募金運動を開始した（送金先は三和銀行阿倍野橋支店「パンとくすりの基金」四一一四八一　郵便振込「パンとくすりの基金」大阪一―六三二九一）。

アピールでは、「私たちの沈黙が無法な殺りくと虐待を許しています。……今パレスチナ人の真実の叫びに耳を傾け、それに応えて立ち上りましょう」と呼びかけた。

7月10日　第23回青年学生平和友好祭が山中湖で。PLO駐日代表のアピール（メッセージ）に応えて社青同が支援募金（約五万円）を集めた。更に県レベルの友好祭にもカンパを呼びかけた。

7月10日　「今、世界は……平和のゆくえをさぐる」講演会（田英夫・関場理一の両氏）が平和と民主主義を求める京都行動・同大阪行動の主催で、京都会館別館ホールで。また翌7月11日には「パレスチナに救援の手を！」と街頭行動が行なわれた。

7月11日　山形市の反安保青年交流会は「パレスチナ解放闘争に連帯せよ」のビラをまいて市民にアピールし署名活動を開始。

7月12日　三里塚闘争に連帯し、動労ジェット闘争を支援する東京実行委でパレスチナ人民の民族解放闘争を支持する決議を採択。

7月12日　北海道教職員組合がPLOに激励電。

7月13日　反戦・反核・三里塚を闘う茨城県労働者有志がPLOにカンパと激励。

7月13日　盛岡市岩手大学で「パレスチナ問題――映画と講演」を世界のための学生行動が主催。講演は、関場理一・高頭祥八の両氏。また同日夕には市内の公民館の労働者・市民集会でも、映画と講演（関場氏）。二つの集会から支援金をPLOに送る。

7月14日～　北海道AA連帯委のよびかけでPLOへの激励のハガキがこの日から連日のように寄せられる。

機動隊に妨害されながらもイスラエルの侵略に抗議し，力強くデモ行進した。

美術展で連帯

7月14日　パレスチナ連絡会議、JALA（日本アジア・アフリカ・ラテンアメリカ美術家会議）などの呼びかけで「パレスチナ人民ジェノサイドに反対する」デモに約百人が参加。檜町公園から、新橋まで約一時間にわたって、「イスラエルはレバノンから出ていけ！」とシュプレヒコールとともに行進。

7月14日～19日　盛岡市ギャラリー彩園子のクラムボンで広河隆一・中村晴彦写真展が同展実行委主催で開かれ、7月19日に、盛岡市総合福祉センターで、傷ついたパレスチナの子どもたちのために……映画と講演（高頭祥八氏）。

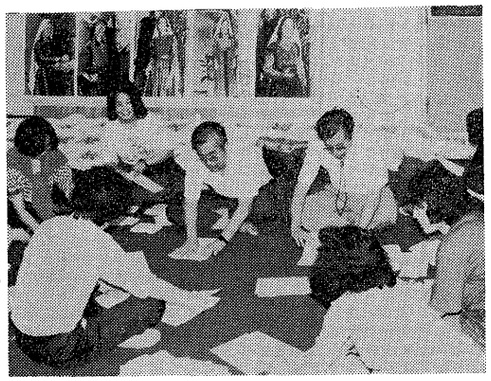
7月14日～23日　東京都美術館で「第三回第三世界とわれわれ展」。主催同実行委と日本アジア・アフリカ、ラテン・アメリカ美術家会議。パレスチナの作品が陳列され、イスラエルのパレスチナ侵略に抗議する連画「乱」（絵画によるシンポジウム）。7月17日　同展シンポジウムが上野のスペース・ニキで、アブドルハミードPLO駐日代表が講演。

7月15日・北海道教職員組合、札幌市教職員組合、新日本婦人の会札幌支部などよりPLOへ激励のハガキ。

7月19日　全学連（代表藤本委員長）は六月二十二日についでイスラエル大使館に抗議行動をおこなった。

7月20日　日本キリスト教団（後宮俊夫議長）と中東の平和をもとめる市民会議は東京の日本キリスト教会館で共同記者会見。中嶋正昭・日本キリスト教団総幹事が同教団常議委員会の「イスラエルのレバノン侵略を非難する声明」を発表。市民会議の芝生瑞和事務局長は「ベイルートに医薬品を送る基金」がすでに五百万円を越えたことを発表。

7月20日　東京「許すな拷問！うちやぶれ大弾圧7・20全人民大集会」（同よびかけ人主催、港区赤坂公会堂）で特別提起講演は「パレスチナ人民の闘い」広河隆一氏）。



市民会議のワークショップで。

デモと映画会

7月22日　「イスラエルのレバノン侵略を糾弾しパレスチナ人民と連帯する7・22東京集会」が東京品川南部労政会館。同実行委主催。講演は板垣雄三氏「パレスチナ解放闘争」。スライド上映、緊急アピール（PLO駐日代表）、集会宣言など。

7月23日　総評（槙枝議長）がLPO駐日代表の緊急支援の要請にこたえ二百五十万円の支援金を送る。

7月26日～29日　東京で「中東の平和をもとめる一週間」。中東の平和を求める市民会議が渋谷の山手教会において、平和をもとめる「ワークショップ」を催し、連日、参加者は数十人を数えた。このワークショップは、板垣雄三、黒田寿郎、黒田美代子氏、清水学、森詠、鍵和田良輔の各氏らが講演し討論会がもたれた。その後、参加者全員が、ベイルートへ医療品を送る基金のためのTシャツづくり、市民会議の会報の発送準備などの作業にとり組んだ。

7月28日　「パレスチナ映画の集い」が東京品川区の南部労政会館で。主催は7・28実行委、後援は三多摩パレスチナと連帯する会。

7月28、30日　PLO駐日代表部スタッフが、国会議員（衆）百人を訪問し、緊急支援を要請。

7月30日　市民会議主催の第二回目の「講演とティーチイン」が、東京・お茶の水の総評会館で。パネラーとして、ベイルートから帰国してまもない浅井久仁臣、ルティ・広河、ウラジミール・タマリ、板垣雄三、アブドルハミード、小田実の各氏が、それぞれの立場から発言。

7月31日　全石油シェル労組、PARC行動委員会、三多摩パレスチナと連帯する会が呼びかけたデモ。約百人の市民が、機動隊の妨害のなか「イスラエル糾弾」を叫びながら清水谷公園から日比谷公園までデモ行進。

8月上旬には法政大学でも映画と学習会が行なわれた。

核廃絶とパレスチナ

8月1日　差別と闘う82年前期例会が東京で開かれ、映画「パレスチナ最前線を訪ねて」の上映など。

8月3日　大阪で「イスラエルの侵略・大量虐殺糾弾！　パレスチナ人民連帯大阪市民集会」がPLP会館で。主催は関西パレスチナ人民と連帯する会。但し講師の森詠氏は台風のため大阪にたどりつけず、討論を中心に行なう。PLO駐日代表からメッセージ。

8月4日　日本AA連帯委員会帯広支部がPLOに激励電。

8月5日　広島市で開かれた「被爆37周年学生集会」の要請で、PLO駐日代表（代理）から現情報告とアピール。会場カンパ五万円が寄せられる。

8月6日　原水禁世界大会の関連集会でPLO駐日代表部より5日、6日の両日アピールする。

8月7日　岡山市労働福祉会館で「レバノン情勢―映画と講演」が開かれ、PLO駐日代表部のスタッフが報告。

8月7日　こちらデスクの会（第5回例会）パレスチナ討論会、イスラエル対PLOにわかれてディベイト（討論）。ベギン首相対アラファト議長の対決で激突。

8月10日　日本・パレスチナ友好議員連盟がパレスチナ赤三日月社に医療援助として五十万円（相当）を送る。

8月12日　市民会議より寄せられた百万円をふくめ、パレスチナ・レッドクレセントへ送金。

第7課、定冠詞と格変化

○フリガナはアラビア語にそって右から左にふってあります。
○母音表示記号を忘れた人、№22を復習の事。持ってない人は〝びらーでぃ〟に申し込む事。
○名＝名詞、冠＝定冠詞、女＝女性形、男＝男性形の略です。

ثوره حتى النصر

リスナッ　ータッハ　ラウサ

مِفْتَاحُ　دَارِنَا
ーナリーダ　フータフミ
我々の家の　鍵

我々の家の鍵
土地の日

يَوْمُ　الْأَرْضِ
ムウヤ　ィデルアル
日　土地の

パレスチナ人民の国家的権利
祖国パレスチナ解放運動
いつまでパレスチナ人の血が流れるのだろうか!!
パレスチナは全アラブの団結を必要としている

اَلْحُقُوقُ	اَلْوَطَنِيَةُ	لِلشَّعْبِ	اَلْفِلَسْطِينِي	
クークフルア	ヤーィニタワル	ビウャシルリ	ィニーィテスリィフル	
権利	祖国の	民族の	パレスチナの	
حَرَكَةُ	اَلتَّحْرِيرِ	اَلْوَطَنِي	اَلْفِلَسْطِينِي	
カラハ	リーリフタッ	ィニタワル	ィニーィテスリィフル	
運動	解放の	祖国の	パレスチナの	
إِلَى　مَتَى	يَنْزِفُ	اَلدَّمُ	اَلْفِلَسْطِينِي	
ーライ　ータマ	フジンヤ	ムダッア	ィニーィテスリィフルア	
まで　いつ	流れる	血が	パレスチナの	
فِلَسْطِينُ	بِحَاجَةٍ	إِلَى　بُنَادِقِ	كُلُّ　الْعَرَبِ	
ヌーィテスラィフィ	ャジーハビ	ーライ　クィデーナブ	ルック　ビラアル	
パレスチナは	必要として	を　団結	全ての　アラブ人の	

イツコのアラビア語講座

聞かせて、ベイルートの事を…　第2章　短い文　平田伊都子（イラスト・アラビア文字とも）

〝聞かせて、ベイルートの事を……〟
今、ベイルートでどんな残虐な大犯罪が、米国の指導の下、イスラエルの狡猾な手段によって行われているのか……納得のゆかない毎日の一般報道に、アラビア語学習同志諸嬢諸君もジリジリしていらっしゃるのではないでしょうか？ベイルートに飛んで行って、にっくきイスラエルの戦車〝دبابة〟(バーバッダ) を叩き潰してやりたい!!
遠く離れた日本で、胸が痛くて胸やけがして胃も不調のイツコめは、せめて同志諸嬢諸君と〝ثورة حتى النصر〟勝利の日まで闘うパレスチナの人々に励ましの言葉を送りたいと思います。パレスチナの人々のスローガンを学んで、大きな声で暗唱しましょう。不屈のパレスチナの人々に届くように……。

いよいよ第2章〝短い文〟に突入です。同時に必要最小限の文法も学んでいきますが、言葉の獲得を常に先行させる事をお忘れなく。何よりの証拠に、1番短いアラビア語文は、動詞なしの単語だけで成り立つんでしたっけ。ここまできて第一章をいたずら言葉に専念した、ふつつかな読みを酌取って頂けたかな？

【定冠詞】
١. アラビア語には不定冠詞はなく、ـٌ（タヌウィーン）をつけてその意を表わします。従って定冠詞がつくと名詞の語尾が変ります。
ex・（ンフータフミ）مِفْتَاحٌ → ＋ ال →（フータフミルア）اَلْمِفْتَاحُ
٢. ت、ث、د、ذ、ر、ز、س、ش、ص、ض、ط、ظ、ل、ن は、太陽文字（ヤーィシムャシ・フルハ）〝حُرُوفٌ شَمْسِيَةٌ〟と呼ばれ定冠詞のالは無音になります。残りは月文字（ヤーリマカ・フルハ）〝حُرُوفٌ قَمَرِيَةٌ〟と呼ばれlを発音します。
٣. 前置詞 لِ（～に）がつくと、次の様に省略。لِشَعْبٌ ＋ ال ＋ لِ → لِلشَّعْبِ
٤. 名詞に定冠詞がつくと、形容詞にも定冠詞がつきます。　ex・パレスチナの人民（ィニーィテスリィフル　ブウャシッア）اَلشَّعْبُ الْفِلَسْطِينِي
٥. 動詞（英語のbe動詞現在形）なしで立派な文章！　ex. 我々はパレスチナ人民です。
（ィニーィテスリィフル　ブウャシッア　ヌハナ）نَحْنُ الشَّعْبُ الْفِلَسْطِينِي

【格変化】
アラビア語の名詞（形容詞）には3つの格変化があります。下表はその規則変化で、勿論例外ありです。所有格が曲物で、使いこなせればアラビア語通。用法上の注意、特徴を列挙しておきます。
١. 2つの名詞をつなげる時、後の名詞は常に所有格。前の名詞には定冠詞をつけません。
ex・ある家の鍵（ンリーダ・フータフミ）مِفْتَاحُ دَارٍ　その家の鍵（リーダッフータフミ）مِفْتَاحُ الدَّارِ
٢. 名詞が3つ以上つながる時には最後の名詞に定冠詞をつけます。　ex・その家の戸の鍵（リーダッ・ビーバ・フータフミ）مِفْتَاحُ بَابِ الدَّارِ
٣. 所有格は材料を表わすこともできます。　ex・木の椅子（ンビャシゐ、ユーシルク）كُرْسِيٌّ خَشَبٍ
٤. 前置詞に続く名詞は所有格です。　ex・勝利まで（リスナッ　ータッハ）حَتَّى النَّصْرِ

格変化	名男	名男＋冠	名女	名女＋冠
主格(～は) ـُ, (冠がつくと) ـُ	勝利は نَصْرٌ ルスナ	その勝利は اَلنَّصْرُ ルスナッア	革命は ثَوْرَةٌ ンウトラウサ	その革命は اَلثَّوْرَةُ ウトラウサッア
所有格(～の) ـِ, (冠がつくと) ـِ	勝利の نَصْرِ ンリスナ	その勝利の اَلنَّصْرِ リスナッア	革命の ثَوْرَةِ ンィテラウサ	その革命の اَلثَّوْرَةِ ィテラウサッア
対格(～を) ـًا, (冠がつくと) ـَ	勝利を نَصْرًا ンラスナ	その勝利を اَلنَّصْرَ ラスナッア	革命を ثَوْرَةً ンタラウサ	その革命を اَلثَّوْرَةَ タラウサッア

誤解と偏見のない姿勢を

カット＝ブルハン・カルクトリイ

海外出張中の桜内外相に代わり須之部外務次官は、レバノン侵攻は遺憾であり、場合によっては、従来イスラエルにとっていたような態度が維持できなくなる、と警告しました。

しかし遠い国のことで、いやな重荷を背負わなくとも、と考える人が多いのでしょうか。いっこうに政策の変更のきざしをみません。

私は今回の事件は一般の市民、婦女子、幼な子を今まで以上に傷つけた、残虐きわまりないものであり、着のみ着のまま何処へ逃がれようもなく子供の手をとる父親、乳のみ子をかかえた母親の悲しい姿。自分自身がそうならないと、わからなくなっている日本人。なんというおそろしい世の中か。道徳性と伝統のあるという国民の、なせることか。日本人は何故緊急に行動をおこして助けあっていけぬのか。レバノンにおけるパレスチナ人の存在、またPLOの活動は法的根拠のもとにあり、戦場と化すためにあるのではないのです。

中東諸国に居住する若い女性の中には、将来、祖国パレスチナでユダヤ人とともに暮らす時のために、とヘブライ語を学ぶ人もいたと聞きました。私たちはこの美しい心を持つパレスチナの人たちのために誤解と偏見をなくし生きなければならないと考えます。中東、石油問題、あるいはPLOテロ集団というような誤解をなくし、政府はパレスチナ人の生活、生存権と自治権を真に擁護する外交政策をとるよう切に望みます。

（広島県　黒田峰子）

人間世界の理性とは

戦争の嵐に吹き荒らされた国々は、今なお混沌として居ります。生命を授かっている人間世界の理性は、どの様に受けとめている事でしょう。

国情による指導者の思惑で多くの人命が失われ、国民は過去の歴史の復習を余儀なくさせられています。

自国の行く末の不安を一掃するためには、人の命より、近代兵器が重んじられ、人の命はますます軽んじられる様です。こんな事にならないために、国民としては無惨に殺されるよりも、目もあり口もあり手もあるのですから、対立している国々の人達ともよく話し合い、お互いの立場をよく理解し、権力者の思惑で虫けらのように死ぬことを拒否しましょう。自分達が殺される寸前になっては間に合いません。「闘いの時になっては、おそいのです」。

（神奈川県　K・O）

新しく始る戦いのため

今は、米国政府へ期待するより、もっと、PLO自身が自主的に、何か行動をとった方がよいと思います。それが米国にPLOの存在を認めさせる事にもなり、また、レバノン国民、市民との連帯を大事にしていることを印象づける事で、今後のパレスチナ人の居住権交渉もより有利にしうるのではないでしょうか。

現在のイスラエルには、自省がなさ過ぎて、今後いろんな面で苦痛を味わってゆくと思います。

新しく始っている戦いの為そして、その終りの為がんばって下さい。

（匿名希望）

真に闘っている人々は

「ノルウェー医師の証言」届きました。怒りに血が逆流するのを感じました。

レバノン侵略、パレスチナ人虐殺を許せなくて、イスラエル大使館とアメリカ大使館へ電話で抗議し、サウジアラビア、エジプト、リビア、シリア大使館へ電話をし、PLOへのもっと強力な支援を電話でお願いしました。

時々日刊新聞に出るアラファト議長の声明や、「世界革命」に出たハミード代表の説明に、私の方が勇気づけられております。真に闘っている方々は強い、と感心しております。

（兵庫県　K・I）

力強く生きる姿

七月号、グラビアが良い。最悪の情況下の生活を力強く生きてる姿が伝わる。パレスチナの人々は偉大だと思った。グラビアをもっと多くしてくださるよう希望します。

その他、「中東政治地図の再編」「戦慄の侵攻作戦・パレスチナはどうなるか」は内容が濃かった。

（埼玉県　菅野克美）

何かしたい！

獣ベギンとイスラエルに反省を！

レバノン、パレスチナの老人や子供のために何か役立つことがあれば教えて下さい。

（三重県　S・S）

信じています

「赤旗」にて『血と砂と怒り』も毎日読みました。

苦難の中にも希望を失なわず耐えていられるパレスチナの方々と、侵略者と闘っていられるPLOの方々に神様の御加護のありますことを心からお祈りいたし、信じております。

些少でございますがカンパ（壱万円）小為替にて同封申し上げます。

（日本の一主婦　Y・H）

人類数千年の悪業を絶つ時

「パレスチナの祖国を必ず回復できること」これだけは確信していただきたいと思います。ベイルートの攻防など祖国回復の一道程にすぎないのですから、希望を見据えて生命を大切にして頂きたいと思います。

日本はかつて満州で、イスラエルと同様の行動をとり、その結果敗北しました。その敗北の様子は、日本人が日本人を見捨て、親が我が子を殺し、荒野を逃げ走るという地獄図でした。他民族に強いた非道が日本人にはねかえってきたのです。

私は、日本の現状が再び過去の轍を踏もうとしている事を危惧し、何とか道を改めたいと努力しております。

私が今、パレスチナの皆様に言いたい事は、日本が満州から追われたように、イスラエルも必ず敗北し、日本が体験した地獄の苦しみを体験するということです。パレスチナの皆様には希望と勇気を持ってもらいたいと思います。

そして、パレスチナの祖国が回復された時、人類数千年の悪業を絶ち、世界に平和をもたらす道を招いて頂きたいと願っています。アメリカは弱っています。その時は近づいています。

（埼玉県　村上武）

断固とした支援・連帯

イスラエルの侵略と暴虐を許さず、PLOパレスチナ人民の闘いに連帯・支援することを、我々は確認してきた。

我々は、調停者づらをしたレーガンこそが、真の虐殺者と考えます。パレスチナ人民とそのPLOの苦難にみちた不屈の解放闘争を日本の労働者階級は断固として支援・連帯する考えであります。

（日本労働者階級解放闘争同盟・岡山県委員会）

提案します

近年PLOの情況を見聞するに是非ともこの企画を提供実現して差し上げたく考えました。

同企画と申しますのはPLOに国連の議席を獲得するというものであります。いかがでしょうか。PLOの何れの方もそれに類する計画をもたれてはいないと存じますが。

（栃木県　T・N）

私はパレスチナの解放にもイスラエルの安全保障にも大きな関心を持つ者ではありません。国籍は日本のままですが、日本に侵略された諸国を祖国と考え、祖国の対日関係正常化を願い、細々と行動してきました。

一九八一年一月と十月に、イスラエルの駐日大使館と外務省に手紙で「ドイツから正当な賠償を取り、それを物質的基礎とし、パレスチナ人と共存する」ことを呼び掛けましたが結果は……。イスラエルでこの提案を国民投票にかければ……。

PLOの力で、この提案を広めることは容易なことではありませんか。一発の銃弾も一人のコマンドの死も必要とせず。

（千葉県　T・S）

編集長の手紙

六月以来、数え切れないほどたくさんの励ましの便りや電話をいただきました。今までに一度もお会いしたこともない方々がほとんどでした。イスラエル軍の残虐な攻撃と、破壊の犠牲者となった、パレスチナ人とレバノン人への限りない同情にかられ、何かできることはないかとの問い合わせも多くあります。この気持ちをとても尊いものと思っております。

しかし、私たちのお願いは、私たちの悲劇のなかにある事実と現実をさらに深く知り、理解してほしいということです。一時的な感情にとどまっていてほしくないと望んでいます。さらに、問題のもう一つの側面にも目を向けてほしいとも望んでいます。ユダヤ教徒たちも苦しんでいるということを忘れてはなりません。ユダヤ人という名の下に、そしてユダヤ人の悲劇が利用されて、彼らの道徳心が傷つけられています。

パレスチナ問題を解決するということは「ユダヤ人問題」をも解決することにつながらなければなりません。私たちは、真の犯罪人に対してだけ非難すべきなのです。

（アブドルハミード）

編集室

在日朝鮮人への差別を歌で告発しつづけるホン・ヨンウンのライブ・テープが、広島から送られてきた。彼がパレスチナ人のために歌をつくったというのだ。抑圧され、差別された者たち同士が感じとる〝痛み〟が、彼を駆りたてたのか。「生きのびておくれよ　子供達！」ベイルートまでもとどけとばかり絶叫する彼の唄に、私は不覚にも落涙した。（祗）

前代未聞。参加者全員がアラファト側とベギン側に分かれて、論議し合うという会合に出席した。

何が生まれてくるのかと思いつつ、ベギン側の「とにかく力の論理。PLOは壊滅……」には体が熱くなる。気がつくと「だから今教科書問題が日本で……」と双方すごい迫力。

とにかく、言いたい放題。PLO側にはベギン側の発言にちらほらあきれ顔。論争じょうずになりたいと実感した。（貴）

アメリカの対ソ核戦略の要として、アジアの東に韓国と日本、西にイスラエルがある。韓国にはすでに六百発もの核弾頭が配備されイスラエルにも、核弾頭のほかに原爆数個以上が保有されている。アメリカの第三世界抑圧政策と一体になって、その強い二橋頭堡の役割を担う、このアジアの両極に位置する国々の棍棒政策は自国内のみにとどまらない。周辺国の人民の動きまでをにらんでいる。私たちの「より良い社会」実現の願望をも警戒している。（抄）

広島を訪れた直後から何も食べずに泣き通しだったパレスチナの画家のジュマーナ・フセイニー女史。久しぶりに広島を訪問しイスラエルの侵略について訴えながら「ヒロシマの影を見て生きてきた」と語ったジュマーナさんのことを想った。ベイルートの彼女のアトリエも吹きとばされているかもしれないと思うと胸が痛む。イスラエルは画家・作家・詩人たちをも殺している。（関）

OUR VISION

崩壊から救うものは何か——

（PLO駐日代表 F・アブドルハーミド）

PLOがベイルートから〝疎開する〟ことに原則的に同意したことで、気の早い評論家は「イスラエルの完全勝利、PLOの決定的敗北」と評し始めたが、果たして事実はそうなのか。

イスラエル侵略のねらいは、何よりもパレスチナ人民が祖国に帰還し、民族自決を回復し、独立国家樹立のために燃やす悲願をうち砕くことにあった。それは、具体的には、彼らが〝テロリスト〟という呼び方をしているPLOの構成員を、出来るだけ大量に殺りくすることであった。もとより、ベギンやシャロンらイスラエルの政権担当者たちが選んだ道は、共存の道ではなく、パレスチナ人民の抹殺計画であり、レバノンを舞台に展開した新たなホロコーストであった。国際世論の孤立を深めたベギンは、それでも歴史の教訓を読みとろうとしない。自らの教訓はもとより、ベトナムでドロ沼を経験したパトロンのアメリカの教訓も、読みかえして見ようとしない。

PLO壊滅をねらったベギンの意図に反して、かえってパレスチナ問題が中東の核心をなすものであり、しかも民族自決権が問題の根源であるという事実を、イスラエルのホロコーストによって、国際社会は、新たな思いをもって深く受けとめた。パレスチナ問題がお情けだけで処理すべき〝難民〟問題ではなく、民族自決にかかわる政治問題として解決するためには、国連安保理事会の二四二号決議を修正しなければならないという世論がひろがっている。この動きは、キャンプ・デービッド体制に批判的だった西欧諸国に、特に顕著である。

例えば、これまでイスラエルの友であったミッテラン仏大統領が、ベイルート侵攻をナチスの〝血の報復〟になぞらえて〝オラドール〟を認めることは出来ない、と非難した。彼は、中東問題の根源にあるパレスチナ問題から切り離し〝ベイルート問題〟を、根源にあるパレスチナ問題から個別にとり出して処理しようとしたが、これに失敗した。こうした経過によって、今日の国際社会はイスラエルが即時無条件でベイルートから撤退するよう要求し、中東の恒久平和の実現をめざして、積極的な解決を図ろうとする新しい動きを始めている。

このような認識をもつようになったのは、西欧の首脳だけではなかった。アメリカの世論も、また、アメリカ政府の政策決定に影響力をもつ専門家の中にも、こうした明確な認識が定着してきていることは事実である。

もちろん、事実認識を理論的にもつこと、とそれをふまえて、一つの政策を決定し実行することの間には、依然として距離がある。レーガン政権の内部にも、中東問題の事実認識では一つの変化の兆しがはっきりと見られる。にもかかわらず、それを実行に移すことは、別のことである。

中東問題のカギは、アメリカがすべて握っている、とアメリカ政府首脳は何度もくりかえし公言してきた。イスラエルに圧力をかけられる唯一の政権であることも、自認してきた。しかし、もしそうなら、今回のレバノン侵略でもイスラエルに対して影響力を行使しジェノサイド政策をやめさせるよう、少くともベギンが理性をとりもどすよう、働きかけてしかるべきではなかったか。

レーガン大統領は、ハビブ特使を任命し〝調停〟にあたらせたが、アメリカの立場をむき出しにしたために、〝調停〟は〝直接介入〟の別名にすぎないことが見ぬかれて、効を奏することはなかった。面子をなくした、そのレーガンは、いま、解決の端緒を見い出そうとする最終段階で、アメリカの体面を保つために、一切の責任をイスラエルに転嫁しようとしている。

PLOが、一定のグループでも軍団でもなく、パレスチナ人民

VOICE OF PALESTINE

堕ちた荊冠—イスラエルを

の悲願のシンボルであるがゆえに、これを壊滅させることが不可能であることを厳正な事実としてアメリカが認めることが最も重要である。そのためにもアメリカ人民に望まれるのは、口先だけのあいまいな批判的声明にとどめるのではなく、イスラエルのジェノサイドをやめさせるよう、アメリカ政府に働きかけることである。

アメリカが、そのための責任と役割を果たせないのであるならば、アラブ諸国におけるアメリカのイメージは完全にそこなわれ、国連のもとで中東問題の解決をめざした国際舞台に登場することを、期待するアラブ人は一人もいなくなるであろう。

PLOの要求は、アメリカがPLOを承認し、直接の交渉を開始することである。それが彼らの準備した出口を見い出せない〝ベイルート問題〟の解決の基本である。そしてこの道こそ、中東問題の根源にある〝パレスチナ性〟の実相を見すえた対応の意味である。

考えてみると、ベイルートは二カ月以上の長きにわたって、イスラエルによって包囲されてきた。この間にイスラエル軍は、電気・ガス・水道・食糧・医療品などを切断した。同時に、市民の頭上には、連日にわたってアメリカが援助した、残虐な禁止兵器を使って爆撃を加えた。教会や病院、保育園なども爆撃の対象からはずされることはなかった。にもかかわらず、西ベイルートを守る五十万の人民は降伏を拒み、抵抗をつづけた。包囲している者たちは、国際世論の非難によって包囲された。ベギンは、新たなホロコーストの下手人として、ユダヤ人たちがナチスの迫害を受けたことによって負った、崇高な犠牲者としての荊冠を、地にたたき落としてしまった。イスラエル国民は、いま、この堕ちた荊冠を見つめながら、深刻にイスラエルの将来を考えている。かつてのヨーロッパ社会における差別が烈しかったために、ユダヤ社会はゲットーに自らを隔離した。そのゲットーは、特殊な排外主義的な精神構造を形成させた。それは「ユダヤ人にあらざる者は人にあらず」「ユダヤ人にあらざるものは敵なり」の二つの考え方である。〝ゴイーム〟（外人）という言葉が、その精神構造を表わす典型的な例であろう。

大量虐殺の手段によって、追い出したパレスチナ人たちも、ベギンやシャロンにとっては、その罪に対して当然の報いを覚悟しなければならないゆえに、憎悪と恐怖の対象である。石もやがて叫ぶことを知っているから、自らの大量殺りくの罪を、いかに偉大なる功績としてたたえようとも、罪の意識が残るはずである。だからこそ、追い出した筈のパレスチナ人たちの頭上に、砲爆撃を加えると言うのだろうか。

理性を失なった老人には、ベイルートがベルリンに、アラファトがヒットラーに見えてきたとでも言うのだろうか。その狂気と運命を共にさせられるとしたら、イスラエルのユダヤ教徒やユダヤ系市民にとっては、大変な屈辱にちがいない。

もはや老人の狂気にとどまるものではないベギンの自滅政策——それは玉砕主義であるが——と、運命を共にすることになる。そのことに目覚めたイスラエル市民が、抗議の声を高めているのは当然である。

ベギンは、狂気の侵略でイスラエルを守ろうとしたが、彼の玉砕精神は、イスラエルの社会的な内部崩壊を早めた。のみならず、ナチスの犠牲者としての崇高なイメージをイスラエルだけでなく世界ユダヤ共同体の構成員の一人一人からも奪った。この一事をもってしても、どこに「イスラエルの完全勝利」を謳歌すべき兆しが見えるというのであろうか。いつも支配者は「倒れてなお目が開かれた者」がもちつづける強靱な希望の力を知らない。

そして、軍事的優勢を誇示して、あらゆる残虐の限りを尽したことによって、国連がパレスチナの分割でつくりあげたイスラエルという国家は、その成立の三十四年めにして、崩壊の危機にさらされている。この国の成立を支えてきた神話が、ホロコーストによって崩れ、「犠牲者ユダヤ人」の荊冠は地に堕ちたのだから。

日本の画家が描く パレスチナ

画題にかえて——片寄未嗣

横浜市神奈川区白幡向町189

アンネ・フランクの短かかった、悲しい生涯。
それは今も全世界の人々の心に、
その愛らしい映像を残している。

だが今、昨日の被害者は、恐るべき加害者として、
無数のパレスチナのアンネ達を虐殺している！

人はどこまで愚かであればよいのか
賢明の故に呪われてゆく民たち……。
貴方たちは、この終末といわれるこの期に、
美しいもの、そして明日を扼殺している！

それなのに…どうして生きてゆけるのか——。
アンネ・フランクは、
そんな国には住めないだろうし、
住むことはないだろう。

片寄未嗣　　1982. 8.

●略　歴●

1921年	東京生れ
1941年	諷刺漫画誌「カリカレ」参加
1960年	前衛美術会会員
1973年	才2回・国際平和諷刺画展で才1位受賞
1979年	キューバ、ユーモア美術館に作品寄贈
1980年	「戦後漫画思想史」未来社より刊行

今月の詩

ベイルートのカルバラー(1)の悲劇

ファイズ・アフマッド・ファイズ

ベイルート　全世界の人々のアイドル　　ベイルート　大地レバノンの心
ベイルート　天国の花園に似て　　ベイルート　全世界の人々のアイドル
子供らの笑いさざめく目の　　ベイルート　天国の花園に似て
こなごなになった鏡
今それらかけらの星々の煌めきで
この町の来る夜　来る夜は明るい
血の頬紅の
化粧で　前にも増して輝き出した顔
今それら眩いばかりの光で
この町の路地という路地は明るい
今燦然と輝く　大地ベイルートの地は
ベイルート　全世界の人々のアイドル
ベイルート　天国の花園に似て
破壊された家々は　廃墟と化した市街は
王ダリウス(2)の宮殿に劣らず
戦士らはアレクサンダー(3)大王の
羨望の的にもなる程
少女らはライラー(4)のように美しく
この町は天地創造の古よりあり
この町は未来永劫に不滅

一九八二年六月十九日

訳　片岡弘次

註

（1）予言者マホメット（五七一～六三二年）の後に続く正統カリフ時代（六三二～六六一年）は、第四代カリフ・アリー（六五六～六六一年）が、ウマイヤ・カリフ朝（六六一～七五〇年）を立てたムアウイアに滅ぼされて終った。そのアリーの次男ホサインは父と兄の仇を討つべくイラクのカルバラーの地に赴いたが、衆寡敵せず恨みを呑んで六八〇年、返り討ちに会い全滅した。

（2）アケメネス朝ペルシャの王（在位BC五二二～BC四五六年）。東はインダス河畔、西はマケドニアに至る大帝国を築き、その宮殿の跡はイラン南部のシーラーズに残り、ペルセポリスの宮殿の名で有名。

（3）古代マケドニアの王（在位BC三三六～BC三二三年）。ペルシャ帝国を制圧しインドのパンジャーブ地方まで遠征。アジア・ヨーロッパにまたがる大帝国を築いた。

（4）七世紀後半アラビアの砂漠を、その美しさの余り部族長の息子カイスを狂人にまでさせ、さまよい歩かせたという程の美女。

✠この詩は、「ロータス」誌編集長のファイズ氏（「びらーでぃ」5月号参照）によって、6月19日ベイルートで作られました。パキスタンの "View Point" 誌に載ったこの詩を、大阪外国語大学の片岡弘次氏が、本誌のためにウルドゥ語から訳して下さいました。

フィラスティン・びらーでぃ　八・九月号　第三巻・第九号　一九八二年九月二十日発行　毎月二十日発行　一九八〇年一月十九日第三種郵便物認可　年ぎめ購読料七、二〇〇円（学生半額、法人一四、四〇〇円）一冊六〇〇円（送料とも）

日本の画家が描く パレスチナ ⑦

「無題」（一九八二年・水彩・P-30号）●片寄末嗣

フィラスティン・びらーでぃ　8・9月号　1982年9月20日発行
編集発行人／ファトヒ・アブドルハミード
発行所／PLO駐日代表部
〒153 東京都目黒区青葉台1-4-8　☎ (03)463-2840
（分室）〒150 渋谷区円山町24-1 K.M.アパートメント 101 ☎ 496-8423
印刷所／株式会社 太平印刷社

FILASTIN BILADI Aug.-Sept. 1982 No.32
Edited & Published by Fathi Abdul-Hamid, Director
PLO Office, Japan; TELEX: J 27524 FATHI
1-4-8 Aobadai, Meguro-ku, TOKYO, Japan, 153

●購読料のお振込みには、次の口座を御利用ください。三和銀行渋谷支店（普通預金口座345-125793）、三井銀行渋谷支店（普通預金口座164-4280263）、三菱銀行渋谷支店（普通預金口座135-5679952）、第一勧業銀行渋谷支店（普通預金口座162-1227560）口座名は、いずれも「フィラスティン・ビラーディ」です。　また郵便振替は、口座番号、東京8-62019、口座名は「びらーでぃ」業務部です。

定価 600 円

ISSN 0389-6463